

シンポジウム
「農業分野の仕事づくりを釜ヶ崎で」
報告書

Report on the Symposium
“Toward Creation of Agriculture-related Jobs in Kamagasaki”

綱島 洋之 編
Tsunashima Hiroyuki *Editor*

大阪市立大学都市研究プラザ

シンポジウム

「農業分野の仕事づくりを釜ヶ崎で」

報告書

Report on the Symposium
“Toward Creation of Agriculture-related Jobs in Kamagasaki”



2021年4月

大阪市立大学都市研究プラザ
綱島洋之 編

なぜ「農福連携」か？

日本社会において「お荷物」扱いされてきた
「農」と「福」だからこそ、連携、いや、
連帯しなければならない必然性がある

はじめに

仕事づくりを試みるときに、人手不足の分野に目を付けることは、以前から定石である。そして今、人手不足が進む農業分野で仕事をつくろう、農業分野と福祉分野が連携しようということで、「農福連携」が注目を集めている。

実は以前から釜ヶ崎でも、いくつかの案が浮かんだり消えたりしてきた。編者も2011年から、大阪府柏原市にある耕作放棄地を活用して農園を開設し、野宿労働者や就労に困難を抱える若者と一緒に、野菜を栽培したり販売したりということを試みてきた。そして、高齢の野宿労働者と就労経験に乏しい若者が協働することで新たな可能性が生まれるという、貴重な経験が得られた。

しかし、案の定、いくつかの課題に直面した。技術的な問題もさることながら、そもそも、何のための仕事づくりなのか。なぜ農業分野でなければならないのか。つまり、目的意識が参加者やその他関係者の間で共有されているとは言い難いのではないのか。例えば、追求すべきは、誰にでもできる仕事なのか、それとも、その人にしかできない仕事なのか。また、言われたことだけやればお金がもらえる仕事は確かに楽なのだろうけども、建設現場などで「言われたことだけやればいい」と言われて複雑な思いをされた方もいるはずである。

そこで、釜ヶ崎で有意義かつ長続きする取り組みのために何が必要かを議論する機会を設けようと考えた。長年にわたり釜ヶ崎に関連する問題について講演会などを開催してきた団体「釜ヶ崎講座」に協力を仰いだところ、「釜ヶ崎講座・仕事づくり集中講座」の一環としてシンポジウム形式の企画を開催することができた。仕事づくりや社会的企業に関心あるいは疑問をお持ちの方、農作業に興味があるけど参加する機会をなかなか得られない方、これまで釜ヶ崎から何らかの形で参加してきた方などに、広く参加を呼びかけた。

本企画では、釜ヶ崎にゆかりがある実践の経験を共有したうえで、農福連携の先進事例を率いておられるお二人の講師にお話を伺うことにした。埼玉県熊谷市から新井利昌さん、神奈川県藤沢市から小島希世子さんをお迎えした。お二人は、後にそれぞれ『農福一体のソーシャルファーム』『ホームレス農園』という著書にまとめられた取り組みを続けてこられた。釜ヶ崎には釜ヶ崎なりのやり方があるかも知れないが、外部の経験を応用できる可能性もある。このことを考えるためには内外の経験を突き合わせてみる以外に方法はないであろう。

この企画の内容を採録し、後日談を付け加えたものが本報告書である。

目次

はじめに

第1部	シンポジウム採録	
第1章	開催のねらいと現場からの報告	1
	1. 開会挨拶	
	2. 趣旨説明	
	3. 雁多尾畑農園（大阪府柏原市）	
	4. ひと花プロジェクト（大阪市西成区）	
	5. 黒部の居場所ひまわり（京都府京丹後市）	
	6. はばたき作業所（大阪府八尾市）	
第2章	講演	27
	1. 農と食を職に—小さな農園から始める未来への挑戦	
	2. Social Firm—ローカルを極めグローバルにつながる	
第3章	報告と講演を受けて	51
	1. パネルディスカッション	
	2. 閉会挨拶	
	付録 来聴者アンケート結果	
第2部	シンポジウムを終えて	
第4章	各登壇者と一参加者の後日談	63
	1. 雁多尾畑農園—マスコミ取材を受けて考えたこと	
	2. 黒部の居場所ひまわり—農作業部分の後日談	
	3. はばたき作業所—その後	
	4. ソーシャル・ファームからソーシャル・ヘルスへ	
第5章	本シンポジウムの総括と学術的意義に関する覚え書き	79
おわりに		93

第1部 シンポジウム採録

第25回釜ヶ崎講座講演の集い

仕事づくり集中講座5

農業分野の仕事づくりを釜ヶ崎で!

農福連携と産消提携の先進事例に学ぶ

日時：2019年12月14日（土）17:30～20:30

会場：エルおおさか 南館1023号室（詳細ウラ）

参加費：資料代 500円

事前申込不要

講演:

新井利昌氏(埼玉福興株式会社・代表取締役)

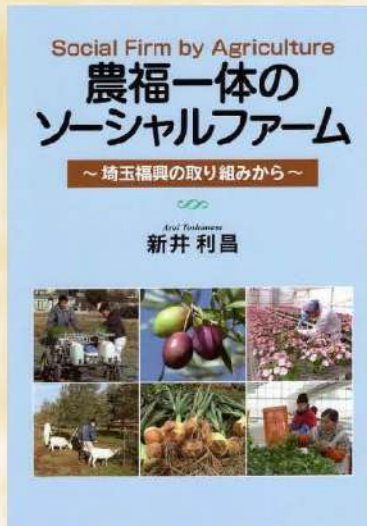
著書『農福一体のソーシャルファーム—埼玉福興の取り組みから』創森社, 2017年

小島希世子氏(株式会社えと菜園・代表取締役, NPO法人農スクール代表理事)

著書『農で輝く! ホームレスや引きこもりが人生を取り戻す奇跡の農園』河出書房新社, 2019年

釜ヶ崎にゆかりがある事例の報告:

ひと花センター, 大阪府柏原市, 八尾市, 京都府京丹後市からなど



主催 (問い合わせ先ウラ):

釜ヶ崎講座, 非営利特定活動法人 釜ヶ崎支援機構, 大阪市立大学 都市研究プラザ

本企画は、公益財団法人ユニバーサル財団研究助成(2018年度)「産消提携から農福連携に継承できるもの」、公益財団法人トヨタ財団2018年度研究助成プログラム「農福連携において労働者の自律性を高めるために一産消提携の経験を援用する試み」、科学研究費助成事業「産消提携から農福連携に継承できるもの—現場実装から国際発信へ」(研究代表者: 綱島洋之)の助成を受けて実施されます。

第1章 開催の目的と現場からの報告

開会挨拶

渡邊充春（釜ヶ崎講座）

みなさんこんばんは。今日の主催の一団体であります釜ヶ崎講座の代表を務めます渡辺と申します。よろしくお願いいたします。本日は第25回釜ヶ崎講座、私たちの講演のつどいってことで今まで25回を迎えておりますが、その中の仕事を作りの集中講座ということで、一昨年暮れから釜ヶ崎における仕事づくりということで、集中講座を始めて現在までご会合を迎えております。フリースペースのショップとか作業所とか、それからワーカーズコープとか様々な形の取り組みをする中で、今年は大阪府で変更になりましたハートフル条約の解説をナイスの飛田さんの方にさせていただきまして、一つまとめをしながら次のステップということで今回このような形で、農業分野の仕事を釜ヶ崎で、ということで先進事例に学びながら、また現実的に釜ヶ崎の人たちとの交流をしながら、論議を進めていきたいという趣旨で開催しております。もう少し細かな趣旨は後程主催者の一つであります釜ヶ崎支援機構の松本事務局長の方から趣旨説明もありますが、そういう形で今日はやっていきたいと思えます。いつもは6時半過ぎからはじめて8時半ぐらいまでですが、今日は5時半から、ちょっと長丁場ですが開催したいと思えます。途中で休憩を入れます。それから、せっかくこういうことですので埼玉それから神奈川そして釜ヶ崎の周りで連携をしている諸団体から来て頂いて、全国各地の先進的な取り組みと釜ヶ崎を取り巻く諸団体の取り組みを混ぜながらやっていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたしますと思えます。なるべく前の方で聞いていただけると有難いと思えます。途中でいろんな質問コーナーもありますので、宜しくお願ひしたいと思えます。そうしましたら、簡単に枠組みだけ言いましたけれども、この講座という形で何をみんな学び、そしてみんな検討しながら何を探していきたいかというこの基本的なところの趣旨をNPO釜ヶ崎支援機構の松本さんの方から、事務局長さんの方からお願ひしたいと思えます。開会の挨拶ということになります。

趣旨説明

松本裕文（釜ヶ崎支援機構）

皆さんこんばんは。釜ヶ崎支援機構の松本と申します。今日は始めの挨拶と締めくくりの話をしてくれと言われまして、私最も農業から縁の遠い男でございまして果たして役が務まるのかなあという風を感じています。何かがこれもそういう兆しのようなものかなあと思ひまして、お受けさせて頂いております。

今、私はNPO法人の事務局長ということで務めさせて頂いておりますけれども、本当にNPO法人にも色々ありますけれども、地域のため、それから色々な困難な方の仕事づくりのため、そういう思いで活動するわけですけれども、実際に活動始めてみると全然その理想的なこととはかけ離れた世界が待っている。とにかく締切、締切、締切。売れてる漫画家かと思うくらいいろん

な受託事業やればやるほど色んなことに追われてしまうということがあります。私は子供が今 4 歳になりまして共稼ぎですけど、やっぱり NPO 法人なんかそうなんですけど、これで賃金体系が昔やったら働いて頑張れば給料が良かったという 70 年代 80 年代こういう時代もあったわけですけど、今は賃金もあげられない、そういった中で逆に NPO なんかを導入されてなかなか行政が手が回らないところをやって、ってことになっている。その結果、なかなか僕自身はこんなこと頑張ろうみたいなことで思っているわけですけど、なかなか子供育てるようになるとすごいハードです。私今保育所に通わせてるわけなんですけれども、そうすると明日起こしてから子供に対しては、「早く何々しなさい、早くご飯食べなさい、早く服着替えなさい、早く歯磨きしなさい、早く行きますよ」って言って。子どもって 3 歳 4 歳なのに追い立ててやらなかったらもう回らない。こういう世の中になっちゃってます。子供が「早く」って覚えて、藪蛇のように大人の方が「早くやって」みたいな形で攻められて、ますますしんどくなっていくという。こういう状態があったりします。

そういった今のいろんな活動をされている方、そういう状況にあるのかなと思ったりするわけなんですけれども、農業っていうのはそういうものじゃないんですよ。締切があつてすぐ効果を出しなさい、早く出しなさいみたいなことではなくて、ゆっくり植物が変わっていくのに合わせながら、出来上がっていく、失敗するかもしれませんが、それを受け止めながら時間を過ごしていく。このあり方っていうものが実はこれからの世の中はもう 1 回思い出していかないといけないんじゃないかな、そういうふうに僕は思っています。釜ヶ崎で農業と連携。農業で何とか仕事できないかということで、何年も綱島先生と一緒にさせて頂いてるわけなんですけども、なかなか殻を破れない。破れないんですけれども、これがやはり今のこれからの日本にとってはきっと必要なことになるに違いないと、そういうことを思いまして、私たちは農業を続けていこうと、そういうふうに思っております。

よく「命が大切です。人って一人一人違ってそれぞれで大切なんです」みたいなことを言いますけれども、人権とか理想的な部分、そういう抽象的な概念で見つけられるその大切さっていうものではなかなか実感できないわけです。ところが農業で一緒にゆっくりとした時間を過ごし、自然の変化を知りながら生きていくことがあるんだなってことを思い出す、こういったことの中では自然に命を大事にするのはどうしたらいいのかが見えてくるんじゃないかと思えます。僕たちはホームレス状態の方の仕事や生活を支援するということでやっています。

釜ヶ崎に居てる日雇い労働者の方達っていうのは、よくこんな風に言われるんです。好きで野宿してるんやろう、と。ホームレス状態になってるけども、それは自分で頑張らずに選んでやっているんだ、ということが言われます。確かに一面の真理なのかもしれません。今この世の中で生きていくためには、たくさん本当に我慢しなければいけないことがある。だから野宿している人たちを地域から排除しようとする方たちもいますけど、そうした方たちがどんな思いを持ってるかと言うと、「俺は家族のために頑張ってるよ。会社でいろんな苦情とか一杯持ってるけれど、そう言ったらクビになってしまうから辛抱してやってるんや。野宿してる奴らはどうや。好きでそこらへ寝っ転がって好きなことやってるだけやないか」こういう論理で言わはる。でも僕はどっちも今大変なことになっている。そんな中でどうやって時間の使い方と言うか、人との関わり方をシェアできるのかっていうことが本当には大事なことなんだろう、というふうに思います。そのことが少し農業を通して僕は見えてくるんじゃないかな、というふうに思っています。

もう一つはこの仕事づくりの集中講座ということでやっている中では、フリーヘルプという兵庫県のリサイクル衣料でチャリティーショップをやっているところがあるんですが、そこから学ばせてもらうということで、これも来年ぐらいですね、なんとかの釜ヶ崎の方で展開していきたいなというふうに考えておるところなんです。フリーヘルプさんの代表の方からお聞きしている中では、やっぱりリサイクルの衣料に関しても地産地消でいかないといけない。例えば寄付で衣類とかが北海道から送られてくる。そうすると送料から何かコストがいっぱいかかっている。燃料とかそういったものを使って運搬しているという状況だ。そうではなくて、地域の中で不要になっている衣類を使い尽くしていくという循環を作っていくことが大事なんだ。そういうことを言われています。僕はやはりそのことも遠くにある美味しいもの食べるって事じゃなくて、自分たちの地域にある大阪で農業をやるっていうと、なかなか厳しい中で、私たちもこの土地でやったらどうかって言われるんですけど、実は前は工場が建っていて化学的に土壌的にダメなんですと言われて頓挫しちゃったりとか。こんなことがあったりして、なかなか都市の中でどうやったらいいかわからないっていう部分があるんですが、しかし自分たちも作物を作ることに関わりながら、そしてそれをいろんな方に、例えばひと花センターってところで、後で紹介しますが、そこで採れた野菜を地域のコミュニティ食堂で役立てながらやって、これはまだ仕事というところまで行けていないかもしれませんが、新しい世の中の構成の仕方をやっぱり試していきたいと僕は信じております。これをできたら、みんながもしかしたらそんなにゆとりのある生活じゃないかもしれないけれども、ゆったりとした生き方を選んで行ける、その仕事をできる場所として活性化していくところまで是非とも進めたい。そういう思いがありまして、今日は埼玉の新井さんと藤沢市の小嶋さんにお越し頂いているということです。今日は皆さん、会場からも色々ご意見を頂きながら進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

報告(1) 雁多尾畑(かりんどおばた)農園

網島洋之(大阪市立大学)・山口信次(びあどりーむ)・

小手川望(萩之茶屋周辺まちづくり合同会社)

網島：今回私がこの企画の言い出しっぺでありまして、そしてこれからご説明する事例、実は企画のきっかけともなったものがあります。そして今日はるばるお越しいただいた新井さん、



なぜ農業分野か？

- 仕事づくりの3原則
 1. 労働者が納得できる
 2. 何らかの社会的課題の解決に資する
 3. 他の労働者の仕事を奪わない
- 農業分野の特徴
 1. 「農作業の魅力は人間と作物の共生関係から得られる感動である」
(津野幸人, 2005「再生紙ならびに不織布のマルチングによる雑草抑制技術の開発とその背景」(2) 雑草研究30(4):300-309)
 2. 「農的福祉力」
(池上甲一, 2013「農の福祉カーアグロ・メディア・ポリスの挑戦」農文協)
 3. 耕作放棄地の増大が社会問題化されている
 4. 農は、雇用に依存せず自力で収入源を創出する営みである。椅子取りゲームの喻になぞらえれば、就職は資本や行政が用意した「椅子」を奪取する行為であるのに対して、農は自然界にあるものを利用して自力で小さな「椅子」を作る営みである。
(批稿, 2015「自律への希望」後編)、『フリーターズブルー』3:132-147)

これまでのプロジェクト

- 耕作放棄地を再生して就労機会づくりを試みるアクションリサーチ
大阪府柏原市雁多尾畑(かりんどおぼた)
- 2011～2018年度
- 参加者
 - 若者向け就労支援事業体(2014年度より縮小)
 - 釜ヶ崎支援機構・相談支援事業の利用者(2014年度より)
 - ホームレス労働者(2015～2016年度募集拡大, 2017年度より縮小)
✓ 日額5,700円(研究費や収穫物の売り上げから工面)
- 規模
 - 週2～3日作業, 2016年度末までに 延べ3655人・日が就労
 - 約30aを耕作, 常時20種類近くの野菜を栽培, 大阪市内で販売
- 2019年度～
 - 上記の方法では長続きしないことが判明
 - 無報酬で作業したい人のみ参加
 - 新しい取り組み・ある参加者の独立, おとな食堂

小島さん、関東からはるばるお越し頂いてますけども、釜ヶ崎に来られるのが今日が初めてということで、先ほど地域の中をご案内してきたところなんですけども、まず釜ヶ崎がどういいう地域かというところから確認しながら進めていきたいと思います。

釜ヶ崎とはどういう地域か。一番わかりやすいのはこれなんかかなと思ったんです。釜ヶ崎における日雇い労働の求人数の変化を示したものです。一番求人数が多かったところ、1990年頃ですね、バブル景気の頃です。それ以前には関西空港の建設で作業するという仕事がたくさんあった。それからその後崩壊して、求人数ガクッと減りますけども、阪神淡路大震災の直後の復興特需ということで、また建設関係のお仕事が勝手にいっぱい来たんだけど、それが一段落つくとまた求人数がガクッと減って、そして2008年のリーマンショック以降は戦後最低レベルを記録し続けていると、そういう状況があります。このグラフからいろんなことが読み取れると思うんですけども、ここで何故釜ヶ崎という場所で仕事づくりという課題に多くの人に取り組んできたのか。まず釜ヶ崎は日本最大の日雇い労働者の街というふうに呼ばれてきました。そして先ほどグラフで見ていただいたように、建設労働、建設現場で働く労働者が沢山、多くの方が建設現場で働いてこられました。いわゆる3K、新聞社の名前ではありません、きつい・汚い・臭いという作業の3Kです。こういう仕事は労働者としての誇りがなければなかなか続けられないのではないかと私は個人的に思っています。そういう誇りというものがあつたからこそ、これまで社会を底辺から支えてこれたのではないかと思います。一方でこのような日雇い労働、まさに元祖不安定雇用といって良いと思います。そして、野宿生活とも隣り合わせの働き方です。まさに資本主義経済の矛盾が集積する街と呼んでよかろうと思います。さらに2000年代までは生活保護制度からも多くの方が排除されてきたという事情があります。これらの矛盾に対して、私たちはどのように向き合うべきなのか、そして労働者としての誇りにどのように応えるべきなのか、ということ考えた時に、仕事を作り直そうと考えてみることも良いのではないかな、と思います。実際に釜ヶ崎では高齢者特別清掃事業という形で55歳以上の高齢の方に、清掃の仕事を紹介するという事業が行われてきますけども、55歳未満の人はどうしたらいいとか、それだけでは足りないと思える側面も多々あります。

そして何故農業分野かという疑問が次に出てくると思います。仕事づくりというものを考えるときに、まず満たさなければならぬ原則があると思います。一つ目には働く労働者自身が納得できること。そしてなんらかの社会的課題の解決に資すること。そうでな



いと、色んな人を巻き込むことが難しいから。そして第三に他の労働者の仕事を奪わないこと。これらの三つを農業分野っていうのは満たしているんじゃないかって私はそう考えてきました。一つ目のことに関しては、農作業の魅力というものが社会の色々な所で言われてきています。農作業の魅力、人間と作物の共生関係から得られる感動である、なんてことを言う学者もいます。あるいは農的福祉力っていう言葉もあります。つまり農業には福祉の要素がある。そして上の2番目に関する事なんですけども、最近耕作放棄地っていう、耕す人がいなくなって荒れ放題になっている農地が増えてきている。これが社会問題として考えられるようになってきました。それから他の労働者の仕事を奪わないという点については、以前こんな文章を書いたことがあります。「農は雇用に依存せずに、自力で収入源を創出する営みである。椅子取りゲームを例えになぞらえれば、就職は資本や行政が用意した椅子を奪取する行為であるのに対して、農は自然界の中にあるものを利用して、自力で小さな椅子を作り出す営みである。」今でも私の思いは変わりません。

ということで、実際にやってみたんです。釜ヶ崎支援機構や、色々な就労支援事業をやっている団体などの協力を得て、2011年から耕作放棄地を再生して、仕事づくりを試みるっていうアクションリサーチと言いますか、一種の実験ですね。これを大阪府の柏原市雁多尾畑という地区にある農地、耕作放置状態が続いていたんですが、その地主の方がここの農地を使っていいよということで使わせて頂けたのがきっかけです。それで色んな方が参加してくれました。若者向けの就労支援やってる団体、それから釜ヶ崎支援機構を利用している生活保護受給者の方とか、あるいは野宿生活をしておられる方。

野宿生活をしておられる方には作業しに来た日は高齢者特別就労事業と同じくらいの日当を払っていました。週に2,3回ぐらい作業して、2016年度末までにはここに述べ3655人って書いてありますけども、たくさんの方に作業しに来ていただきました。約30aを耕作して20種類近くの野菜を常時栽培して、大阪市内で販売するというようなやり方です。しかし最近になってこのやり方ではちょっと長続きしないのではないかなってことがだんだん実感されてきました。今ではその規模を縮小して、無報酬で参加したい人のみ参加して、新しい取り組みとしては、これまでに十分な経験を積んできた方にはもう独立して作業してもらおう。それ以外はおとな食堂という新しい取り組みを始めたりしています。柏原市、大阪の東の端っこにありまして、最初はこんな感じで荒地を畑に変えて、さらに就労支援を受けている若者とそれから高齢の野宿している方が一緒に作業することによってこんなことがあったんで

若者と高齢野宿者の協働



若者と野宿労働者の出会い(2)

- ・ 高齢野宿者の多くは農漁村出身であり、親の仕事ぶりを見ていたので、さまざまな農具の使い方が分かる。初めて見た道具でも、使い方を類推することができるという。また、高齢者ゆえ人生経験が豊富であるという自信もある。だから、若者たちに道具の使い方や組仕事の機微を教えることができる。
 - ・ 一方で「自分のような人生で失敗をしたことがある人間が指導しているのか」という迷いを抱えていた
 - ・ 一部の若者が「やる気がなさそうに見える」ことに不満をこぼし、かれらに発達障害があることについて就労支援の指導員から説明を受けると、前言を撤回しながらも「感受性が強い子の接し方が分からない」「若者たちの指導を要求するのであれば、対処法を教えて欲しい」と訴えた。
- これらの発言から若者たちに謙虚に接しようとする姿勢がうかがえる。作業内容次第では就労支援事業体の利用者を指導することに適性があると考えられる。

若者と野宿労働者の出会い(1)

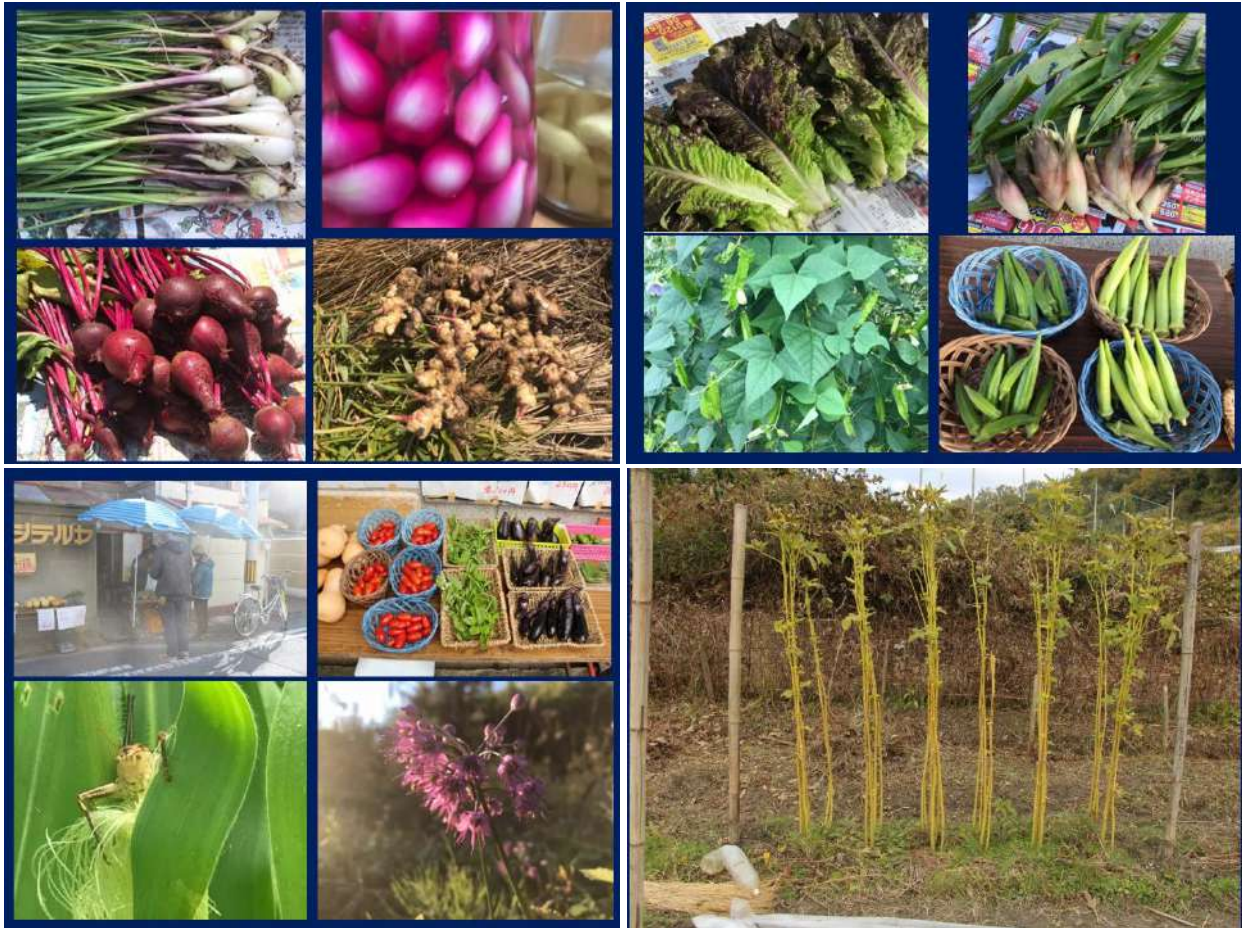
- ・ 日常的な場面で野宿労働者と話す機会は少ないせいか「怖い」などの先入観を持つ人は少なくない。就労訓練を受けている若者も例外ではない。しかし、作業を通じて会話をすることで、一人ひとりの人間どうしとしての関係を築くことができる。
1. 「最初はホームレスの人と作業することに少し驚きもあり、友人からは危ないのではないかと、言われたが、話してみれば当たり前らしい人だった」
 2. 「どんな生活を聞くことができ、たくましさや魅力を感じた。」
 3. 「ホームレスの人など年上の人と作業する方が楽だ。注意されて落ち込んでいるときに励ましてくれるなど、優しい。」
 4. 「最初は抵抗があったが、初対面のときに気楽に話しかけてくれた。怒られないのが意外だった。柵の運び方や杭の打ち方を教えてくれるなど、助けてくれた。」
- 就労に向けて動き出した原動力のひとつとして考えられる。

問題発生！農作業とは何か？

- ・ 農作業 vs 建設労働
 - ・ 共通点: 体を動かす
 - ・ 相異: 農作業は命を扱う
 - ・ 命を扱うということ
 - ・ 種や苗木ひとつひとつが個性を持つ。思いどおりになるとは限らない。
 - ・ 作業しても必ず目的が達成されるわけではない
 - ・ 具体例
 - ・ 建設労働: 資材を加工したら即座に目的は達成され、作業は完了する
 - ・ 農作業: 例えば種まきという作業は、あくまで種の発芽を促すだけで、強制的かつ即座に発芽させるものではない。全ての種を必ず発芽させる方法は存在しない。作業した後は発芽という奇跡を待つ他ない。発芽したか否かで、その作業が適切に行われたか否かが分かる。
- 奇跡を待ち、その結果を後日まで見届けて、はじめて一仕事が終わる。
✓ 「指示されたとおりに作業して終わり」というわけにはいかない

すね。野宿労働者と話す機会が少ないせいか、怖いなどの先入観を持つ人は少なくない。就労訓練を受けている若者も例外ではない。しかし、作業して普通の人間関係を築くことができる。時間の関係で読み上げることはできませんけども、若者たちの就労に向けてホームレスの状態の高齢者たちが若者たちをリードしていた。そういうことが見受けられました。高齢のホームレスの方々、農漁村出身で農耕具の使い方に長けている、あるいはそのような形で色んなことを若者に教えることができる。そういう可能性が見えてきました。

しかし、難しいところもあるわけですね。農作業とは何かというところを考えなければならぬ、というふうには強く実感するようになりました。例えば建設労働と比較すると、体を動かすという共通点はあります。だから最初は建設現場で働いてきた労働者たちには農作業向いてるんじゃないかって思ったんですね。しかし、違いもあります。農作業というのは命を扱います。命を扱うということは、どういうことか。種や苗木ひとつひとつが個性を持つ。でも思い通りになるとは限らない。だから作業しても、必ず目的が達成されるとは限らない。どういうことかって言うと、建設労働では資材を加工したら即座に目的は達成されて作業は完了します。資材を固定する、ビスを締める。それで終わりです。しかし農作業というのはそうでもない。例えば、種を撒くって作業は種に発芽してもらうように周りの環境を整えるってだけで、無理やり種をこじ開けて芽を引っ張り出すなんてことは出来ないわけですね。最後作業をした後は水をやる、芽が出るって言う奇跡を待つほかない。そしてその奇跡が起きたかどうかをしばらくあとで見届けて、初めて一仕事が終わるわけですね。建設労働のように、誰かに指示された通りに作業して終わりという風にはいかない。これが農作業の難しさなのではないかと思うようになりました。ここからは実際にこれまで色々な作業をし



てくれて、今では自らその一角を自分で耕すようになってる山口さんに話を聞いてみたいと思います。

山口：山口です。よろしくお願いします。

綱島：(写真の) 左これラッキョウ？

山口：エシャレットです。

綱島：右側はそれ漬けたやつ？

山口：その下のビーツの色素を使ってラッキョウを漬けてみたものになります。

綱島：右下のこれは？

山口：ショウガですね。

綱島：それからこれ。

山口：チシャ。ミョウガ。シカクマメ。あと、五角オクラとヘルシエオクラという今年の新品種です。

綱島：色々なものを作ってるみたいですけども、こんな感じで自分で売り先を見つけて売ってるってことですね。この左下はなんなのこの写真？トウモロコシの花。

山口：トウモロコシの毛が余って、バッタが食べるんですね。これで受粉が上手くいかなくて、ちょっと失敗してしまいました。

綱島：そして右下ですけども。新井さん、これ何だかわかります？なんかの花だけど。わかんない？玉ねぎをいっぱい作っている新井さんがわからないと言ってますが、これは何なんですか？

山口：これはラッキョウの花なんです。8月下旬ぐらいから植え付けて、秋ごろに咲くんです。



おとな食堂

- ・ 月1回開催
- ・ 釜ヶ崎の数か所で告知
- ・ 前日ないし週間程度前に農作業
- ・ 無報酬でも作業したいという人だけが作業る
- ・ 参加した人には招待券
- ・ 釜ヶ崎の野宿労働者や生活保護受給者と一般市民の交流の場
- ・ 当日は自分たちで調理して食べる
- ・ それだけでは余りが出るので、他に人にも食べてもらい(100円)
- ・ 自分たちで食べる分を作り、余りを他の人と分かち合う
- 日本の有機農業から派生した「産消提携」に近い考え方
- ・ ある高齢単身生活保護受給者の感想
「金を出して買うのと自分で作るのは全然違う」
- ・ 次回12月22日(日)クリスマス・スペシャル・バージョン



ガーデニングの可能性

- ・ 1920年代、沖縄から関西に来た移住者
半ば壊れかけた茅の屋根には今はさかりと、なんきん、へちま、夕顔等の青い実、黄や白い花が咲きそろって、盛んに蝶々舞い舞う(中略)この男子は多く大阪神戸へ自由労働者として働き、副業として又生業としても大抵養豚をしている。大きいところは1件で4、50頭も飼っているから女や子供はリヤカーを引っ張って宝塚や西宮あたりに残飯や野菜を集めに行き、1日中豚の世話の為に真黒になって働いている。(中略)(戦中戦後の)食糧難で国民があえいでいる時に、ここでは、小金を貯めて経済力をつける者(がおり)、少なくとも比較的食べ物に不自由することはなかった。(石原昌家1982「沖縄人出稼ぎ移住者の生活史とアイデンティティの確立」『沖縄国際大学文学部紀要社会学科編』)
- ・ ある日雇労働者の事例
 - ・ 日雇労働で購入した土地
 - ・ 元大工の経験を生かして家屋を建築
 - ・ さまざまな技術(野菜、果樹、養鶏、養蜂、etc.)
 - ・ 「観察が大事」

綱島：それから、小島さんこれ何だか分かります？今月に入ってから撮った写真。オクラはオクラだけど、普通に今ないでしょう。これオクラで何をしようとしているの？

山口：それはオクラを豆の支柱にしてみようかと。

綱島：それで昨日撮った写真がこれですね。いつのまにかオクラの根元にマメが植わっていました。以前のようにみんなに従って作業していた時と、今のように自分で考えながら作業する時って何が違いますか？

山口：自分で考えながら、組み立てながらゆっくり考えながらやっているということでしょうか。

綱島：畑に来ている時以外の時間帯にも色々考えたりしているんですかね。

山口：まあそうですね。大体野菜のことを。これから何を作ろうかな等。

綱島：そして、今農作業をしながら自分自身の長所って何か実感できているところはありますか？

山口：そんな慌てずのんびりとやっているところ。逆に短所になりそうですけど。

綱島：それからどんな人たちが今応援してくれていますか？

山口：これは野菜を買ってくれる人とか食べてくれる人たちになると思います。

綱島：ありがとうございました。

それから最近「おとな食堂」というものも始めています。ここに書いてあることはまたお読み頂ければ有難いんですけども、次回12月12日クリスマスバージョンということですけども、こんな感じで釜ヶ崎の中にチラシを貼っている人々に集まってきてもらっています。それではこの大人食堂というものについて、最初にアイデアを思いついたとき、小手川さん。

小手川：小手川です。こんにちは。

綱島：こんな感じでみんなで料理して、芋煮作ったり、芋ご飯とクリームシチュー。雰囲気はこ

ある日雇労働者の事例(1)



ある日雇労働者の事例(2)



んな感じですけども、やっていますか？

小手川：毎回やっぱり昨日採ったものを作って食べるっていう事で、すごく美味しいんですね。あと最近気に入って常連でよく参加してくれる人も居るんだけど、ご飯作る時に昨日採ってきたものを作ってみんなで食べるっていうのがすごい楽しいって言ってくださる人もいて、特別な時間っていうか単にご飯食べるっていうのとまたちょっと違うことが、その人の人生の一場面が見えるみたいな時間がちょっと起きたりすることがあって、面白いなと思っています。

綱島：そして、ある生活保護受給者が作業に参加した時こんなことを仰ってましたね。「金を出して買うのと、自分で作るのとは全然違う」と。そういうような実感はまさに得られているのではないかなと。

小手川：野菜をスーパーで買ってくるのと、昨日採って来たもので味が全然違うし、あとただ食べに来るだけの人もすごく昨日採ってきた芋で作ったお芋ご飯ですよーとか、露地栽培しかやってないから、ものすごく季節のものでしか作れないんですけど、そうするとやっぱり出来合いのものともまたちょっと違う感じなので、ちょっと変わってるかなと思っています。チラシを後ろに置いておくので、折り込みが間に合わなかったのご興味ある方は是非持ってください。次回12月21日と、21が収穫で22が食堂ですね。お願いします。

綱島：どうもありがとうございました。それで時間を大幅に超過してしまっていますので、残りはこちら辺については釜ヶ崎にもすごい人がいるってことを述べたうえで、あとは配布資料の方を読んで頂ければ幸いです。どうもありがとうございました。

事例報告(2) ひと花プロジェクト—今年のひと花農園奮闘記

柴田健治(ひと花プロジェクト)・松本裕文(釜ヶ崎支援機構)

松本：私は全然土いじりがダメな男でして。柴田さんと申します。ひと花センターというところは西成区の事業で、釜ヶ崎の中に住んでいらっしゃる方が利用できる施設なんですけど、ちょっとセンターとは離れたところに、ふれあい広場という公園のようなところがありまして、そこにちょっと盛り土をさせて頂いて、農作業をしています。はいお願いします。それが農作業地です。公園のような感じです。地域の方に使われているような場所です。



柴田：これは玉ねぎの草取りですね。草を抜いているところです。これはエンドウマメとグリーンピースですか、それを作ってるやつです。現在作っています。それで下を草取りしているところです。

松本：次へお願いします。これは？

柴田：これは小松菜です。小松菜は間引きしたやつを小さい時に動かして植えて、今は草を手入れしているところです。

松本：実は柴田さん、今年は葉物は苦戦したそうですね。

柴田：ほとんど全滅になりましたね。今現在作っても、小松菜、チンゲン菜、それから白菜なんか、みんな菜の花にすると。そういう前例になっています。

松本：菜の花みたいに花が咲いているということですね。その辺は、どうして失敗しちゃった？

田植えころ 丹後の里のひと想う
なべさん



柴田：原因はあるんだけど、それ以上のことはできないから。

松本：色んな事情があるということで。その辺もお聞きできたらなと思います。次お願いします。

柴田：これはニンジンです。草取りです。手入れだけしているところです。これは長ナスです。

これを植えているところです。9株植えましたけども、そのうちせいぜい50%か40%くらいしかできませんね。これと同じやつをひと花センターで作ったんです。プランターで。そうしたら出来た第1回目が103個、2回目が45、で3回目に挑戦したら3回目が39できて、作っています。現在、食べて、結構あそこでは作っていますね。

松本：畑の方は教えてくれる人がいるんですけど、あのプランターで自主的にやった方が夏はよく出来たと言うことなのかなと(笑)。推測するだけです。

柴田：これはスイカです。5株いれて4個くらいできたかな。それ以上は出来ませんでした。

松本：隣にある俳句は「丹後の里のひと想う」と書いていますけれども、後の方で登壇されます京丹後の橋本さんからご説明いただけるかと思いますが、ずっと京丹後市と農業交流をさせて頂いておまして、ちょうど田植えの季節なのでひと花新聞というところに掲載されているものです。次お願いします。これが京丹後に行った時の田植えの様子です。ひと花センターから車乗れるだけ参加されるんですけど、普段農業に行ってる方はあまり行きないうですね。これは僕は推測するんですけど、高齢になると車で行くとお手洗いが近くなったりとか、腰が痛かったり諸々の事情があったりするようです。次お願いします。

柴田：大玉のトマトです。もうひとつこっちにミニのトマト。ミニのトマトは出来たけど、大玉はほとんど全滅状態でダメでした。

松本：その辺の理由は何か？



ひとめぼれ 甘い初恋 イチゴ狩り
政



柴田：手入れでしょうね。手入れができてないということです。

松本：次お願いします。

柴田：スイカです。スイカが花咲いて、これから出来る場所ですね。

松本：4玉ぐらいやっとなってきたという。次お願いします。

柴田：これはきゅうりの収穫しているところですね。きゅうりも結構出来ましたが、お化けみたいなでっかいきゅうり作りましたね。草取りがやっぱりできなかつたんですわ。

松本：きゅうり出来たんですけど、ちょっと大きくなりすぎちゃってると。やっぱり今のところ普段毎日入れないような感じで、曜日が決まっちゃってるといのがありますね。もっと農業では毎日のように行かないといけないのかな。ちょっとその辺もこれから考えていきたいなと思っています。

柴田：これは鳴門金時サツマイモです。植えているところですね。形は悪いけども、少しはできたということですね。

松本：次行きましょうか。これいよいよ。

柴田：これは前がスイカ、後ろがかぼちゃです。かぼちゃは花が咲いていますね。そこまでは良かったんです。それ以上は花咲いたらついに実が一つも出来なかつたんです。40個くらい出来るって言われたんだけど、何一つできなかつた。全滅です。

松本：難しいスイカのほうが少し出来たということですね。次お願いします。これはですね、10月西成区民まつりに出来たお野菜を。さつまいもですね。

柴田：さつまいもと、ひと花センターのプランターで出来た小松菜です。



松本：畑でやるよりも、プランターで毎日手入れしたほうがさっと出来て売れたということですね。区民まつりに出ますとよく売れまして、前京丹後さんの方も京丹後で作った作物を持ってきたら一瞬で売れましたよね。1時間どおとご近所の方が買っていくというような感じでした。もっと売れるようなことがあればいいなと思っております。次お願いします。

もう今の冬の季節に入りました。これは落ち葉を集めて。

柴田：肥料を作っている。

松本：次お願いします。

柴田：これはブドウです。理事長から頼まれて、5本あったやつ3本をお釈迦にして、ようやくこの2本を助けて、あとはお金をかけないように棒を自分たちで拾ってきて、引っ張って作っ

ています。理事長は一度も見には来なかったけれど、能書きだけ言われて「はいはい、作ります」と言っていて、そういうふうにしたわけなんです。

松本：その理事長は一応ワインとか作ろうって言い出して。

柴田：だから言いましたよ。「ワイン出来るまで我々が生きていければな」と。

松本：では次行きましょう。これは葉物ですね。

柴田：チンゲン菜です。今現在作ってるけどこれもお釈迦です。写真は綺麗になってるけど、今はお釈迦。殆ど虫に食われて、全滅状態です。菜の花にしようかなってくらい出来てないです。今は（編注：写真では）綺麗になってますけどね。

松本：このあとでタイミングが合わなくて、全滅しちゃったと。次お願いします。

柴田：これは玉ねぎ。植え替えですね。もったいないからって玉ねぎの先の葉っぱだけを、ひと花センターで食うために。あとはまた植え替えしてやると。そういうふうに行っているところなんです。

松本：ネギの植え直し作業をしているところですね。

柴田：これは持っている人が痩せてるけど、ニンジン自体が変質して、食べても（編注：スーパー）玉出よりもひどい、美味しくなかった。ほとんどまずかったですね。

松本：ギリギリのラインということですね。

柴田：そういうことです。

松本：これは秋と春と京丹後の方に行くと、田植えをやったり、マコモダケを触らせてもらったりなど、ずっとやっているんですけど、その時の様子です。これは一緒に行った状態です。先ほど綱島さんと彼の発表を聞いて、結構柴田さん「うん、うん」と頷いてらっしゃる部分があったんですけど、どうですか？実際やってらっしゃる人の感想として。

柴田：自分はこの歳になってまさかこんなことやると思ってなかったから、もう夏はえらかったです。朝と晩水かけをやるのは、やっぱりしんどかったですね。でも作ったときは、やっぱり美味しかったですね。

松本：はい、ありがとうございます。じゃあこれで発表を終わらせていただきます。

事例報告（3）黒部の居場所ひまわり

橋本卓弥（日本労働者協同組合センター事業団・但馬地域福祉事務所）

先ほどご紹介にあずかりました、労協センター事業団の橋本と申します。最初に、私どもの組織についてちょっとお話をしておきたいと思います。私たちワーカーズコープは働く人たちが自身で出資し、経営し、雇われることなく責任を分かち合う仕事をし、地域に必要な仕事をおこしていく、という団体になります。その中でも自分は但馬地域福祉事業所という兵庫県豊岡市と京都府北部京丹後市を中心としたエリアで活動している事業所にいます。特に京丹後市の方で私は活動させてもらっています。

それでは今回は農福連携がテーマってということで、これまでの京丹後での取り組みの中でも農業との関わりが強かったプログラムについてお話をさせていただきます。まず農業体験セミナーというプログラムを平成26年の5月から半年間行いました。このプログラムは京丹後市の生活困

農業体験セミナーの様子



農業体験セミナーの様子



セミナーの成果

- ・就労が困難とされる人でも、周囲の理解や仕事内容によっては働くことが出来る
- ・自分が人の役に立っているという実感や何か役割があることが原動力になる人もいる
- ・実際にやってみて、農作業に興味を持った人もいた
- ・セミナー後にも継続して農作業をする人も出てきた
- ・セミナーを通して生活習慣の改善が見られた
- ・セミナー期間をやりきったという達成感

その一方で...

- ・課題
 - ・セミナー後も農作業を続けた人はいたものの、講師の方に依存する部分が高い
 - ・セミナー期間中は見守りがあったために頑張れたが、セミナーが終わり見守りがなくなった途端にやる気がなくなってしまった
 - ・野菜を売ったお金を分配したが、トラブルの元になったり、酒やたばこ、パチンコなどに使ってしまう人が多かった
 - ・自立して就労、就農に繋がる人は少なかった

他の参加者の方や農家の方、参加してたスタッフなどとのコミュニケーションを通して、他の人と関わる機会っていうことを作ることを目的としました。作業の様子は資料の方に載っているのでまた見ていただけたらと思います。

半年間セミナーを行ったんですけど、成果としては、まず就労が困難とされる方でも周囲の理解や仕事内容によっては働くことができるということ、また、自分が人の役に立っているという実感や何か役割があるということがその原動力になるという方もいらっしゃるといことがわかりました。また、実際に作業をしてみて農作業に興味を持った方もいらっしゃいましたし、セミナー後にも指導してくださった農家の方の畑で継続して農作業をする方も出てきました。さらにセミナーに出ることで生活リズムが出来上がって、体を動かしたことでお腹が減って食事もできるようになりましたっていう方もいらっしゃって、生活習慣の改善が見られた方もいらっしゃいました。またセミナー期間をきっちりやりきったという達成感も、大きな自信として成果がありました。

一方でなんですけど、課題というものもありまして、まずセミナー後も農作業を続けた方もいらっしゃったんですけど、農家の方に肥料とか種とかを完全に用意していただく形になってしまったり、その自分の畑を農家の方の機械で耕耘してもらったりっていう形で、依存する気持ちっていうのが強く見られてしまいました。また期間中は周りの見守りがあったので頑張れたんですけども、セミナーが終わって見守りがなくなった途端にやる気がなくなって、元の生活に戻ってしまう方もいらっしゃいました。他にはセミナーで育てた野菜を地元の直売所で売ってお金にしたときに、それを皆さんに分配する形にしたんですけど、それが逆にトラブルの元になってしまったりとか、あと酒や煙草、パチンコなどに使ってしまうって、次のシーズンに使う種や肥料に充

H27～

京丹後市 就労体験による居場所づくり事業

社会的孤立状態にある方や様々な問題を抱え就業困難な方に対して、地域住民との交流や地元の資源を活用した就労体験・訓練を実施し、作業を中心とした「就労体験による居場所づくり」を行う。

就労体験による居場所づくり事業

・黒部の居場所「ひまわり」
(京都府京丹後市弥栄町黒部)



就労体験による居場所づくり事業

<目的>

利用者の「生活のリズムを整えること」や「社会的関係(仲間)作り就労の準備」のための通所の増やす。

<活動内容>

園庭や屋内での作業(農業・軽作業等体験・訓練)
山の仕事(築材作業補助)

<対象者>

京丹後市寄り添い支援総合サポートセンター

具体的には

- ・就労に向けて活動したいが直ぐに一般就労にむかえない方
- ・今後に向けて様々な体験をしてみたい方
- ・自信がなく、自分が何ができるのかをわがしたいのか迷っている方
- ・社会に出ることに不安を感じている方
- ・外に出て、何か活動がしたい方

就労体験による居場所づくり事業

農作業



てて欲しかったのに、それができないっていう方が結構多い状態でした。結果として、就労、就農につながるという方はちょっと少ない形だったなというところがありました。

このセミナーで得た成果と課題をもとに、平成27年から就労体験による居場所づくり事業という事業を現在に至るまで行なっています。この事業では様々な困難を抱える人たちが、地域にある資源を活かした作業を行って、様々な人と関わりながらそれぞれの力を活かして就労自立していくための居場所を作っています。場所なんですけども、京都府京丹後市の弥栄町黒部というところで、元々保育所だった建物を改修して、黒部の居場所「ひまわり」と名付けて利用させてもらっています。「ひまわり」では地域の資源を活かした様々な作業しているんですけど、今回は農作業に焦点を当ててお話しします。

農作業の中でメインで行ってるのは、先ほど松本さんの方からもお話があったんですけども、米作りです。利用者とスタッフ総出で、初夏に田植え、後は秋に稲刈りを行っていて、今時手作業でやるって言うのはすごい珍しいということで地元でも有名になっています。毎年、釜ヶ崎支援機構の方にもお手伝いに来て頂いています。他にも「ひまわり」の隣にある畑で作業を体験という形で行っていたり、あと先ほどお話しした農業体験セミナーの時にご指導頂いてた先生のところでも週一回作業の体験をさせて頂いたりしています。

農作業を通して、地域の方々や都市部との交流ということも行っています。京丹後と言うと田舎なんですけども、地域で大規模に農業をされてる方が何人かいらっちゃって、その方のところで規格外の野菜を自分たちが収穫させていただきに行きます。その頂いた野菜を加工して販売させてもらったりとか、都市部での生活困窮者の支援をされている団体とか、フードバンクなどに

地域住民や都市部との交流・連携

地域の農家から、規格外の農作物の提供を受ける。いただいた作物は釜ヶ崎支援機構やフードバンク、市内の生活困窮者支援の現場へ。また、京丹後でも漬物などの加工品にした。



都市農村交流について

2. 収穫野菜の寄贈。

協定の締結に合わせて、具体的な連携の策として下記のとおり、京丹後のモデル事業である「農業体験セミナー」で収穫した農産物を、釜ヶ崎支援機構に寄贈しました。

「農業体験セミナー」収穫野菜の贈呈

贈呈：農業セミナー参加者から釜ヶ崎支援機構へ
内容：ジャガイモ・玉ねぎ 各 100kg
利用方法：釜ヶ崎支援機構による就労準備支援モデル事業での取り組み、その他生活困窮者の方への提供などに用いられます。



野菜の贈呈。

都市農村交流について

1. 連携協定の締結。

京丹後のモデル事業の委託事業者である「企業組合労協センター事業団」（以下「労協センター事業団」）と大阪市西成区のモデル事業委託業者「NPO 法人釜ヶ崎支援機構」（以下「釜ヶ崎支援機構」）は、都市・地方連携と当事者同士の支えあいによる事業の効果的な推進と、地域資源を活かした個性豊かな地域社会の形成と発展に寄与することを目的として、連携協定を締結いたしました。

「生活困窮者就労準備支援モデル事業」
委託先事業者贈呈式典
日時：平成 26 年 7 月 14 日（月）
11:00~11:30
場所：「ひまわりセンター」
（西成区花園北1丁目2番19号）
連携協定の取りかわし：
労協センター事業団×釜ヶ崎支援機構



協定の取りかわし。



提供させてもらったりしています。釜ヶ崎とうちの京丹後の労協との関わりってというのが、平成 26 年農業体験セミナーの時に参加者の皆さんが野菜を作ったものを、こちらの方に提供させていただいたところからスタートしています。自分たちが作ったものを提供させてもらえるってところで、利用者の方々にとっては自分たちも誰かの役に立てるんだなっていう強いプラスの要素になっています。「ひまわり」の中でも自分たちで販売所を作って、収穫した野菜を販売したりもしています。地元の人たちからも好評で、野菜を買いに来た人達と利用者さんとの会話っていうのがここでコミュニケーションが生まれるきっかけにもなっています。

今のところこの事業の成果としては、農作業を含む様々な経験を経て、利用者それぞれが自分の得意なこと、苦手なことを知り、自分を客観視することができたこと。それから作業をするってことで自分も仕事ができるという実感を持ってもらえたこと。この「ひまわり」に通ってもらうことで利用者それぞれが体調や生活のリズムの安定など、自立へ向けての準備ができていくこと。一人一人が作業を通して、自分が誰かの役に立っているという実感を持っていること。それからこれまで社会的に孤立していた方々が他のひまわりの利用者や地域の方々との関わりの中で、社会や他人とのつながりを再び築いていくことができている、ということがあります。ただやっぱり課題もありまして、まず生活保護を受けている方や同居している両親の収入などで生活をしている方なんかは、今ある程度生活が安定しているということがあって、無理に自立には向かわないよっていう方もいらっしゃいます。こうした方々の他にも、実際は働くといふとなかなか困難な部分を抱えているっていう方も非常に多くて、一般就労だけを自立としてとらえる形だとやっぱり無理があるかなという風に思っております。また、農作業に絞って言ってしまうと、やっぱり体力的になかなかしんどい作業も多くて、体がしんどい人は難しいっていうところもあ

成果

- ・農作業を含む様々な経験を経て、利用者それぞれが自分を客観視する
- ・仕事ができるという実感を持つ
- ・体調や生活リズムの安定など自立へ向けての準備の進行
- ・自分が誰かの役に立っているという実感
- ・社会や他人との繋がりの再構築

課題

- ・それでも自立が出来ない人(生活保護など)
- ・一般就労のみが自立とすると無理がある
- ・体力的に農作業が難しい人も多い
- ・就農する人はいなかった

今後に向けて

- ・加工などを組み合わせた農福αの仕事おこし…?



講師の方について



岡田 福治さん(89)

- ・30年近く、生活困窮者に向けた農作業の指導
- ・「農業は失業が無い」
- ・「助け合いの精神はお金をもうけることよりも大事」
- ・「爪の間から土のエネルギーが入って元気になる」
- ・「作物は、どれだけ頑張っても毎年同じように出来るとは限らない。自然のことだから人間にはどうにもならないことがある。だからこそ、どうやったら上手く出来るか必死に考えて、研究して、どうしてやろうかと毎年チャレンジしていくのが楽しい。こう思えないと農業なんて続けられない」

ったりして、就農に繋がった方は残念ながらいらっしやらないという形になっています。

これまでの事業を踏まえて、今後どうしていこうかなと考えているところとしましては、加工などを組み合わせて農福連携にさらにプラス何かできないかなということを考えています。地元の方々の企業の方々とも協力をさせて頂いて、これまでみたいに一般就労だけを自立という形にするのではなくて、もっと幅広い層の方々が、何かしたいけど一人では動き出すことができないよっという方々が、働くことができ、それぞれの形でも自立に繋げているような場所が作れるんじゃないかな、と思っております。

最後なんですけれども、農業のセミナーの時からずっとご指導頂いている講師の方を紹介させていただきたいと思えます。岡田福治さんとおっしゃる今年 89 歳になる方です。30 年近く生活困窮者に向けた農作業の指導をされてこられた方なんですけども、この方の言葉で面白いものが色々あったので、最後に紹介させていただきたいなと思っております。まず、「農業には失業がありません」ということ、それから「助け合いの精神はお金を儲けることより大事」ということです。農作業を岡田さんのところでさせてもらうんですけども、その作業を通して皆で助け合うっていう精神を学んでもらって、この先の人生でぜひ活かしてほしいということをよく言われています。それから「爪の間から土のエネルギーが入って元気になれる」と。現代の人たちがなかなか汚れることを嫌がって土に触れることを嫌がっていたりとか、あと特に都会だと土に触れる機会自体が無いというところで、それが現代人の体調が悪くなったりとか、心を病んだりするところに繋がってるんじゃないかなというところで、種まきとか草抜きの時に「軍手を使わずに素手で作業してみたらどうやろ」ってよく言われます。最後、「作物はどれだけ頑張っても毎年同じように出

来るとは限らない。自然のことだから、人間にはどうしようもならないことがある。だからこそ、どうやったら上手くできるか必死に考えて研究して、どうしてやろうかと毎年チャレンジしていくのが楽しい。そう思えないと、農業なんて続けられない」絶対に成功するわけではないものの、だからこそ必死になってやるって姿勢は、農業だけじゃなくって他のことでも必要なことじゃないかなと思います。長年農業に携わってこられた岡田さんの言葉とか姿に触れていると、やっぱり農業の中に、現代の日本社会の中で失われたものがあって、それが今さまざまな困難さとか生きづらさを抱えている方、あと生きる力が弱まっている方々が元気を取り戻すのに必要なものがあるんじゃないかなと思います。ありがとうございました。

事例報告（4）はばたき作業所

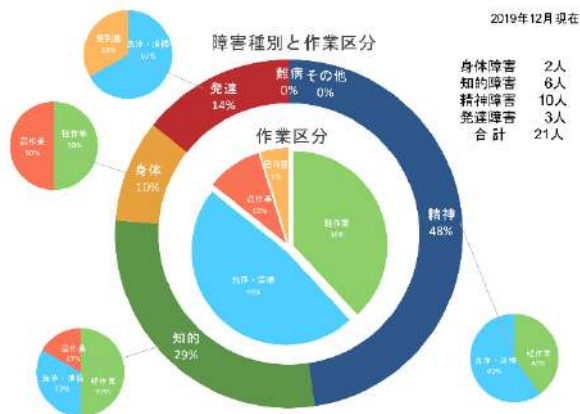
高岡美恵（株式会社想立）

今日はありがとうございます。はばたき作業所を運営させて頂いております、高岡と申します。網島先生との出会いからですが、2016年頃にはばたき作業所で黒谷の方に畑をさせて頂いているんですけど、そこに「井戸を掘りたい」と利用者さんから提案があって、利用者さんたちがパイプを買ってきて自分たちで掘り出したんですけど、3mくらい行ったところでそれ以上進めなくなってしまって「どないかしてくれ」と言うので、ネットで検索したところ、雁多尾畑の方でやられている農園で井戸を掘ったという記事を拝見しまして、それで連絡をとった次第です。突然全然知らないのに案内してくださって、結局井戸は諦めたんですけど、それ以来ちょくちょく農園の方にきて頂いて、あとでお話させていただくんですが、Mさんとおっしゃる「農業がしたい」と入ってこられた利用者さんがちょっとコミュニケーションに課題がある方なんですけれども、常日頃その課題をフォローしながら支援させて頂いてるんですが、たまに網島先生が一年に1回くらい来て頂いて畑見て、「すごいなあ。自分でやってはるんやなあ」と褒めてくださるのをものすごく喜ばれて、そのために農業ずっと一人で自分で全部判断してっていうのがどっか負担やったりストレスやったりっていうのがあって、しんどくなられる時もあるんですけども、網島先生も言ってたよと言ったら、作業所の中の支援だけじゃなくって、そういう外部から褒めてくださる方、承認してくださる方っていう存在がものすごく大きいのかなあと思った次第です。本当にありがとうございます。



会社概要

会社名	株式会社憩立	事業内容	障害福祉サービス
社長・役員	代表取締役 高岡美恵	資本金	200万
所在地	〒581-0016 八尾市八尾木北-39	沿革	2014年7月 会社設立 2014年9月 指定事業所開設 2017年6月 事業所移転 2017年7月 代表取締役交代
設立	2014年7月 7日		



会社概要は、お手元をご覧ください。はばたき作業所では、ご覧のような作業を色々させて頂いています。いろんな病気とか障がいとかで途中で職歴を失ったとか、引きこもってて経歴がない方もいらっしゃるし、そういう中でマッチングした作業が何か、本人さんと話しあいながら「じゃあこういうのやってみたい」とか「こういうのはどう？」みたいな感じで作業を探してきて仕事を会社さんとつながって、させて頂いているので、物凄い色んな作業、作業の多さを結構驚かれる方もいらっしゃるんですけど、それでも足りないかなと思ってます。

はばたき作業所が開所し出した頃っていうのは、農作業のみで募集をしていたんですけど、ほとんどの方が最初は農作業から入って、先言ったようないろんな仕事に振り分けていく形だったんですが、結局最後残ったのがMさん一人。今のところ一人で、あとは忙しい時とか草が物凄い生えてしまったという時に作業に手伝いに行く程度で、年間として作業の時間数としては全作業の10%ほどになっています。

作業もやっぱ残念ながら生産収入の中では1%ほどの収入しかないんですけど、他の事業所との交流とか地域との交流とかそういうためのはばたき作業所を知ってもらうための営業ツールかなっていう役割が大きいです。

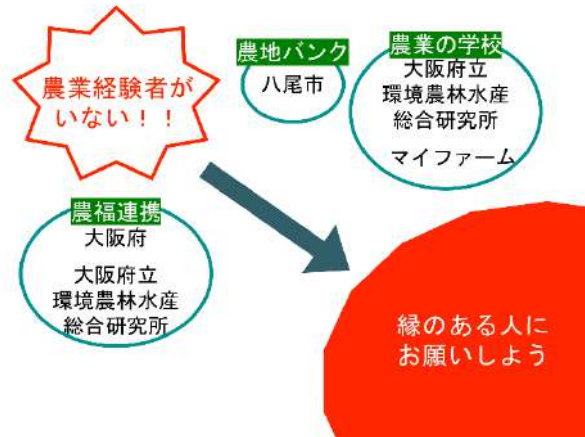
はばたき作業所が農業を何でしようと思ったかっていう話なんですけど、開所当初は何のコンセプトもなく、私は居てなかったんですけど、最初の社長さんが何のコンセプトもなく始めはったんです。ただ、軽作業はしないっていうコンセプトだけではじめて、近所の農家さんが「じゃあ手伝いに来てよ」って言うので手伝いに行かせて頂いたところを出勤率も最初50%程度だったのが、やるにつれてどんどん出勤率が上がって行って、毎日徒歩で10分程度の農家さんの所にみんなで

はばたき作業所と農業の出会い

近隣の農家さんから
仕事をもらった
・みかんの皮むき
・畑の除草作業
・農小屋の修理
など

体調が良くなる
人が多くいた

農業だ！



農業研修

研修先：ナカスジファーム

場所：富田林市

頻度：週1回 3時間程度

期間：平成27年10月～

平成29年12月

研修生：支援員1名、利用者2-4名

除草作業から始まり、茄子の接木
や生姜のおがくず撤き・シート張
り、ニンニク植えなど色々なこと
を教わりながら実際に作業の手伝
いもさせて頂きました。
最後はリサイクルのハウスをいた
だき、ハウスの建て方も教えてい
た頂きました。



ゾロゾロ歩いて、2〜3 時間ぐらい作業していくうちに表情も良くなり、出勤率も上がってきて、会話も弾み、みたいな。毎日歩いてお日様を浴びて土に触れてっていうのが何よりもカウンセリングになったのかなっていう実感のもと、そうや農作業しようみたいな流れで。農作業をするにしてもやっぱり畑がない。農家さんもプロの専門の農家さんだったので借りれる畑がない。八尾も休耕地が多いんですが、なかなか貸して下さる人がない。農業の経験者が居ないっていうのがものすごく大きくて、これによって貸してくれないっていう。八尾市に農地バンクというのがあったんですが、そこも農業経験者居なかったら貸せないよと言われ。

じゃあ農業経験者の人に農業を教えるにはどうしたらいいかっていうので、農福連携をやった大阪府とか農林水産センターだとか、農業の学校やってるよって聞いたらこれも農林水産センター。あとマイファームとか色々探したんですが、学校はあるけれどもお金と時間が無い。はばたき畑作業所では、ちょっと難しいっていう結論に至って、もう一度農林水産センターに電話したら、農家さんに研修させてもらったらどうってそんな農家さん知らん知り合いに居てない？っていわれた時に、私富田林、ちょっと話前後するんですけど、富田林出身で、合気道をしているんですね。その合気道に通ってたお子さんのお父さんが富田林で大規模なナカスジファームっていうところの社長さんをされてたんで、じゃあ農林水産センターの人に「そういう縁があるんですけど、ちょっと頼んでもらえませんか？」っていうたら、ナカスジファームさんは外国人研修生を受け入れてらしたので、何か話ししてみたら受け入れてくれるんちゃうかっていうことで、これもまた突撃で電話をしました。ところが最初は渋々だったんですけども、週1回3時間ぐらいでスタッフ+2人から4人の利用者さんの作業を用意してあげるからおいで、といっ



て下さって、大体一年間くらい行かせて頂いて。最後には写真にあるリサイクルのハウスなんですけど、これまで頂いて、建てる時も教えに来ていただけて。

今もこのハウスは使ってます。もうそろそろ3年経つので穴だらけなんですけれども。ナカスジファームさんに色々お世話になった中で、農業とか野菜の販売とか収穫体験とか、一作業所というか、スタッフも少ない、農業自体に従事したことのないスタッフばかりの中で農作業のみではばたき作業所をやって行くのはちょっと難しいのかなっていう感想を得ました。研修と同時に移動販売、収穫体験って行って他の事業所さんをお呼びして、収穫を体験してもらったりっていう、これが当初の移動販売の様子で、この軽トラの中のボックスというか、こういうのはばたきの利用者さんが自分で設計して作ってくださったものです。もうひとつ、収穫体験として放課後児童デイサービスとか就労移行さんとかお呼びして、じゃがいもとか夏野菜とかの収穫をして頂いております。移動販売につきましては、前の社長が自分が続きをやりたくて移動販売の事業は持っていかれたので、現在はやっておりません。

これが黒谷農園です。三段。このハウスのところが一番上、その隣が2段目で、下の札が立っているところが三代目で一番低くなってる。元々は段々畑の田んぼでした。この一番上が去年あたり、3段ともうちで貸して頂けてたんですけれども、去年あたりに農園の地主さんが自分で耕していた畑を売ってしまって、自分でやりたいと言って戻ってこられました。ハウスの一畝と下の段がはばたき作業所で耕せるところになってたんですが、今年の頭ぐらいに息子さんが戻って来られて、下の段の半分を自分で使いたい、18歳まで俺が田んぼをやってたんやけど帰ってきて畑になってビックリした、とおっしゃって、息子さんが18で出ていかれてからは誰も耕す人が居なくて荒れ放題の所を私たちが開墾したんですが、戻って来られて、この下の段半分とハウス一畝だけになりました。三段全部で一反ぐらいの大きさの畑になります。

これははばたき作業所で農業を一手にして頂いているMさんです。ほとんどが自分で考えて、何が植えたい、これがやりたい、じゃあこれはどうしたらいいのっていうのを八尾市内で畑をやっている人に声をかけまくって聞いてきたり、あと日曜日に里山ボランティアをされていて、そこでも農業に従事、家庭菜園とか普通に農業されている方から情報を得たり、地主さんから苗貰ったり、隣の畑のおじさんが苗余ったからこれ植えて貰って植えたりで、計画は収穫体験の部分だけ私が立ってるんですが、他はもうMさんと一緒に話し話しやって、Mさんがやってくれてます。

彼女は種から苗木を育てるのがとても上手で、花から種を取って、苗をしています。たまに買った



てきたカボチャで苗を起こしてやるんですけど、かぼちゃはあまり成功しづらいみたいで。受粉が難しい。これ人参なんですけど、あの黒谷の土は粘土質で硬いので、いつもエイリアンやって言って持って帰って来ます。これ私が食べたいって言うて植えたアスパラガスなんですけど、1回目の植えた時は雑草と思ってMさんが抜いてしまって、2回目は柵して毎日のように「抜かんといてやー。アスパラ来年少食べたいから。」って、ようやく今年の春初収穫を迎えました。これはイチゴ。イチゴは隣の畑の方がくれはったんですが、売るほどはできないんですけど、ナメクジと戦いながらおやつに食べるみたいな感じです。これはシカクマメ。八尾は枝豆が有名なんですけど、黒谷の方けっこう豆類がよくできて、ちょっと変わった豆作ってみようって、四角豆とか茶福豆とか黒枝豆とか。ただそれも虫との闘いなんですけど。

これはわかりますでしょうか？八尾のご当地野菜、八尾が推してる若ごぼうの花です。最近では玉ねぎとか、夏野菜はハウスで育ててジャムにもしてしまったりあるんですけど、夏野菜は結構とれてます。間引きとか剪定とか苦手なのでやっぱ難しいんですけど。これはナンバナネギです。去年失敗したんですけども、今年はハバナネギの苗ができたので10株18株苗ができて、ハバナネギを収穫することが出来ました。それを取ってきて、細く切って乾燥させてハバナネギ塩とかを作って、来年以降もうちょっとずつ株を増やして行って、独立産業が出来たらなあと思っています。収穫した野菜は作業所で無人販売をしたり、八尾市内の飲食店で買ってくださいるところに持って行ったりしています。「学校とか保育園に販売したら？」ってアドバイスをいただくんですけども、畑が狭い、採れる量も知れてる、何より計画通り作れないので、結構家庭菜園的な農園なので、売りたい時に売るっていうのが今の現状です。最近綱島先生から紹介して頂いて、ある時に



持って来てくれたら売るよっていうお店を紹介して頂いて、そこに先々週ぐらいから毎週持って行かさせて頂いています。

農福連携って言うのもちょっとおこがましい感じなんですけれども、農福連携されている所っていうのは農業ありきで農業の中で障がい者の方が何が出来るかって探していける事業所さんのことなんかあとには思うんですが、うちは逆で、農業がしたいっていう M さんがいるので農業をしているという感じです。

これは地元の農家さんの枝豆の選別を手伝ってます。こっちは立川の老人ホームの清掃です。これは収穫体験に来てくれた子供たちの様子です。以上です。ありがとうございました。





第2章 講演

講演（1）農を食と職に—小さな農園から始める未来への挑戦

小島希世子（株式会社えと菜園・代表取締役，NPO 法人農スクール代表理事）

皆さんこんばんは。小島希世子と言います。私神奈川県藤沢市っていうところの野菜農家です。野菜農家なんですけれども、株式会社えと菜園というちっちゃい農業経営の会社の経営と、あともう一つNPO 農スクールっていう団体をやっています。なので、ちょっと肩書きが二つあるんですけども、本業のほうがえと菜園という株式会社の方なんですけど、現場の写真見て自己紹介させて頂いた方が早いと思うので、まず最初に自己紹介させて頂いて、それから農福連携についてお話しさせていただければと思います。

一つ目のえと菜園っていう農業系の会社ですが、作る・食べる・学ぶという三つの事業柱を軸に活動しております。農業って聞くと作るのを想像される方が多いと思うんですけど、三つ活動しているので一つ紹介させて頂きますね。一つ目の作るっていう部分では、品種で色んなものを作ってます。だいたい年間30種類ぐらいです。今だと畑、この前玉ねぎが終わって、今だとキャベツとか白菜とか、小松菜ほうれん草、菊芋、最近人気の菊芋。知ってるか？結構いらっしゃる。これ夏野菜なんですけど。作り方もちょっとこだわりがありまして、人間が文明の利器とか技術で野菜を効率よく大量生産するっていうよりは、自然と接するところで自然の力お借りして作るっていう作り方でやっています。なので結構畑には雑草とか虫とか鳥とかめっちゃくちゃ多いです。で近所には日本大学っていう大学があるんですけど、その農学部が、生物資源部っていうんですけど、その方たちが畑に調査に来た時に、野菜は2~30種類ぐらいしか作ってないんですけど、雑草は90種類、昆虫が40種類いて、本当に人間以外よりも植物とか昆虫とかに接するようところで農業をしているということが分かりました。一言で雑草と言ってもいろんな種類ありますし、それぞれこういう土の状態の時にはこういう雑草が多いとか、本当に無駄なものはないと言いか、雑草自体が土のコンディションを教えてくれたりとか、野菜を育てるのに手助けしてくれるような雑草もあります。

私雑草結構好きなので、雑草の話をするとうるくなっちゃうんですけど、この辺でやめますね。さすがに夏だと畑やったことある方はわかるように、一週間もするとこのぐらいなので、雑草、うち抜かないんですね。刈って敷くやり方なんです。抜いちゃうと死んじゃうので。刈り敷きと

本業は、食卓と生産の現場を近づけることに取り組む「えと菜園」



「野菜を作る」— 農薬、化学肥料不使用で少量多品種栽培



自然の中で、雑草・虫・鳥と共存する栽培方法



3

ヤギも一緒に野菜作りのお手伝い？



4

「すべての野菜は花を咲かせ、種を残す」生命の神秘



5

「すべての野菜は花を咲かせ、種を残す」生命の神秘



6

いうやり方なんですけど、さすがにそれでも手が回らないので、動物とも共存しようと思って、ヤギを畑で飼おうと思いました。ヤギって雑草を食べてくれるっていうことで畑に放ったら、ヤギって真っすぐ野菜の方が好きなんです。野菜を食べちゃうので、今はちょっとペット状態というか、野菜のないところのお手伝いをしてもらってます。

もう一つ現場の写真をお見せすると、こちらですね。これ何の花だと思いますか。分かる方いらっしゃいますか？ほとんどの方が食べたことあると思います。はい、そうです。これ人参の花。人参も一本食べずに置いとくと、花が咲くんです。これが枯れると中にびっしり種ができてます。たった一本の人参から数千本分の人参の種が取れます。こちらも見てもらいます。これ何の花だと思います？答えがもう接近してますけど。オクラです。種採るのも楽しいので、野菜って食べて楽しめるし花を見て楽しめるし、種取りって生命の神秘に触れて楽しいので、こういうのも楽しみながらやっています。

こういうのが私の作る現場なんですけど、二つ目の食べるっていうところをご紹介させていただくと、食べるを届けるのは農家直送のオンラインショップになります。私は熊本県の出身で、熊本県の16軒の農家さんと一緒に農家直送のオンラインショップをやっています。農作物って大量生産して市場に持って行って、そうすると相場がその時の需要と供給のバランスで今年は何キロいくらみたいな形で決まるんですけど、そうすると相場で左右されてしまうので、オンラインショップでは農家さんが自分の野菜いくらで売りたいって決めてもらって、それでいいよって言ってくださったお客さんに直接買ってもらうって仕組みになっています。ネットで注文すると、センターとかじゃなくて農家さんが直接ご自宅に届くような仕組みになっています。こういう農家さんと商品と現場の写真なんですけど、私自身も農薬化学肥料を一切使わない栽培なんですけど、同じく化学肥料を一切使わないお米だったりとか、あとこの有機国産小麦って珍しくて、国産小麦っ

「食べる」を届ける農家直送のネット通販



えと菜園オンラインショップ 提携農家数 19件
<http://eto-na-en.shoppro.jp/>

農の舞台・熊本県から「食べる」を届ける通販



お客様と一緒に作る直売所「くまもと湘南館」



農作物の生産の現場を「学ぶ」菜園体験コトモファーム



てだいたい全流通の 0.07%しかない。ほとんど輸入なのでレアもの。あとオーガニックの無農薬米だったり、無農薬の小麦を使ったベーグル、これも牛乳卵バター保存料を使っていないベーグルだったりを販売したりしています。もう一つ販売の話をさせていただくと、こちらですね。こちらのお店です。掘っ立て小屋みたいな。神奈川県農園の近くの事務所兼直売所なんですけど、ここでは熊本のものもちょっと売ったり、あとは自分たちの畑で作ったものを売ったりしています。これはくまモンですが、これはちゃんと熊本県から許可を取って使っています。くまモンってタダで使えるんですね。許可さえあれば使えるんですが、許可に4か月ぐらいかかって意外と大変でした。このデザイン自体を県庁に出して。ここで販売したりしています。

販売です。大事にしてることは、食べるのも人なんだけども、作るのも人だっていうのが感じられるような販売方法ですね。オンラインショップだったら農家さんから人へ、お店だったら対面で売ってというのをやっています。なので大量にとって商品はあんまりないんですけども、少量で丁寧に作ったものを直接届けるっていうことにこだわってやっています。商品とお金の交換っていうより、人から人っていうかんじです。

三つ目の学ぶって事業についてなんですけれども、この三つ目は農業体験サービスです。どういうサービスかというと、お客様自身は七坪の自分の体験エリアを持って、そこで種まきから収穫まで年間20種類の野菜作りを楽しみながら、家庭菜園のやり方だったり食の安全とは何かということを学ぶことができるような農園になっています。毎日口に入ってる農作物が自然の中でどんな風に育って、食卓に届くのかっていう。なかなか東京や神奈川のお客さんには知る場所がなかったりもするので、そういう方に向けて農業の現場を知っていただくような取り組みになっています。大体いらっしゃる方の7割ぐらいは神奈川県藤沢市の方なんですけども、東京から来る方もいますし、横浜から来る方もいらっしゃいます。東京から車で1時間ぐらいなので通えない

農作物の生産の現場を「学ぶ」菜園体験コトモファーム



地域のお客様、農家さんと一緒に餅つき大会



雑草を活かし、昆虫をも活かす、「雑草昆虫農法」



雑草を活かし、昆虫をも活かす、「雑草昆虫農法」



距離ではない。この写真は週末の野菜作り講習会の様子です。毎週日曜日にやっています。これは講習して、植え方を説明して種とか苗も配布して、あと道具のレンタルも付いてますので、お客様自身は手ぶらで来れるって言う形です。どういう方が利用してるかっていうと、お子様連れのご家族の方から定年退職された方、あとサークルですね。若い20代とか30代のサラリーマンの方がサークル作って、登山行ったりとか海とか行ったりとかフルマラソン出たりとかアクティブなグループの方たちが農業体験もそのサークルの活動の一環という感じで、これを見たいっていうケースもあります。

本当畑って食育の場にもなるし、心の癒しの場にもなるし、利用する方の目的は色々なんですけど、それによっていろんな畑の顔を見せてくれるというか、そういうところがすごく懐深いなと思って普段感じてます。これお客さんのお子さんなんですけど、すごい良い顔。

あとは畑でいろんな方が集まるだいたい年間延べ5000人の方がご来園頂いてます。せっかくいろんな方来るので地域のコミュニティみたいな場所になればいいなと思ってイベントをやっています。その一つのイベントの様子の写真なんですけれども、餅つき大会ですね。もち米も顔が見える。私の同級生が九州でお米を作っているもち米も作ってるので、送ってもらったもち米を畑で薪を用意するところから、かまどでもち米蒸して、臼と杵で作って毎年やっています。意外とですね、結構東京神奈川のちっちゃいお子さんって、時代なのか食育で餅つきを臼と杵でやった事ある子多いので、こういうイベントやって「やりたい人並んで」って言っても子供そんなに並ばないですね。逆に大人が並んじやって。3~40代の方たちが割とやってない世代というか。イベント事で。こういうイベントもやったりしてます。

せっかく地域の七割藤沢市の方、近所の方なので、人が集まるのでせっかくだから近所の人も呼びたいなと思って農家さんも呼んだりして、みんな一緒になって作ることをやっています。

ひたすら農業体験やるっていう。どういう会社さんかっていうと、全然農業系じゃないんですね。IT系とかケミカル、化学系の会社さんだったりとか、商社だったりあとはリサイクルされてる会社さんだったりとか、本当に農業と全然ジャンルが違う中小企業さんから大企業さんまでご依頼下さったりしてます。参加された方たちは「苦手な同僚の意外に良いところ見つけられて良かった」みたいな声もあります。農作業、炎天下できつい作業なので、割と自分の素が出てきちゃって、普段見えない相手の、自分の普段知らない自分にも会えるし、仲間の普段知らない姿を発見するような場合にもなってるかなっていうふうに思います。

これが大まかにえと菜園について紹介させていただきました。ちょっと復習すると、えと菜園は作る・食べる・学ぶって部分でこういう活動をやってます。もう一つ、NPO 農スクールっていう活動についてお話しさせて頂きたいんですけども、こちらの数字見て頂いて。何を想像されますでしょうか。

現在日本には 140 万人という農業者の方と、214 万人の生活保護受給者の方だったり、あとは 15 歳から高齢のひきこもりの方も含めると大体 100 万人ぐらいのひきこもりの方がいると言われてます。もちろん生活保護の方とかひきこもりの方の中には働けない状態の方もいますが、働きたいけどそういったチャンス場がない方だったり、ちょっとしたチャンス場があったらいきいきと働くことができるかなって方も存在すると思います。例えば厚生労働省の推計をあげると、214 万人の生活保護受給されている方の中には 40 万人ぐらい実際に働けるけど、仕事がないから生活保護を受けてる方もいらっしゃると言われてます。そこで、NPO 農スクールでは働きたいけど仕事がないっていう方と人手不足の農業界をつなぐっていう取り組みをしています。具体的には大きく二つの取り組みをしてまして、一つは野菜作りを通じてもう一度元気を取り戻して、仕事に就く足掛かりを探していただく取り組み。二つ目は人手不足の農家さん、農業の会社さんとマッチングして、就職して頂くような取り組みをしています。実際に農家になったり、農家さんとここに就職して農業従事者になったり、農スクールの卒業生で農業経営者になった方もいらっしゃると思います。後ほどその例についてお話させて頂ければと思います。

そのまえに、何故私がこういう取り組みをしているかというきっかけについてお話させてください。私は熊本県の合志市っていうところで生まれ育ちました。酪農が盛んなんですけど大豆とかの採れるような地区で、本当に同級生の親が農家だったりとか両隣農家だし道挟んで向かいも裏手も農家っていうようなところで生まれ育ちました。私自身の両親が学校の教師だったので、うちには乗用車 1 台あるだけなんですね。だけど農家の友達の家に行くと、牛とか居るんです。他の友達の家に行くと「うちの父ちゃんが作った米のおにぎり食べる？」とか言われて、農家ってかっこいいなって憧れを持ちまして、幼少期から農業への憧れを持っていました。

大きく農業をやろうと思ったきっかけがあって、それが小学校の低学年の時に観たドキュメンタリー番組です。例えばアフリカの食べ物がなくて死んでしまう子供たちがいるって番組で、結構衝撃だったんですね。自分は冷蔵庫開けたらなんでもあるし、田舎なんで家から学校まで行く間も柿の木もあれば栗の木もあって、大豆畑もあるしじゃがいもがあるし、米も田んぼもあるし、食べ物いっぱい農村。自分と同じぐらいの歳の子が食べ物が無いって言うので、身の回りのある食べ物を送れないかなと思って母に相談したら、「いいとは思いますが、例えば日本からアフリカまで送るのは船で送るから数ヶ月かかる。送ってる間に腐っちゃうから、将来現地アフリカに行って、農作物作ったらいいんじゃないの」って言われて、農家を目指すようになりました。農業

農の道への「きっかけ」



20

「野菜を育てる」という成功経験が自信の回復につながっている！



22

ホームレスの方の農業した時の発見

● 勤労意欲が高く、農作業に必要なスキルもある！



ホームレスが農作業している様子 [2009] 21

人間以外の多様な生き物に触れることで、「生きている」ことを実感できるように。



23

やるには体を鍛えなきゃなっていうので、小学校で剣道はじめて、中高と柔道、中学時代は空手もやってたんですけど、農業は体力がいるって聞いたんで鍛えて。ただ高校生ぐらいになると、そういう国で農業するのは技術がないとできないなと思って、そういう国でそういう砂漠地帯とかでも作れるような農作物を開発したりしたいなと思って、農学部を受験しました。ところがちょっと受験に失敗してしましまして、一浪してまた農学部受けたんですけど、またちょっと失敗をしてしましました。もう一浪頑張ろうかなと思ってたんですけど、予備校の先生が「農学部にこだわらなくても食料問題とか国際協力とかできる学部があるよ」って言われて、関東の大学を受験したんですね。

関東に出た時に結構衝撃を受けたことがあって、それが家で寝ているホームレスの方です。熊本ってホームレスの方居なかったってのもありますし、自分自身が家行って学校行って部活行って帰るの繰り返しだったんで、実際居たのに会えなかったのかもしれないですが、関東出てホームレスの方へ結構な衝撃を受けて、日本にもまだ家が無かったり食べ物を手に入れるのに大変な方たちが居るんだって感じました。自分自身は農業をやりたいってのがあったので、大学の時に農業系の会社でアルバイトをして、そのまま農業の会社に就職をしました。就職したあと有機農業の会社に転職してから独立をしたんですけども、最初はオンラインショップを始めたんですね。オンラインショップってお客さんと農家さんの距離が縮まるんですけど、お客さん自身が畑の現場を見るわけじゃないので、お客さんと畑の現場の距離が縮まってない。なのでお客さんが農業体験できるような場がないかなって考えてたんですけど、それともう2つ気になることがあって、農業界の仕事ずっと大学出てから居てよく耳にすることが、最初に入った会社がだいたい400軒の農家を束ねて一緒にしてるような組合みたいな会社で、その次の会社が1800の農家さんの出荷する組合みたいな会社で、沢山の農家さんと接する中でよく聞くようになるのが、昔に

青空の下での共同作業で、
コミュニケーションの練習の場になり、畑＝「居場所」になる。



農業をして気が付いたこと

人は野菜を育てながら、

実は…
自分自身を育てている。



24

写真がもと記事のイメージ写真を、見つけた写真に似る。

比べ段々耳にするようになった話があって、それは何かって言うと人手不足です。「なんとかさんとこの農場、今5人募集してて社宅も用意してるのに誰もなかなか来てくれない」とか、「ナントカさんのところも子供じゃなくてもちゃんと農法と畑を継いでくれる人だったら渡したいって言うってるけど、誰かいないか」って話だったり、あと耕作放棄地も問題になってましたし、空き家問題も段々言われ始めました。

だったら働きたいけど仕事が無かったり家が無い方と、人手不足の農業界、空き家がある農村を繋げたらお互いハッピーだし、そのトレーニングの場っていうか、初めて農業やる場合に試してみないと合うかどうか分からないので、ホームレスの方が最初試せる場でありつつ、消費者の方が農業の現場に近づけるような場所はないかな、そういう農園は作れないかなっていうので、えと菜園と農スクールの取り組みに至るになりました。最初に始めたのが10年前になります。これ2009年の時の写真で、ホームレスの方たちと農業した時の写真なんですけれども、初めて一緒に作業して、発見したことがあります。すごい働く意欲がすごくて、農作業に必要なスキルもあるなっていうのすごく感じます。先ほどもお話で以前日雇いの方の話が出てましたけど。当時2009年ってリーマンショックの後で、日雇いで働いてた方達がお仕事が無くて路上で寝泊まりされてる方がいて、体験に来た方がそういう方たちだったので、剣先スコップって言われる農業の手道具だったりすごい上手なんですね。ずっと日雇いで体を動かされてたので、すごく体力もあったりとか。普通デスクワークずっとやってる方って半日外に出ちゃうと日光に当たるとへばっちゃうんですが、外の仕事慣れてるんで全然働けちゃうような状態でした。ただ、農園に来られた時に人によっては「どうせ俺なんか自立できないよ」とか自信を失ってる状態の方もいらっしゃったんですが、一緒に農作業をしていくうちに段々元気になっていく方もいて、最終的にはホームレスだった方が「俺農家になりたいんですけど」って相談を受けて、実際に熊本に農家さんに就職したりだとか、あとは近所の農家さん、牛のところに就職したりってことが少しずつ出てくるようになりました。

そういう中で、なんで農業すると皆さんにとって良いのかなってのを考えた時に、一つはお野菜を育てるっていうのが成功体験に繋がってるのかな。成功体験の繰り返しなのでそれが自信の回復に繋がってるのかなっていうふうに感じました。野菜って本当にちっちゃい種、ミリ単位の大きさがこのくらい大きいトマトがポコポコ何十個も採れちゃうので、まだ自分が出来るって感じる場になるように思うんです。私自身がそうなので。そういう部分かなって感じました。あとですね、自分の手で自分の食べるものを生み出せるっていうのは、ある意味生きる力なので、それが自分の自信に繋がってるのかなって感じました。

厚生労働省×農林水産省の取り組み



「適材適所」-すそ野広い、農業という職場

<p>【袋詰めする仕事】</p> <p>体力 ★ スピード ★★★★★ 反復練習 ★★★★★ 思考 ★ コミュニケーション力 ★</p>	<p>【畑で作業する仕事】</p> <p>体力 ★★★★★ スピード ★★★★★ 反復練習 ★★★★★ 思考 ★ コミュニケーション力 ★</p>
<p>【事務所で生産管理する仕事】</p> <p>体力 ★ スピード ★★ 反復練習 ★ 思考 ★★★★★ コミュニケーション力 ★★</p>	<p>【畑を案内する仕事】</p> <p>体力 ★★ スピード ★★ 反復練習 ★★ 思考 ★★★★★ コミュニケーション力 ★★★★★</p>

就職先の業務を細分化・必要とされる能力を可視化

本来、その人が持つ特技や特性を活かせる職場に就職することで、一人一人が仕事で活躍することができる。

もう一つが人間以外のいろんな生き物に触れることで、生きてることを実感できるようになってんのかなって感じました。一緒に皆さんと農作業して、アリの観察したりしてたんです。アリって淡々と生きてるし、バッタも淡々とただ生きている。それ見て「生きてるね」みたいな話をした事があったんですけど。人間の悩みって人間社会の悩みだったりしますので、人間関係とかお金とかあると思うんです。全部人間が生み出した、人間社会だからこそある悩みなんですけど、人間の世界関係なく植物とか虫とか生きてるので、生物として生きるというのが感じられるのかなってこのとき感じました。

もう一つが、青空の下で共同作業をするので、コミュニケーションの練習の場になってるのかな。コミュニケーション得意って方もいらっしゃるんですが、苦手って方もいらっしゃいました。写真見てもらうとわかるように、横並びに皆で草を刈って歩いていってる様子なんですけど、横に並ぶので目を合わせなくていいんですね。手元見て会話出来るので、喋りやすいんですね。普段目を見たら相談しにくいじゃないですか。自分の弱みを相談したりだとか言いづらい相談とか。だけど、横並びだと目を合わせなくていいので、結構コミュニケーションしやすくなる。それはコミュニケーションの練習に繋がっているのかなっていうふうに感じます。そうするとあと共同作業の話をする時、作業って一人だと2時間かかるのが二人だと1時間で出来るかと思いきや、1時間より全然短くなるんですね。協力するとすごく早くできる。達成感もあるし、共同作業とか掛け声とか人と喋らないといけないし、それもコミュニケーションの練習になってんのかな。結論として、人は野菜を育てながら実は自分自身を育ててるなって感じました。

あとですね、本人が元々持ってた才能を見つける場所になっていると感じました。農作業ってコツコツやる作業もあれば、臨機応変に対応しなきゃいけないものだったり、人と協力するものだったり、いろんな作業があります。それをやると、なんか「俺これ得意だ」って気づいたとか、逆に人から教えてもらえたりするんです。一緒に作業してる人から、「ナントカさんこれ得意じゃない」「そう言われれば、そうだ」みたいな。長所を発見するような場にもなってるって感じました。

これ国の厚生労働省さん、農林水産省さん、農福連携の取り組みなんですけど、一例として農スクール取り組みが出ていますので、そのスライドを持ってきました。

先ほど長所がわかるって話をした。みんなで農作業すると長所がわかるんですけど、長所がわかると何が出来るかって言うと、その人の能力を活かせる就職先とマッチングできるっていう部分があります。例えば反復作業、同じ作業をコツコツと繰り返す作業が得意な方は、大規模農家の袋詰め、大きい農家さんって分業がはっきりしてますね、畑に出るチームは畑に出るし、袋詰

藤沢市と共催で「農福連携入門講座」を開催



完 29

めのチームは袋詰めだし、加工のチームは加工。反復作業得意な方は反復のところにと就職したり、畑で農作業するのが得意、体力あるけど覚えたり苦手だっ方は畑で作業する仕事に向いてたりしますし、考えるの好きだけど体力仕事苦手って方は事務所で生産管理する仕事だったり、人と喋るのが好きって方は畑を案内する仕事だったりと本当にそれぞれ一人必ず一個以上長所がありますけど、その長所と合うところで働けば、いきいきと働くことができるので、そういう部分に力をマッチングに対して入れてやっています。

事例と言うか、これまで就職した人の具体的な話をちょっと最後にさせて頂くと、60代の男性、正社員で就職しました。もう6、7年前ですが、60代の方が正社員として農園に就職した方。ひらがなは読めるんですが漢字の読み書きができない方でした。話聞くと家の手伝いで小学校ほとんど行けていないって。ひらがな書けるけど漢字が書けない。履歴書書けない。農家さんが体力ある現場の仕事で募集してますっていうことだったので、履歴書代筆でもいいですかっていったら、いらないうて言われました。「今からうちの農園に来て何ができるかが重要だから、体力あってやる気があるならぜひ来てほしい」ってことで、就職したケースがあります。あと、もともと自分で会社やってたんですけど上手くいかなくなってホームレスになった方も大きめの農家さんに就職したってケースがあります。

ホームレスの方と人手不足の農業界に繋ぐっていうところから始まったんですけども、色々な方が農業に行くと嬉しいなってことから、今引きこもりの方がたくさん来てます。引きこもりの方の中で就職した例を挙げると、人と話すのが苦手な、対人恐怖みたいなのがある方が牛舎に就職しました。人を相手にする仕事じゃなくて牛を相手にする仕事なので、大体直属の上司一人とだけ会話すればいいんですね。仕事を通じて。だから人と会話しなくていい仕事。就職先の人に「彼どうですか？」って聞いたら、「繊細」。繊細だから恐怖症になっちゃうんですけど、「繊細だから普通の人気づかないような牛の異変に気づくとか、すごい助かる」と。人と喋るのが苦手な農家さんが一人で運営している農園に就職が決まった、当時30ぐらいかな。そこは農家さんも人と喋るの嫌だから、教えるのが苦手、仕事を教えるのも苦手だった。就職後、「彼、どうですか？」って聞いたら、「自分も説明するのが苦手だから、彼の場合は、会話を通じて教えなくても、背中見て学んでくれて、阿吽の呼吸で仕事ができるからめちゃくちゃ助かっている」ということもありました。

あと長年引きこもってた子がいったん農家さんにアルバイトに入って、その後にもう一回勉強しようって都道府県がやってるところに行くと、今農業経営者になっている卒業生もいます。話し出すと時間もあれなんですけど、本当にその方が元々持ってる長所を活かせば十分に活躍できる場

があると思うんですね。そういう方が一人でも増えるといいなと思ってそういう活動をやっています。これが私の活動の紹介でした。ざっと話したんで宣伝になってしまうんですが、本を出していますのでよかったら読んでみてください。どうもありがとうございました。

講演（2）Social Firm—ローカルを極め、グローバルにつながる

新井利昌（埼玉復興株式会社・代表取締役）

こんばんは。埼玉県熊谷市から参りました。日本一暑いところから来ました。冬場は埼玉でも群馬県と埼玉の県境で、群馬の赤城山から赤城おろしが毎日吹くような、夏暑くて冬寒いってところで、農業と福祉をやっております。基本的には障がい福祉から1993年、少し紹介させて頂くと、平成5年の、もともと両親が縫製業で、それでは食っていけないということが社会の変化の中で、自宅を改造して、ある日障がいのあるメンバーと一緒に住むようになったということで、そこで金庫まで渡されてっていう流れの中で、そんな出会いというか、いきなり一緒に住むようになってから、生活する場所も無いし働く場所が無いということで、当時の縫製の下請けから障がい者雇用と自前の作業所みたいな形で、社会福祉法人の一部からスタートしてきました。それで障がいがあっても仕事ってのは何でもできるんですけど、その仕事自体が今の社会のシステム、資本主義の世界ではどんどん低賃金になってしまっていて、それで農業、下請け集まれみたいな状況になって、また仕事無くなっちゃうなというところから農業を平成16年度、始めた。そういう流れを我々がやってることだけを時間もないので紹介させて頂いて。足りないところは皆さんと一緒に組んで一緒にやればやれるよということで、ちょっと紹介させて頂けばと思っています。

実際、障がい者雇用事業所協会っていうことで、全重協っていう障がい者雇用の師匠、西日本とか福井、長崎とか大阪も含めて、福祉は西高東低だとずっと思っていて、今日も初めて釜ヶ崎見させて頂いて、我々も福祉からスタートしているので人を選んだら福祉じゃないということでやってきてですね、現在では障がい者就労促進協議会の関東の会長も務めさせて頂いて、農業法人協会の方では誰でも働けるよと、一人だと農業の戦力にはなれないけども、みんなでチームでやったらちゃんとした担い手になりますよってことをやったりしています。

母体が埼玉復興株式会社ということで、今これからグループ化ですね、ソーシャルタウンを目



障害者雇用の理念

- (公社)全国重度障害者雇用事業所協会 常務理事
- 関東ブロック障害者就業促進協議会 会長
- 彩の国埼玉・農業法人協会 副会長
- (一社)日本農福連携協会 理事
- (一社)農福連携自然栽培パーティ全国協議会 理事
- さいたま障害者就業サポート研究会 副代表
- 埼玉県障害者雇用サポートセンター 監事



- 障害者雇用促進のための職場改善コンテスト 奨励賞
- 第62回埼玉県更生保護大会さいたま保護観察所所長 感謝状
- 第43回山崎記念農業賞 受賞

埼玉福興株式会社

埼玉福興株式会社

- ミッション：福祉の創造「家族という形・労働力の主力となって働く」をテーマに、障がい者等が、様々な形で社会的に自立できるような環境を創出し、共に人生を歩む環境とシステムを創造することを目的とする。
- 設立：1996年
- 資本金：1000万円
- 事業内容：障害者施設の管理運営業・農地所有適格法人・自立サポート
- グループ：NPO法人グループファーム・NPO法人AgriFirmJapan・(株)ソーシャルコネクトジャパン・(株)ソーシャルケア・(株)ウエルフォレスト
- グループ全体：52名(障害者雇用7名)



埼玉福興株式会社

SOCIAL FIRM とは

労働市場で不利な立場にある人々の雇用を創出するための社会的ビジネススキーム

《SDGsの基本理念》
誰ひとり取り残さない
No one will be left behind.



ヨーロッパ発祥の「ソーシャルエンタープライズ(社会的企業)」の1種。社会的な目的をビジネス手法で行い、その事業活動で得た利益を事業に再投資をする形で社会的目的を実現させる。ソーシャルファームは、労働弱者の人々のために仕事を生み出し、また支援付き雇用の機会を提供することに焦点をおいたビジネスである。



埼玉福興株式会社

《社会的企業として有機的なつながり》



埼玉福興株式会社

指してますので、のちほど説明しますが、事業を拡大しているんな人が生活できたり仕事できたりすることを拡大していくというところをやっています。基本的には福祉の創造ということをもミッションにしまして、家族という形と障がいがあっても労働力の主力となって働くをテーマにして障がい者等が社会的に自立できるような、自立と自活ですね、環境を創出してみんなで歩いて行くというシステムを作るということを目的としています。今群馬と埼玉、二拠点目が群馬にありまして、グループ全体では52名の社員とそのうち障がい者雇用が7名ですね、障がい者施設を運営したりスタッフ側で障がい者雇用だったり難病だったり何十年働いてないニートだったり、そういうメンバーでみんなで農業で生きていくんだということで、今ではもう農福連携じゃなくて、農業で生きていくということで、農福一体ということで、いろんな下請けもやってたんですけど、その仕事自体は他の障がい者施設さんに全部渡して、農業に舵を切ってます。

基本的にはソーシャルファームっていうのは農業じゃなくて、firm っていう社会的企業のスペルを取ります。労働市場で不利な立場にある人々の雇用を作ってくということで、これからSDGs、今度の大阪のサミットでもこれが出るってことで、その実践の場として我々がすごく該当して頑張ってますね。基本的には障がい者、あとはニートとか引きこもりとかシングルマザー、難病とか若年性認知症の方とか、そういった人たちに関わりがあるので、福祉って人を断ったことがないので、そんな形で罪を犯した障がいの、少年院とか、刑務所からきたりっていうそんなメンバーで今農業やっています。

今日これがばーっと紹介してくる形なんですけど、基本的には我々が真ん中に入って、農家さんに右下の、我々ネギの苗とか作ってますので、買って頂いて、ついでに栽培指導してもらった



生活寮「年代寮」

- 理念：家族
ソーシャルファーム
- 方針：いっしょに！
「働く」・「貢献」
- 受入経歴：知的・精神・身体・発達・引きこもり・認知症・若年
浮浪者・難病者・ニート・養護施設から・虐待から等
- 18歳～75歳
- 就労状況：一般雇用4名・就労B型
- 2019年現在 入寮者数 28名
(退亡者数 1名)
(服役者数 0名)



7

埼玉復興株式会社



生活寮・生活ホーム！！



8

埼玉復興株式会社



余暇・社会・就職・イベント



11

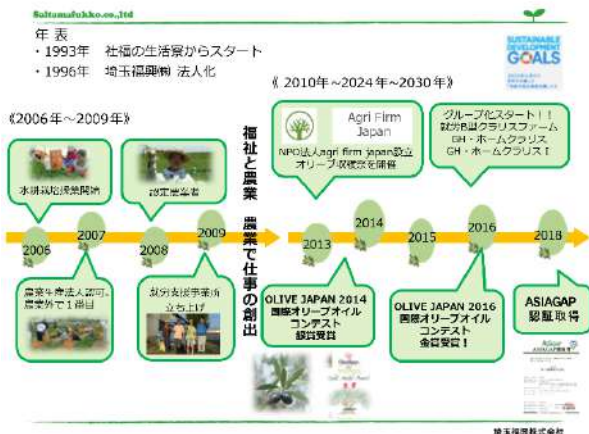
埼玉復興株式会社



埼玉復興株式会社

り、あと施設外就労って農家さんに行って仕事いただくっていうこともやっていますし、左下の障がい者施設の方は我々一社でやろうと思ってないので、一つ一つの法人でやってもまだまだ我々も農業一年生なのでどうしても量が作れなかったりってことで、障がい者施設さんに苗を買ってもらって、みんなで一緒にやりましょうって言って、6施設さんと農業法人と一緒に白菜とか玉ねぎを作ってます。苗を買って頂いて変な形のものは全部買い取ってパッケージ詰めしてイトーヨーカドーに出すとか、そういうことをやっています。左上の企業さんには障がい者雇用の新しい取り組みで障がい者雇用の特例会社って制度もあるので、その顧問をやらせて頂いたり、その流れで農産物を買ってもらったりとか、障がい者雇用、生活が24時間28人と一緒に生きてるんですけど、そこで農業嫌だっけケースは他の企業さんに雇用してもらおうということで、またクビになったら帰ってくるっていう形でやっています。国に対してはいろんな相談を受けることで、半分税金投入していただくような形ですけど、そういう社会課題を解決しながら企業として税金を戻すっていう、ソーシャルファームの形かなと思ってます。そういうことを色々働きにくい人たちが一緒にやっています。

基盤なんですけど、古い総合福祉法で障がい者グループホームってあるんですけど、昔の制度を残してしまっていて、「生活寮」というまだ2人部屋とかが使えるところなんで、これが僕はある時期は家族と一緒に住むようにして訓練して一人暮らしのグループホームとかが理想なので、ここからスタートしまして家族という形、今28人いますけど、みんなで一緒にやるということと働いてということと、障がい者年金とか生活保護っていう形で生活を支えて頂いておりますので、やっぱりこう社会に貢献するものがないといけないということで、出来る社会貢献はしっかりやっ



てくっていうことでやってます。

今までの経営、先ほどお話ししましたが、知的・精神・身体・発達と、最近引きこもり系の精神だったり発達障がいや精神とか若年性とか難病とか養護施設からですね最近、あと親の虐待とか親の自殺とかから来る若い子たち、障がいなのかグレーゾーンな、今は18歳から75歳ですね、一緒に住んで、農業嫌だというケースは送り出しもしています。他の障がい者雇用として送り出し4名と、基本的には就労支援B型ですね。先ほどの発表ではA型があったんですけど、障がいの福祉の形で就労支援を入れて、僕らは農業で持続可能な形をつくっていると。就労支援で育てて、自分たちで雇用する。あとは他の企業に送りだすとか。あとは生活のなかで上野の方にホームレスになってしまう障害のケースもあるんですけど、今は刑務所には戻ってないですけど、そんな形でいろんなメンバーで農業やってます。新しいグループホームも自分たちで育てて段々ステップアップしていくってことをやって、一部真ん中の写真、先ほどありましたけど我々もお金と理念を作ってく農業をやり始めて、シェアですね、皆が参加できるような農業のスタイルを作ると。いつでも起きていつでも何か持って行っていいよというような畑をやってます。残ったものは例えば種取りをするとか。自然栽培もやり始めています。

あと、自分たちで野菜売るのは実はあんまりやらないですけど、頼まれたところで地元の小学校とかでうちの障がいのメンバーで販売するとか、地元の「くまがや小麦の会」さんに日当を頂いて販売をしていくかたち、自分たちでものを売ってというよりも他から頼まれたことを全部こなしていくってそういうことで障がいがあっても社会参加というかたちで、そこを大事にしています。自分たちの事ばかり考えない。周りのことをしっかり考えてやってくってことをやってま

作業環境の整備

- 農業全体のレイアウト
- 作業工程の分割（単純化）
- 人の組み合わせ
- 治具の開発



19

埼玉福岡株式会社

群馬圃場：自然栽培と施設外就労



埼玉福岡株式会社

埼玉農場概要

- 水耕栽培（水耕葉物）600坪
- 野菜苗・花卉 500坪
- 圃場 4.0ha
- オリーブ 2ha（埼玉・群馬）
- オリーブ搾油機
- 2018年GAP認証取得



17

埼玉福岡株式会社

一人でやる仕事（水耕栽培）



20

埼玉福岡株式会社

す。あとは土日にサッカー、罪を犯したメンバーでもサッカーに参加させてもらったり、またクビになって帰ってきたりとかセンターにつなげたりということも、ある意味障がいのところは全部やっています。

農業分野での障がい者の就労と雇用ということで軽く。今はいろいろと農業初めて、平成16年からスタートしまして、種まいて2割ぐらいしか芽が生えてこなくて、諦めて水耕栽培に行ったりとか、ハウス建てる資金が無いので農業法人になったり、自立支援法になって就労支援事業っていうものが出来て、それを取り入れて会社のかたちを変えたり。農業はじめたときは本当にスローライフっていう概念が日本にも出てきたところで、スローライフで生きていこうと思いました。あと仕事なくなっちゃう中で、食糧だったら仕事続けられるかなど。思いつきでオリーブを植えたんですけど、今では農業なので大地だったりとか地力だったり気候だったりってことで、なんとなくこれでやったら世界一かなと思いつながらですね、そんなことでちょっと自分たちで絞って国際オリーブオイルコンテストで今世界で金賞とってます。そんな中で僕らは障がいのあるメンバーで全部やっていますので。あとは農業に関しては種取りとか玉ねぎをいっぱい作っていますので、そこにアジアギャップ（編注：GAP, Good Agricultural Practice）農業法人としてのちゃんとした取り組みもやっています。

基本的には右上の10mのハウスからスタートして、本当にいろんな下請けやってきたので、雨が降ったら仕事が無いというのが一番どうしようもなかったもので、ハウスからスタートしてやったんですけど、当時はサラダマックが始まった時のベビーリーフを作るぞってことで、やるしかなかったものでやったら大失敗した、芽が全然生えてこない、当時の写真なんですけど、全然仕

チームで仕事 (畑)



23

埼玉福興株式会社

チームで仕事 (施設栽培)



埼玉福興株式会社

ペアで仕事 (水耕栽培・畑)



埼玉福興株式会社

治具①



24

埼玉福興株式会社

事にならなくて皆さんのお力をお借りして、お客様のためにしっかりものを作るというところで、最初は農家のおじいちゃんに教わって野菜作るよりもまずおじいちゃんのシソの葉っぱを袋詰めするというところから農業をスタートして、じゃがいもでも作るかとか、まあそういうことからスタートしては、おじいちゃんも世界三大イモの一つのアピオス、他にクワイモとヤーコンがありますが、アピオスの種を持ってこれを増やそうとやったんですけど、いっぱい作ったらその市場がなかったりとか、多品目だつてやってそれも追いきれなくて失敗したりとか、ある程度のほとんどの失敗はしてきました。

今は重度の知的障がいのメンバーもいるし、本当に犯罪やるくらい元気な発達・精神のメンバーもいますので、それぞれが働けるようなそれぞれ受け入れてどうにかしなきゃいけないから、こういう広がりになってしまったというのが正直なところなんですけど、水耕栽培が今 600 坪と、野菜の苗ですね、深谷ネギの産地なのでネギの全部は作れないけど苗だけなら作れるよねってことで、障がい者でもできるところだけを徹底してやっています。色んな失敗してきたのでねってことでやっています。圃場は 4 ヘクタールで、最近借りてくれって言う話で、全部回せてないですけど、5 ヘクタールまで、ある意味地域を守る上では少し無理してでも借りています。追いついて来ないですけど。

あとオリーブが 2 ヘクタールで、また別の仲間と一緒にやってるので、そっちで群馬側で今 7000 本植えたりとか、自分たちの仕事を作っていくには、自分たちだけでは 7000 本なんて植えられるんですけど、仲間が居て作業の手伝いに行けば良いだけだと思っているのでそういう取り組みをみんなでやっています。あとは農業全体のレイアウトということで言えば、例えば知的、毎日コツコツできるケースはその水耕栽培とか、毎日同じ仕事はできないっていう能力高いけど毎日違



治具②



25

埼玉種苗株式会社



治具③水耕栽培苗部分は植物工場



26

埼玉種苗株式会社



治具④



27

埼玉種苗株式会社



治具⑤生産量に合わせ変化



埼玉種苗株式会社

う仕事を、苗やったり玉ねぎやったり白菜やったり、毎日違う仕事を組み合わせてくケースとか。あとは一人一人に治具を合わせるとかですね。いろんなケースいますので、先ほどのお話もありましたけど、人と相向かいで仕事していると24時間文句言ってるようなケースがあったりして、そうなら一人でやる仕事を、あとは二人で並んでやれる仕事を。中々ここら辺のケースは段々人が働けなくなっているなど思ってるところで、その場所も別に作ってるんですけど。あとはチームでネギを。

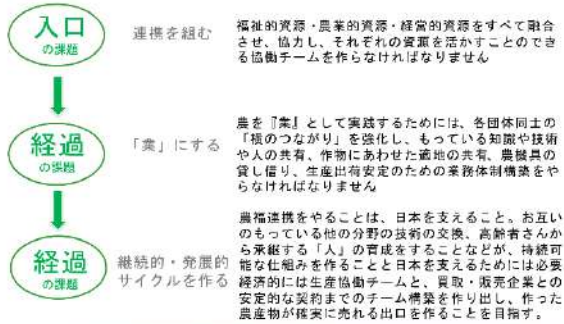
ここで説明すると、(スライド「チームで仕事(施設栽培)」の)左上の機械は資材屋さんと組んでるので、我々企業ですけどお金は無いので左上の写真の機械を持ってきてくれて、資材もそっちの会社さんで、あとは営業できないので営業やってもらって、うちはハウスと人手を。あとは仕事が変わらないっていうことで障がいがあっても10年同じことができると、このように左下のようなネギの苗、今300件の農家さんのネギの苗を作ってます。

ある程度障がい福祉が地域にあることで周りの農家さんと一緒に事業を作ってくってことを、我々税金が半分入ってますので、農家さんと周りの企業さんと一緒にやってくってことを。今は本当に彼らで出来ることだけを徹底してやっていくってこと。こんな形でみんな。あと色々なものを作って失敗してきてるので、例えば玉ねぎとか白菜ですね集中してやっています。あとは就労支援もありますので暑い時期は無理してやらない。8月は埼玉だと農業できないんです。暑くて死んじゃうって状況なので。そういう時は他の農家さんのところに仕事に行くというように、逆に出稼ぎみたいにやっています。

一人一人自分の力がなければ、預けて種を撒く機械もありますし、あの簡単な播種盤っていう



農福連携における課題



埼玉福農科株式会社



機械・設備 シェア⑥



30

埼玉福農科株式会社



プロと素人集団シェア⑦



埼玉福農科株式会社



みんなで得意なところを分業してやれば、障がいがあっても、食料生産の重要な担い手！



埼玉福農科株式会社

治具があります。農業は苗半作なので、苗で苦しんできたので、水耕栽培の苗のところは植物工場になって、あとは人手で回すっていう。あとは簡単な数を間違えないようにしたり、角度つけて出やすくしたりってあります。あとは生産量に合わせて自分たちで玉ねぎを SML サイズに選別するやつと、どんどん増えていくと足りないのでも右側の写真、ずっと使われていない牛舎をお借りできることになったのでその牛舎の中、周りにつくっているものをみんな分解して選別機を作るとか、(スライド「治具⑤」) 左下の写真は作業スペースを確保するのに自分たちでハウスを。これは精神の雇用のスタッフと若年性認知症の方と一緒に。全部自分たちで出来ることは自分たちでということ。

皆さん農福連携は初めてだと思うんですけど、福祉施設が単独で農業やったり基本的には連携していないのが農福連携の課題だし、厚生労働省とか農林水産省とか省庁同士が連携しないと、僕はそういうふうにするんですけど、そういったところからまた色々な社会課題が解決できるし、福祉施設だけじゃなくて、皆さんのような活動をされているところにどういうふうな制度を作っていくかというところをやったりします。あとは農“業”になってないのが一番の課題です。業にするプロセスはさっきお話ししたように資源がなければ他の企業さんにお借りしたりとか、(スライド「機械・設備シェア」⑥) 右下の写真はその植え付けのお仕事、自分たちの畑もやりたかったんで教えてもらいながらその機械をお借りしながら、ついでにその農業法人のお仕事も頂いて、無ければ周りの人に聞いたりとか、なければ一緒にやりましょうと言えようかという風に仕事になっていくということです。

白菜は種まきから収穫、白菜も自分たちで作って農家さんと一緒に組んで契約のあれで大失敗

みんないつかは死ぬ！



埼玉復興株式会社

最後まで人の役に立つ世界で生きる。 最後まで「生きる」！



埼玉復興株式会社

《 持続可能な地球環境のため自然栽培への挑戦 》

地球環境にやさしい自然栽培での野菜とオリーブ栽培にも取り組む。



埼玉復興株式会社

病院 or 介護施設 or 居場所



埼玉復興株式会社

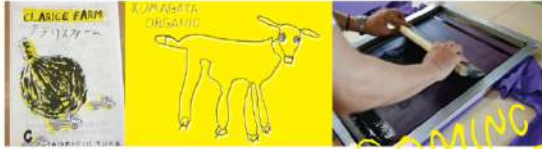
というところがあるんですけども、僕らのせいじゃないんですけど、色んな失敗があってリベンジなんですけど、今じゃプロの農家さん、二代目三代目の若い人たちと今一緒に。東海漬物さんとか「こくうまキムチ」の原料は我々作っているんですけど、種まきからここまで我々がやって、ここからプロが入るんですね。(スライド「プロと素人集団シェア⑦」) ちょっと右上の緑服着た、そこはプロの仲間ですけど、緑のカゴをうちらが並べてますけど、別にやらなくてもいいんですけど、それも仲間だから全部手伝うということでお金をシェアしてですね、ここまでのお金と収穫のお金を分け合うと。ここでもう全部出荷になるので、製品になるので。たとえば変なふうに切ったりとか、皮をむきすぎてモノが無くなっちゃったりみたいな話になるので、ここからはやらないでプロに預けるってことでやってます。要は得意なところだけ徹底してやって、チームでやることで、農林水産省は障がいのメンバーが中々担い手に成れないと言うことがあるんですけど、見方がやっぱり違うと思ってて。一人一人能力はあれですけど、チームで組織で動いたら農業の戦力になりますよということをやっています。

(スライド「みんなで得意なところを…」) 左下の写真は、作業能力上は重度の知的ですけど、一人で運転して一人で納品に行くと。もちろん納品の売り場のフォローは担当の上司といつも交流してますけど、農業だとやれる可能性っていうのは障がいがあっても作る方で人と話さなくてもってことがありますので、みんなで分業してやれば、こういうふうやってるよということですよ。あとは、グリーンケア。精神とか引きこもりとか、今バリバリ働ける、最賃(編注:最低賃金)目指そうねっていうところと、工賃アップっていうところですけど、これからも精神と、病院なのかこういう場所にいるのか介護施設なのかってことですね、みんな引きこもり系とか、人



《 みんなの力で世界へ挑戦 》

農業で生きる。どんな状況になってもみんなといっしょにやれる場。
野菜の箱や袋やパンフレットのデザインから印刷まで自分たちでやってみる。
デザイン業務の受注の開始するとともに、ソーシャルファームの体験ファクトリーとして、地域の社会課題を解決していく。



《タブロイド冊子を刊行》
ソーシャルファームメンバーの想いをイラストをデザイン化

COMING
TOGETHER

埼玉復興株式会社



持続可能な地球環境や経済システムの実現

「赤城おろし経済圏」

Start Up Organic !!

2024年Parisパラリンピックへ！

埼玉復興株式会社

との対応ができないとかですね、ということと、場所としてのグリーンケアという形で農業やるということをやっています。

生活も抱えていますので、何人も亡くなったりする状況ですので、最後まで生産的なところで、最後までみんなと一緒にいけるとこまで行くということで、だから介護施設とか病院で死ぬような人生はあんまり送って欲しくないなと。それは僕の理想でもあるので、皆でピンピンコロリで死んでいくと。基本的には、どんな障がいとか状況であってもやっぱり最後まで人の役に立つ世界で生きてくぞということで、介護施設に来た85歳でもやれることは最後までやってこうということをやっています。

持続可能な環境のために自然栽培とか。オリーブは全部自然栽培でやってまして、ここは今オリーブオイルは世界で金賞を取っているんですけど、実はオリーブの葉っぱを加工してお茶にしたり、オリーブハーブティーを世界三つ星ブレンダーがたまたま隣の隣の市に居たのでそこで使ってもらったり、先ほど雑草の話もあったように、僕も雑草が食べられればそうしたらいいとか、出来たものをみんなで考えていけば良いんじゃないかなと思っています。

あとは、人が働けなくなるので、療法だとか、チキントラクターとか、人が働けなくなれば動物と一緒に、ヤギを飼っているんですけど、若年性の認知症の方がどうせろうろしてしまうのだったらヤギを持ってウロウロしてもらおうと除草になって仕事になりますよと。要は動物と一緒に仕事すると。蜂の巣箱も巣箱自体にノズルが付いているので、フローハイブってやつでこれだけでハチミツが採れちゃうような、テクノロジーが進化しているので、サイボウズさんと一緒にやったとき、自動制御システムとかですね、彼らだけで農業出来るような仕組みを考えると、「草刈りルンバ」みたいなものがあったり、ドローン使ったりとかですね。お茶飲むことを仕事にしようと思っていて、人が変わってきているし、これからどんどん仕事が無くなる時代になって来ます。そうは言っても、障がい者だから草むしりということではなくて、無駄なことはテクノロジーで済ませて、いろんな考え方、やれるところはやる。大変なところはテクノロジーを頼って、お茶を飲んで豊かに生きていった方がいいなと思ってますね。そういったことで、精神病院に居ないで、国のコストもかからなくなるので、介護施設にいかないで、そういった貢献が働く概念を切り替えて生まれてくるということをやっています。

あとはパッケージデザインも今は自分たちで。目指せ晴耕雨読で、晴れの日には農業やって雨の日にはアート、創作的な。今日はあこがれのココルームに行けたんです。インスピレーションをね。要はそれぞれの出来ることをやればいいなと。自分たちで出来ることは全部自分たちでやる、出



Greater KUMAGAYA Organic Fes2018



埼玉福興株式会社



《 2019年Organicをいかに日常にしていくなか! 》



埼玉福興株式会社

来ないところは周りの皆さんと一緒にしていくってことを設定してやっています。あとは、地域の人たちに広げられれば、我々だけでやろうとは思ってないので、優しい地域を作って行けばみんなが働けるようになるのかなということ。

あと我々、埼玉とか群馬とか我々県境に居るので、赤城おろしの風がフラットに吹くところですね、赤城おろし経済圏だといって、スタートアップオーガニック。オーガニックっていうのは単純な有機栽培ってことではなくて、有機的な人のつながりということで環境省さんとオーガニックフェスをやったりもしたんですけど、目指すは2024年パリパラリンピックで日本のソーシャルファームとして世界に行くぞってことを目的にしてみんなで農業やっています。先ほどの色々な連携ということ、戸部支援学校さんとか地元の農家さんとみんなと一緒にやっていると。野菜を納めて使ってもらってるウエディング業界のご家族の皆さんが、うちの自然栽培の畑で福利厚生ですね。ただ仲間のところから社員旅行でこっちの方に来て、そういった社員旅行のご飯を障害児のお母さん方に作っていただく、それを仕事として提供する、そんなことをやっている。

ソーシャルファームって制度が韓国やアジアの方では先行して始まっているということで、あとは使ってもらう野菜、東京の八芳園さんとか。あとはネギの苗とか、福島の仲間のところとか。遠くに行ってもスタッフの勉強だと思っていますので、いろいろと話があるときは仲間のところにはコストがかかっても届けています。仲間の交流と栽培技術を教えるとか、そういうこともやっています。

あとはそういった話を通じるように、グレートクマガヤオーガニックフェスということで、熊谷でも世界のラグビー大会がありまして、農福連携ビレッジを私が担当させて頂いて、皆さんにお話しているようなお話をして、現場で仲間を作っていくってことをやっています。初年度ではラグビー一年前イベントと合わせて45,000人の中で働きにくい人が仲間と一緒に準備もお仕事として頂いてやりました。これはイベントで終わっちゃうと意味がないので、いかに日常にしていってことで自然栽培米を立正大学さんとか、地元のヘリテージファームというホテルの農業法人さんとか高齢者のばらいろさんとか、地元の農業法人さんとか、特例子会社さんとか、まだ田んぼは二反くらいしかないんですけど、みんなでこういうフラッグ立てて一緒にスタートするというので、みんなである意味退路を断って楽しくやりましょうということ。この看板も手作りして立正大学さんからちょっとお金を頂けたんでこれも仕事としてやっています。あとは色々な想いを持つて人たちがこれから重ね合って動き出してきたなという時代背景かなと思って。オーガニックとかソーシャルファームとか2024年くらいに伝わり出すのかなという、そんな



《 2020年それぞれの想いを重ね合わせながら！ 》



埼玉福興株式会社



持続可能な地球環境や、やさしい経済システムの実現のために行動しよう！



自分の快楽、生き残りだけを追求する大量消費型社会とは一線を画し、持続可能な自然環境と社会システムのもとで、すべての人たちが共生共存できる社会を志向する生活創造者にいっしょになろう！！

埼玉福興株式会社



《 それぞれの、今までを、重ね合う 》



埼玉福興株式会社



《 それぞれの、理念を、重ね合う 》



埼玉福興株式会社

行動をやっています。

これ加工ですね、オリーブ茶。今できることで、商品に出来る人も周りを見渡せば出てくるので、みなさんで行動を止めないことが大事かなと思っています。これは世界三つ星ブレンダーと一緒に組んでやっています。あとはホースセラピーの仲間とか、農泊とか、一緒に重ね合わせてやっています。あとはオーガニックフェスで使った竹テントも自分たちで切って組み立てて仕事で、引きこもりをアルバイトで雇ったりして作って。いろんなことをイベントがあるのでそういったイベントを全部竹テントに切り替えてもらって、折り畳みで十年使えたりするんですけど、アナログの仕事をして自分たちの仕事は自分たちで作っていくところを、2016年東京でやったオーガニックフェスですけど、竹切る仕事とか竹テント作る仕事とか、農業の一環としてやっています。

駆け足になってしまったんですけど、農福連携、今の我々のパターンっていうのが色々な障がい者が来るのでそれに合わせて作って行って、今は能力が高いけど人と顔を合わせたくないとか、引きこもりのメンバーたちと精神の引きこもり系の、でも一緒に仕事をしだすとそれぞれ僕らからは見えないネットワークがすごいあったりして、ネットワークとネットワークが重なり合うととんでもないなと思いつつ。何となく引きこもりって畑の中で農業と、何か新しいものが生まれる感じがするので、それぞれの地域でそれぞれの何か必ず生まれると思うので、まとまらないんですけど、そんなことを紹介させて頂きました。ありがとうございます。





第3章 報告と講演を受けて

(1) パネルディスカッション

小島希世子・新井利昌・綱島洋之

綱島：お二方に非常に印象深いお話をいただきました。まず、新井さんの方のお話聞いてて凄いことをさらっと言ってしまうという印象を受けたんですね。特に「人を選んだら福祉ではない」。まさにその通りですよ。「個人個人で出来ないことがあったとしても、チームを作ったらなんでも出来る」、そうおっしゃいました。僕も出来ることならそうしたいけど、チームっていうのは誰かコーディネーターの人がいると思うんですけど、コーディネーターは大変じゃなかったんですか？あるいは大変だったとしたら原動力は何だったのでしょうか。

新井：我々は生活と就労が一体なので、要は24時間一緒にいるということ。仕事と生活切り離しちゃうと難しいんですよ。例えば玉ねぎの話を24時間する。そうすることで働く意識を。逆にトラブルが起きないように、玉ねぎで染めていかなきゃいけないって課題があるので。そういったことをやってる状況ですね。常に意識を、玉ねぎに。あと核を作る。核が出来ちゃうところに入れて反応見ながら、ダメならこっちのチーム。チームも増やしていけば良いかなと、そんなやり方でやっています。

綱島：有難うございます。そこで小島さんに伺いたいんですが、先ほど新井さんが道具とかプロトの分業とか色んな凄い仕掛けがあると思ったんですが、小島さんの農スクールの方ではそのような取り組みって何かなされていますか？

小島：うちの場合、卒業後出口が農業法人への一般就労になるので、その方たちが何が向いてるかを色んな農作業を組み合わせてやっています。例えば種まきだとコツコツ地道にできるかどうかを見れるので、そういうのを見たりとか、ご自身の良さを気付く為にワークノートを使って毎回A4一枚書いてもらったりという仕組みづくりをしています。自分と向き合うとか何が得意か見出す仕組みづくりに力を入れています。

綱島：その仕組みづくりっていうのは、ご自身で思いついたんですか？何か参考になさったんですか？

小島：大学で心理学をかじってたので、認知行動療法とかのテキストを引っ張り出して。ほとんどは現場で書き直して今の形になりました。

綱島：心理学を勉強した経験が役に立った？

小島：めちゃくちゃ役に立ってます。やってなかったら今のワークノート作れてないかもしれない。

綱島：小島さんの農園と農スクールとって色んな方が農作業の研修を受けて来られるということなんですけど、そこで毎回作業する時にワークノートに記入してもらってことですよ。そこでこれまでに印象的な記述ってあったら、教えて頂けますか？

小島：実はワークノートが段階によって11種類あって、段階によって変わるんですけど、最初は農業好きか分かんないけどやってみようって来てる時の設問と、慣れてきてからの設問と

変わるんですが、「自分と向き合うためにあなたは今どう感じましたか？」とか、「苦手な作業があったときにどうやって乗り切りましたか？」って設問があるんです。ペアワークとかグループワークを取り入れているんですけど、ペアワークの時は「相手の長所を発見できましたか」とか。グループワークのときは、「うまくチームとして機能するためにどういうことをやりましたか？」っていう設問があるんですけど、就職していった方は共通点があって、周りの仲間の心配を始めた人が就職していくって発見がありました。

綱島：仲間の心配をされる。つまりそれってやっぱり農作業好きになれる人って作物の変化を楽しめる人、作物の変化とかに気づける人、気づいた時に何か感じて好きになっていくってところがあると思うんですけど、作物の変化に気づく感性と仲間の心配をするような感性って共通しているものだと思いますか？それとも別のものだと思いますか？

小島：必ずしもイコールではないですね。関心の対象が人にあるのか、植物にあるのか影響すると思いますし、もちろん両方、人の変化に気づく方が作物の変化に気づく。共通することもあるけど、かならずしもイコールではないかな。

綱島：そこで新井さんにまたお話を戻したいんですけども、いろんな作業をしやすくするような道具、色々工夫なさってたかと思うんですけど、あれはどなたが開発されているんですか？

新井：企業で仕事を受けているので、やるしか無いから、必然にあるって、出来るようにしていかなきゃいけないので、私もやりますし、自然に現場のスタッフが。仕事となると工夫していくので。ちっちゃい面積をやると大変かなと。一町やるぞとなったらそれなりに皆で考えていく。ちっちゃいときのほうが大変。どうせ失敗するならでかい面積やって失敗したほうが生きてくるかな。畑の問題もありますけど。

綱島：退路を断つというのはそういう意味。

新井：みんなです。やる意識も出て来るしって言うのがありますね。

綱島：障がいを持つてる利用者さん、スタッフの方もいると思うんですけど、自分で作業しててこうしたほうがやりやすいんじゃないかって事業を改良するということはありますか？

新井：最近障がいって言うても能力が高くなってきてるので、例えばただコミュニケーションが取れないとか、それだけなんで。こちらから言わないとコミュニケーション取ろうとしない。例えば精神のスタッフなんかは、海外から輸入してきたちっちゃくやる農法、海外のオーガニック農法の治具があるので、それを使っています。楽しいから。

綱島：とにかくお二人の話聞いていると、凄いなあと単純に感嘆せざるを得ないんですけども、まずご自身で農業やりたかったところが大きな原動力になってるっていうのは感じるんですけど、小島さんはそうおっしゃってましたけど、新井さんもそれで？

新井：いや、明日から仕事が無くなっちゃうってことで農業に入った。食糧だけは人間食べるものが必要だから、仕事だけは続けられるなってことで、福祉も農業もやろうと思ってやったわけじゃない。自然とそうなっちゃった。なんとなくやりだすとトラブルも起きないし、人間が育って行く、自然と出来るように、箱の中で最賃稼ごうと思ったら頑張らなきゃいけないんですけど、農業はなんかみんなで作れる。色んな失敗してきて玉ねぎに行きついたので、毎日半年手間かかんないし、やりながら他の事をやれるし。主軸だけ玉ねぎ。自分たちで作る。種まきから最後まで。本当は畑持たないで他へ行ったほうがお金稼げるんですけど、そ

れだと潰れていくかなって。続かない。自分たちで作って売り物を。品質基準を僕らはそこまでやれるようにしてあげないと、レベルアップして。

綱島：新井さんが失敗はやりつくしたとおっしゃってましたけど、小島さんは何かそういう失敗で事業の形態を変えざるを得なかった経験ありますか？

小島：失敗って言えば沢山してきてるので何とも言えないんですけど、思い通りにいかなかったっていうのを失敗と捉えないで、いけないときはそっちに行こうかなくらいの感覚なので、やらざるを得なかったって感じたことはあんまりない。

綱島：失敗を前向きに捉える。

小島：失敗は成功の糧だと思う。

綱島：そろそろ時間も限られてきてるんですけど、フロアから一つどうしても聞いてほしいというご質問がありまして。お二人株式会社であったり、NPO法人であったりするんですけども、このような事業を展開していくうえで、株式会社とNPO法人の違い、どういうメリットやデメリットがあるのか教えて頂けませんか？

新井：我々は福祉なので社会福祉法人の一部から始まったので、独立するのでNPO法人とったってということなんですね。それで非営利事業を進めたり、売る方は埼玉復興で販売したりとか。やはりNPOだとお金が借りれないので、株式会社。あと株式会社じゃないと仕事が取れなかったってことで、やっぱり株式会社。何故社会福祉法人ならないんですか？って言われてる。そういう時は解らなかつたんで、このまま行ってる。ただ、グループホームと生活支援事業、ある意味24時間頑張ってるってつこめば事業として利益が出てくるので、ちゃんとした節税とか含めて法人分けて、独立財産でやっていく、それぞれスタッフが独立して生きていけるような形をとっていかけて。結局は頑張っていけばそれぞれ仲間が支えていけばいいんだと思ってます。

綱島：それでは小島さんの方ですけど、株式会社とNPO法人と分けていらっしゃるんですけど。

小島：別に株式会社もNPOも作ろうと思ったわけじゃなくて、最初単独個人で始めた活動なので、その時に農地借りるには株式会社にしないと借りれませんよと言われて、まず最初に作りました。2009年に作って活動してきたんですが、株式会社の中でやってると広がりを持たないって部分があって、働きたいけど仕事が無い方と人手不足の農業界を開くっていう取り組みに色んな人が参加したり、広がりが生まれたりできるようにということで、NPOを2013年に作ったという流れになります。

綱島：確か行政機関からも研修の養成とか受けておられますよね。

小島：行政の幹部候補生研修だったりしてます。

綱島：そういうのは株式会社であるよりNPO法人だった方が？

小島：これ行政さんによって違って、例えば国の国際協力機構から研修に来ましたし、現実、小さい自治体さんと株式会社で請けられたりするんで。依頼いただくときに両方選択肢がある状況ではあるなって。

綱島：まだまだ聞きたいこと色々あるんですけど、時間も迫っております、是非まだまだ講師のお二方にお話し聞きたいという方は後程うまく捕まえてみて頂ければ幸いです。いずれにしても農作業、難しさと面白さが表裏一体のものであって、どちらかだけを取ることはできないんじゃないか、地道にやっていくしかないのではないかな。そういう思いを私と

しては新たに持たされたという企画だったのではないかなと思います。ではマイクをお返しします。どうも有難うございました。

渡辺：どうもありがとうございました。お二人の講演と4つの事業所、それにパネルディスカッション。このような講座今回五回目になりますけど、この講座終わって、主催者でありますNPO 釜ヶ崎支援機構の松本さんから簡単なまとめお願いいたします。

(2) 閉会挨拶

松本裕文（釜ヶ崎支援機構）

大変豊かな内容で考え方、現実と色々な人たちと繋がってる考え方の中で、整理ができない、非常にそのまま持って帰りたい、昆虫飛びまくり雑草生えまくりの考え方だなんて思って聞いておりました。初めの色んな報告というところで、いろんな方たち、山口さんとか取り込まれておられましたけれども、その中で見えてきたことっていうのは、お仕着せでこの農業やりましようって言うてもなかなかうまくいかない。自分で考えて工夫して失敗してもやるということが基本なのかなとかかと、ゆっくり僕は感じました。今ははばたき農園は一人だけやっています。雁多尾畑も基本的には一人。でも体験では来られている方がいると。ありのままでもそういったことですね、大規模に行っていっちゃるのが埼玉であったりえと菜園であったりするのかなと、こういう風に思いました。これだけ失敗してもやれているんだってことがまず何よりも励みでした。

その事についてなんですけれども、今このままの世の中で行ってしまったらそれこそ人間の社会まで存続できるかどうか分からない。生きている人たちも非常に辛い思いをしている。それと違う流れを作っていくために当然失敗してもいいんだよ。そういう基本の部分で、ここにいる色んなことされてる方々と繋がれる部分があるのかなと思いました。農業だけじゃなくて、いろんな仕事の分野で、仕事の先に送り出していったときに、何かのことでうまくいかなかった、その時帰って来ても受けとめていくことが出来る、そのためにはNPO 法人であれ株式会社であれ、沢山の社会的な窓口を広げて、自分達だけではやらない、これは体力できないけれども他の団体やいろんな人と組んでやって行くんだと、それで受け止めていこうじゃないかと、そういう姿勢が非常に寛容なことなのかなと僕は感じました。今日は本当に僕も良い機会を頂きました。ありがとうございました。

付録：来聴者アンケート集計結果

今日は、釜ヶ崎講座の取り組みにご参加いただき、ありがとうございました。今後の運営の参考にさせていただくために、以下の質問にご回答をお願いいたします。

参加者数（登壇者含む）：74，回収数：31

1. 今日の企画は、何で知りましたか（番号に印をお願いします）。
 - ①釜ヶ崎講座のホームページ：4名
 - ②釜ヶ崎講座のメーリングリスト：3名
 - ③釜ヶ崎講座より郵送されたニュース：4名
 - ④その他：17名（口コミ等）

2. 今回の企画の参加は、
 - ①初めて：21名
 - ②以前から参加している：10名

3. 今回の企画に参加していかがでしたか。
 - ①良かった：25名
 - ②普通：5名
 - ③不満：0名

4. 「農福連携」という言葉について
 - ①初耳：10名
 - ②本企画を知る以前に聞いたことがあるが具体的な内容は知らなかった：6名
 - ③以前から具体的な内容を知っていた：9名
 - ④ご自身が関与している：4名

5. 「産消提携」という言葉について
 - ①初耳：14名
 - ②本企画を知る以前に聞いたことがあるが具体的な内容は知らなかった：9名
 - ③以前から具体的な内容を知っていた：5名
 - ④ご自身が関与している：1名

6. 今回の企画に参加していかがでしたか。
 - ①良かった：23名
 - ②普通：6名
 - ③不満：0名

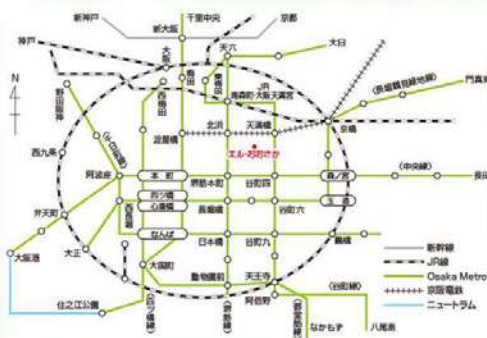
7. 講師の小島希世子さん宛てにメッセージがあれば、ご自由にお書きください。
- ・ 雑草を育てる事が水やりの必要がないのがとても興味深かったです。無農薬でリンゴを育てている東北の方で、雑草を育て、とても甘いリンゴが育っているのを以前講演会で聞きました。アレルギーの子ども達が増えている現代で、日本でも広げて頂きたいと思います。
 - ・ 食べものをていねいにつくることを通じて、学びの場になったり、いやしの場になったりと、可能性を感じました。
 - ・ 農業に対する理念が組織としてしっかりされている印象を受けました。農スクールの、困難さを抱える人が育ち、自立していく仕組みが大変勉強になりました。芯となる思想があると、事業の展開にもつながるのかな…と思いました。
 - ・ 農業に興味を持つキッカケとなる機会をつくっていただき、ありがとうございます。
 - ・ 自分で農業をはじめたこと、そのために体をきたえる部活をしていたことはすごいと思いました。
 - ・ ・水やりと雑草について、やってみたいと思いますが、勇気がいるような気がします。本当にできるんだと思っています。・子供を含め世帯全員が生活困窮の方は、食べ物もきちんとしていないですし、素地がどうかということを意識されていないので、何についても格差を感じています。ホームレスの方は体力があって畑や田んぼで働いて、素材の良いものを食べるということは嬉しいことだと思います。・自家採種や種についての話がききたいです。どうされているのでしょうか。色々と問題がありますが、私の地元にも種の保存会があり、その土地土地の種について考えたいと思っています。
 - ・ うちの事業所の人たちは、雑草をぬいてぬいて…疲れてしまいました。雑草があってもいいって！！ビックリです。もう1つの地主さんの来ない畑でやってみたいと思います。
 - ・ とてもすばらしい実践であり勉強になりました。もっと勉強したいと思います。
 - ・ 種の自家採取が禁止になったので、やりにくくなったと思います。
 - ・ 雑草昆虫農法含め、・ホームレスの方とひきこもりの方への対応の違いはあるのでしょうか？個々人で違うと思いますが大まかに。ホームレスの方の住居はどうなっているのでしょうか？農園に来ている交通手段は？などなどより詳しい話を聞きたかったです。
 - ・ 農業に対する情熱が感じられました。その人を適性を生かした就労に、農業が向いているんだなと思いました。その人が自分と向き合って、適性を見出すワークノートは良い取り組みですね。
 - ・ 人との気付き・長所を農家通して素直な姿・人としての生き方教えてもらえる場になればと思うし、これからも生きづらさがない社会が増えてくれたらと思います。
 - ・ とても興味深い内容でした。ありがとうございました。「生きている」を感じる活動ですね。都市での農業を検討しています。また教えてください。
 - ・ 本日は有難うございます。長所から適性を見、マッチングするという就労事例、大変興味深く拝聴しました。
 - ・ 子どものときの体験を原動力にして、一直線に農業関連の仕事につきすまれたのですね。来園者年間 5000 人というのは驚きでした。私は今「ひきこもりがちな(社会と距りをとっている)」次男と 9 年、農園活動しています。畑を来年 3 月に明けわたしのため、さがしています。
 - ・ お話のあったワークノートに興味があります。詳しく知りたいです。
 - ・ カリフラワーといいましてごめんなさいね。せいかいはにんじんでした。小島希世子さんにたいおうされましてうれしかったです。小島希世子さんにこのことをおはなしができませんでしたので、ごめんなさいね。

8. 講師の新井利昌さん宛てにメッセージがあれば、ご自由にお書きください。
- ・ 福祉は人を選ばない—西成区の地域で、この様な事業が可能でしょうか。
 - ・ 農業は自然と人が育っていく、お金だけではない居場所としての畑の可能性を感じました。
 - ・ 生活と就労が一体化したような取り組みに感銘を受けました。様々な人を断らずに受け入れるというところで、様々な難しさがあると思うのですが、それを成り立たせていることが本当にすごいと思いました。
 - ・ ソーシャルファームという取り組みに興味があったため、とても勉強になりました。
 - ・ 最先端の取り組みをしていらしゃって、難しそうですがすごいと思いました。
 - ・ 障害のある方と若年認知症の方と一緒に作業しているという実践をきくのは初めてでした。
 - ・ 個別のケースに対応して仕事を生み出す。そのために、他の会社さんにつながる。言うのは簡単だけれど、実際にできるのがすばらしいと思いました。
 - ・ 気負いがなく自然のままにされている所が印象がとても好感を持ってました。もっともっと勉強したいです。
 - ・ 年代寮の取り組みと同様のことを以前行っていたのですが、なかなかうまくいかなかったのが、核となるものがしっかりしていなかったからだと思えました。キレイごとではない大変さがあると思えますが応援しています。
 - ・ 新しい経済圏のおはなしというか、キーワードとして、SDGs が成立するような経済のあり方ってなんだろう？とそこに向けてできる活動をつくっていきたいと思いました。
 - ・ 特例子会社での成功されることを望みます。生き生きとした生活で生きづらさが無い社会をめざして欲しいと思います。
 - ・ 有機的な人のつながり、という言葉が印象的でした。都市部での農業を検討してます。つながりを築くことが課題と思いました。
 - ・ 様々な事例紹介、大変興味深く拝聴しました。色々と工夫が見られ、とても勉強になりました。有難うございました。
 - ・ 今の介護グループホームはただ朝昼夜三度の食事を提供して後はいすに座ってテレビを見ているだけだ。外出も一切ない。これでは体が弱るだけ！！私が介護施設を運営するなら、これを参考にしたい。山口県周防大島の65才以上は大変元気。農業漁業に従事しているからだ。
 - ・ 作る、食べる、学ぶ、良いことばですね、ありがとございました
9. その他、今回の内容について、ご意見やご感想をご自由にお書きください。
- ・ 本日の講演会を通じて、西成区に現実に、農場を拓げていく計画を進めて頂きたいと思います。昔、工業地域でも土壌を耕して実現していったほしいです。
 - ・ 冒頭の趣旨説明が長く、事例紹介も何を作っているかよりもどんな人が関わっているか、農の効能などが知りたかったです。また前半に登壇した方の自己紹介もなかったもので、よく分かりませんでした。
 - ・ 農業をやることによる、ホームレスやひきこもりの人へのメリットが具体的にたくさんわかったので、とても面白いと思いました。
 - ・ 綱島先生 NPO よつ葉 販売にいきました。東大阪市

- ・ 我が子も最近、発達グレーゾーン、学校の行き渋り…まだ中学生ですが、高校行けるのか？就職できるのか？と父親は悲嘆しています。今回発表していただいた方たちのような取組をされている団体がたくさんあること、親だけが「働く大人」に育てているのではないこと、広く社会に知ってもらえればいいのに。
 - ・ いなかに老夫婦(両親)が健在ですが、身体的にも精神的にもサポートの必要な状態となってきました。自分自身も定年後はいなかに帰るつもりです。定年後のライフワークを考えるうえで非常に勉強になりました。もっともっと勉強したいと思います。
 - ・ 時間配分はもう少ししっかりしてほしかった。それ以外は申し分ないようだったと思う。
 - ・ “業”にすること、ビジネススキームにしていけるのが、事業のキモだなと思いました。
 - ・ 事例報告は生き生きした説明で楽しさがよく伝わりました。ありがとうございます。
 - ・ 今日大変参考になりました。集中講座で学んだ事を活かしながら、次のステップへ進めて行ければと考えています。
 - ・ 有益な内容でしたが、報告が多く、質問、意見の時間がなかったのは残念。
 - ・ 農福連携といっても、外国人労働者の導入とあわせ、安い労働力の調達でしょ、と言わせないようにしないといけないなと思います。農家の人手不足は政治的な課題。一般労働市場でミリヨクを感じられていないから。野宿者だのひきこもりだの障害者だのではなく、一般の人でも農業にミリヨクを感じられるようにならなくてはならない。それこそ、ユニバーサルデザイン。こうした観点から、小島さん、新井さんのお話や問題意識はとても共感できるものだし、励まされる思いです。生産現場も変わらないといけないし、消費者も変わらないといけない。新自由主義的な農業支配に抵抗する中核として、農福労が成長していけたらいいと思います。世の中をどう変えていきたいのか、というメッセージがはしばしに感じられてよかったです。農業破壊とでも言うような農業の現状の中で、「農で輝く！」を超えて、何を指すのか。どうやって現状を打破していくのか。そのあたりのこと。
 - ・ もうしわけないのですが テーブルをまえにうごかしますとまえのひとになにかいわれますと わたしきかみじかいのでよろしくおねがいします。ごめんなさいね。
 - ・ 下世話なことですが、いずれの事例でも、どの部分で活動の再生産を可能にする収益を得ているのか、純粋に農産物を生産し販売する部分で得られる収益は活動全体のどれくらいの割合を占めるのか、興味がありました。
10. 今後の企画や運営について、ご意見やご質問があれば、ご自由にお書きください。
- ・ 参加するたびに思うのですが、報告する方へ持ち時間を知らせるものなどを作ってコーディネートして下さい。質問や聞きたい方の内容が短くなり残念でした。「講座(とか会話とか)の進め方、コーディネート力を学ぶ」釜講座にしてみても？せつかくの講座をよりよいものにしてほしいです。準備や進行も手伝いたい人、ボランティアも募集してみても？
 - ・ 運営側のタイムスケジュールがうまくいってなかった点が残念でした…
 - ・ トイレがとても小さく、上下階も使えずけっこう困りました。
 - ・ なわて罫 田のあぜ道は堅固であっても ありの穴があれば たたえた水が結局はたまらないようなものである。伸びゆく宝の人材に励ましを 会うと元気になる 話すと勇気が湧く そう慕われる人に
 - ・ 本日はありがとうございました。

- ・ スライドにもう少し工夫を！小さくて見えない。拡大できるはずです。
 - ・ 障害者の雇用サポートを仕事にしており、課題は同じだと実感しました。
 - ・ 建築の設計から釜ヶ崎の知的障害者の福祉施設のグループホーム、シェアハウスに触れました。最後まで楽しくつながりを持って暮らすこと、私の出来ることを探したいと考えています。
 - ・ 高齢化した外国人労働者が地域(日本)で生活し続けられるように、三重県内で農福連携の取り組みができればと考えています。また色々、情報交流しながら、活動していければと思います。
11. よろしければ連絡先をお知らせください（今後の講座のご案内以外には使いません）。
（略）

会場のご案内 : <http://l-osaka.or.jp/pages/access.html>



< 今回のテーマについて >

仕事づくりを試みる時に、人手不足の分野に目を付けることは、以前から定石でした。そして今、人手不足が進む農業分野で仕事をつくらう、農業分野と福祉分野が連携しようということで、「農福連携」が注目を集めています。

実は以前から釜ヶ崎でも、いくつかの案が浮かんだり消えたりしてきたと聞いています。私も2011年から、耕作放棄地を活用して農園を開設し、野宿労働者や就労に困難を抱える若者と一緒に、野菜を栽培したり販売したりということを試みてきました。そして、高齢の野宿労働者と就労経験に乏しい若者が協働することで新たな可能性が生まれるという、貴重な経験が得られました。

しかし、案の定、いくつかの課題に直面しました。技術的な問題もさることながら、そもそも、何のための仕事づくりなのか。なぜ農業分野でなければならないのか。つまり、目的意識が参加者やその他関係者の間で共有されているとは言い難いのではないかと感じました。例えば、追求すべきは、誰にでもできる仕事なのか、それとも、その人にはできない仕事なのか。また、言われたことだけやればお金がもらえる仕事は確かに楽なのだろうけども、建設現場で「お前は言われたことだけやればいいんだ」と言われて複雑な思いをされた方もいるはずで。

そこで今回の講座では、農福連携の先進事例を率いておられるお二人の講師にお話を伺い、釜ヶ崎で有意義かつ長続きする取り組みのために何が必要かを議論したいと思います。釜ヶ崎には釜ヶ崎のやり方があるかも知れません。一方で、外部の経験を応用できる可能性もあります。例えば、どのようにして外部の一般市民から参加を得るか。日本の有機農業において生産者と消費者が築いた「産消提携」の経験に学んでみる必要があるかも知れません。

仕事づくりや社会的企業に関心がある方あるいは疑問をお持ちの方、農作業に興味があるけど参加する機会をなかなか得られない方、これまで釜ヶ崎から柏原市雁多尾畑(かりんどおばた)やひと花センターの農作業に参加してきた方などなど、多くの方のご参加をお待ちしております。

文責: 網島洋之(大阪市立大学都市研究プラザ)

問い合わせ先

釜ヶ崎講座: 大阪市西成区萩之茶屋1-9-7釜ヶ崎日雇労働組合気付,
大阪市港郵便局私書箱40号, 電話 090-2063-7704, E-mail: kamakouza@cw2.bai.ne.jp,
<http://cwoweb2.bai.ne.jp/kamakouza> <http://blogs.yahoo.co.jp/kamagasakikouza>

特定非営利活動法人 釜ヶ崎支援機構 (NPO釜ヶ崎): 大阪市西成区萩之茶屋1-5-4,
電話06-6630-6060, Fax: 06-6630-9777, E-mail: npokama@npokama.org,
<http://www.npokama.org/>

第2部 シンポジウムを終えて



第4章 各登壇者と一参加者の後日談

本シンポジウム開催から既に1年以上が経過した。あのとき誰が現在のコロナ禍を予想できただろうか。世界は急激に変貌している。だからこそ、それでも決して変わらない、人間の生活に本当に必要なものが一体何なのかが明らかになりつつあるのではないか。「農福連携」すなわち「農」と「福」の「連携」は果たしてどうであろうか。このことをさらに深く検討するために、登壇者の皆さんと、かつて野宿者支援活動に参加していたある一人の来聴者に、シンポジウムのその後について改めて文章を寄せていただいた。そうすると、もちろん私自身も書かなければならないのだが。(編者)

後日談(1) 雁多尾畑農園—マスコミ取材を受けて考えたこと

網島洋之

1. 新聞

当シンポジウムに朝日新聞記者の小川智さんが来られ、挨拶を交わしたところから、この後日談は始まる。以前から釜ヶ崎越冬闘争を取材し続けておられていて、その記事は実行委員会関係



朝日新聞 2020年2月26日 夕刊大阪版

者から高く評価されてきた。今回は、当農園やおとな食堂の活動を記事にしたいということで、それぞれの現場に何回か取材に来られた。数多くの参加者にインタビューを重ね、挙句の果てには農作業もお手伝いいただいた。小川さんは普段は主にカメラマンとして仕事をされていて、今回の記事も写真が主体で、文章は字数が非常に限られているという。その短い文章の中に、私がインタビューを受けて話した内容の根幹を正確に反映するのは、やはり難しかったようである。

大手新聞社のデスクは世間の耳目を集めなければならない。いきおい、「善意の取り組みが社会的弱者を支援した結果、かれらの行動に変化が見られた」というような、ある意味で在り来りの「分かり易い」枠組みに、取材内容をはめ込もうとする。しかし、少なくとも私には、そのような意図は毛頭ない。むしろ、変化させるべきは、社会的多数派が、自分たち以外の誰かを社会的弱者呼ばわりして支援の対象とすることで、根源的な問題から視線を逸らそうとしている、この現実である。この現実に意義を申し立てる実践共同体が必要であると考えていた。私は小川さんが提示する原稿の細部が気になり、我ながらしつこ過ぎると思いつつも何回か修正を要求した。例えば、「作物を観察し、自分で考えながら育てることで、自主性が生まれる」という小川さんの表現に対して、後ろの部分を「自主性が生かされる」に修正して欲しいという具合である。小川さんは私とデスクの間で板挟みになり、相当な苦勞をされたはずである。

2. テレビ

このようにして生まれた記事が次の展開につながることになる。その約1年後、毎日放送のテレビ番組『ミント』担当の記者から、おとな食堂や農作業の様子を取材したいという連絡を受けた。年末に放送される特集で、コロナ禍が釜ヶ崎に及ぼしている影響や支援活動の現状を取り上げるという。当農園は特にコロナ禍だからという理由で新しい取り組みを始めたわけではないと念押ししたが、それでも構わないという。コメンテーターを務める大阪市大経済学部の齋藤幸平さんの意向だそうだ。マルクスの研究で注目を集めている方である。後に齋藤さんが取材クルーとともにおとな食堂に来られたときに聞いた話では、小川さんの新聞記事を読んで関心を持たれたそうである。

取材を受ける決心を固めたものの、やはり今回も「分かり易い構図」にハマられてしまうのではないかと心配になった。しかも新聞よりもテレビの方がその傾向は強いと言われている。さらに、農園の成り立ちや今後について、私は個別に現場でインタビューに応じることになってしまった。おそらく、どんなに丁寧に話しても実際に放送される映像はほんの一瞬だろうから、記者がする質問に簡潔で的を射た回答を返そう、そのためには私がこれまでに書いた論文の内容だけを思い出して答えようと、心の準備は済ませていたつもりである。

さて、実際にインタビューを受けているとき、私は私なりに真面目に質問に答えていたつもりである。しかし、次第に記者が期待した回答を引き出せずに苛立ちを募らせていることに、私も気が付いた。「困窮している参加者に私がどのような変化を期待しているか」を答えさせたいのだ。このような「お決まり」の構図にハマられまいと私が意識するたびに、言葉を変えながらも同じような質問が繰り返された。記者も疲れてきたのではないかと思いつつも、私なりに気を利かせて笑いを取ろうとしたが、記者の表情はますます曇るばかりだ。例えば次のとおりである。

記者：この活動で目指すところ、目標としていることは何ですか？



毎日放送 2020 年 12 月 25 日放送『ミント』特集のウェブサイト
(<https://www.mbs.jp/mint/news/2020/12/25/081245.shtml>)

網島：目標を持つという考え方をやめることです（笑）。

記者：…（笑わない）。

記者：参加者の表情に変化はありましたか？

網島：私は作物の表情ばかり見ていて、参加者の表情はあまり見ていないです（冗談，笑）。

記者：…（笑わない）。

このような問答の間、私は真剣だったので全く気付かなかったが、おとな食堂を主宰している小手川氏ともうひとりの参加者は、テレビカメラの死角で必死に笑いをこらえていたそうである。私としては、この程度の質問しかなくて、わざわざここに来た意味があるのかと疑問に感じた。すると例えば次のように、やはり質問と回答がかみ合わなくなる。

記者：参加者の人に自分で考える力をつけて欲しいということですか？

網島：考える力をつけて欲しいとかいうように、相手に足りないところがあるから変えようというではありません。それに、自分で考えるというのではなくて、あくまで作物の声を聞くということです。ある意味、主体性を放棄することです。

私が言おうとしたことは次のとおりである。農作業を通じて自然の摂理を感じることで、社会とりわけ都市で当たり前とされていることのおかしさに気付くことができる。就活生がスーツを着なければならない、あるいは接客する女性がハイヒールを履かなければならないというような、いわゆるビジネスマナーは従うに値するものなのか。都市における労働の多くは、顧客や上司など自分よりも力が強い者に従属することでしかない。ここに生きづらさの根源があるのではない

か。対照的に農作業では、作物や家畜など、自分が殺そうと思えば殺せてしまえるような、自分よりも弱い生命の姿に、自分に向けられた指示を読み取る必要がある。この気付きを多くの人と共有することで、社会の多数派を変える力が生まれるのではないか。

決して「分かり易い」話ではないだろう。ほとんど放送されないのではないかとすら思えた。翌日のおとな食堂には久しぶりに小川さんが姿を見せた。そこで前日のインタビューの様子について話したところ、「それだけ内容が深いということ。言い続けるしかない。私もいろいろ言われたけど。」というような助言を得た。私のしつこさを懐かしく思い出していただけたのであれば、これほどまでに光栄なことはない。

その2週間後に放送されたが、果たして、私の真面目な回答は完全にカットされた。意外にも採用されたのが、「(労働者たちが)『条件の悪い仕事なんか全部蹴ったるで』と言えるようになればいい。」という冗談交じりの大言壮語である。恥ずかしい。しかし、さすがに編集はプロの仕事であると言うべきだろうか、番組は非常に分かり易く構成されていた。後日、府内で園芸療法やまちづくりを実践している方々から、番組を見たというお知らせとともに、活動内容についてお褒めの言葉をいただいた。これは番組の分かり易さゆえでしかなかろう。

ただし、分かり易さは時として危険も伴う。斎藤さんは、おとな食堂の作業に一通り参加した後で、記者にコメントを求められ、次のように述べていた。

貧困問題ってしばしば、例えば炊き出しとかもそうですけれど、自分は助けてもらっているという意識がどうしてもあると思うんです。ここはそれが違うなと思ったのが、ちゃんと自分も野菜を作っているし、あるいは料理を作っているし、そのコミュニティの一員として自分も不可欠な役割をしている。普通の貧困支援とは違って、むしろある種のオープンで、みんなが入りやすい形になっているかなと思いました。

私たちの活動について好意的なコメントであることは間違いない。斎藤さんには最大限の謝意を表したうえで、それでもなお、ここで私が沈黙しては、ある誤解を招きかねないことを指摘したい。いかにして支援—被支援の関係性を克服するのかという課題は、野宿者支援の現場で多くの関係者が長年取り組んできた。炊き出しにおいて顕在化するそのような関係性を克服するために、例えば「共同炊事」という取り組みが各地で行われてきた。一方で、分け隔てなく多数の食事を提供するという重責を受け止めるならば、炊き出しという形を採らざるを得ない。このような長年の葛藤の結果として炊き出しは続けられている以上、今さらおとな食堂と比較するために炊き出しを持ち出すことは、炊き出しと共同炊事、両方の実践者に礼を欠くことになる。これは私が意図するところではない。

3. 現状および訃報と今後の課題

当シンポジウム以降、雁多尾畑農園とおとな食堂は新たな参加者を続々と獲得している。ある若者は上記のテレビ報道を見て参加した。元日雇労働者のガイドヘルパーが勤務先の利用者を連れてくることもある。その他、日雇労働者のみならず、さまざまな事情を抱えた人が集う機会となり、釜ヶ崎から離れて農作業をしているのに釜ヶ崎という街の懐の深さが実感できてしまう、不思議な場ができつつある。

しかし出会いがあれば残念ながら別れもある。小川さんの記事で紹介されていた、鹿島則武さんが去る 2021 年 1 月 31 日夜、骨折で入院している最中に逝去された。施設育ちの孤児であるが、書類上の誕生日から考えれば享年 79 歳ということになる。葬儀には私と小手川氏以外にも釜ヶ崎支援機構の職員など 40 名ほどが駆け付けた。親族の所在がつかめないため、私たちは死因を知らされていない。どちらかという人とお喋りするよりも黙々と作業する方が好きだったようで、骨折が回復したらまた畑に行きたいと言っていたばかりだった。もともと鉄筋工として建設現場でバリバリ働く職人気質の人だったためか、おとな食堂のときはせいぜい通りから中を一瞥する程度だった。フライパンで薄焼き卵を放り投げてひっくり返すのが得意という意外な一面もあり、私としてはその才能を勿体ないと思っていた。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

話題を元に戻すと、マスコミに取り上げられたことを契機に、自前で情報発信を行う必要性を痛感した。そこで、新聞『Q and Go』（仮称）を発刊したりトークイベントを開催したりしようと計画している。さらに、雁多尾畑農園とおとな食堂がセットで取り上げられ、斎藤さんからも「食」にちなんだコメントをいただいたことは、農業分野における仕事づくりと「食」を関連付けることの意義と可能性を示唆していると言えよう。ちなみに、私が当農園と「食」を結び付けようとした理由は、「作物の声」が聞こえやすくなると予想したからである。今それは確信に変わりつつある。この点については、近いうちに論文にまとめようと考えている。

後日談（2）黒部の居場所ひまわり—農作業部分の後日談

橋本卓也

2019 年の 12 月に発言をさせていただいた後、昨年 1 月から 3 月では、農業のご指導をいただいている岡田さんや、「ひまわり」の近くで農業をされている方から大根の提供を受け、「ひまわり」のみんなで行い干し大根作りを行いました。丹後の干し大根は他の地域で作るものと比べて太



目で、独特の食感があります。これは、四角に切った大根に切れ目を入れて、イカの足のような形にする「イカ干し」という特有のもので、冬場になると民家の軒先に干してある様子を、今でも所々で見かけます。去年は地域の方々にも、大根の皮をむいたり、切ったりするところでお手伝いをいただいたり、食品乾燥機を貸していただいたりして、200本近くの大根を干し大根にすることが出来ました。これを農協の直売所や道の駅、土産物屋などに置いてもらったところ、大変好評で、ほぼ売り切ることが出来ました。

また、岡田さんの畑では「お花畑を作ってみよう」という岡田さんの提案で、「ひまわり」のみんなで花の苗を作り、大きくなったものを畑に植えていく作業をしました。自分たちで作った花の苗が大きくなり、綺麗に花を咲かせていく様子は成果として見えやすく、やりがいを感じている利用者の方も多くおられました。昨年90歳になられた岡田さんにとっても花作りは初めての取り組みだったとのことで、この歳になられても新しいことにチャレンジしてみることや、どのようにしたらうまく育つか、「ひまわり」のみんなと一緒に考え、研究されている姿に、刺激を受けたという利用者の方の声もありました。

ただ、現在は、京丹後市内でも新型コロナウイルスの感染が拡大したため、岡田さんが高齢であることを考えて、岡田さんの畑での活動は見合わせています。「ひまわり」の隣に借りている畑ではたまねぎや白菜を育てるなどの農作業を続けていますが、京都府に緊急事態宣言が発令されていることから、「ひまわり」自体の活動時間も制限されているため、最低限の作業に抑えています。利用者の方々の中にも元々体調が万全ではない方がおられることを思うと、決して現状を軽く捉えることは出来ませんが、出来るだけ早くにこの状況が改善し、またみんなで農作業が出来る日が早く来ることを願っております。

後日談 (3) はばたき作業所—その後

高岡美恵

その後

2019年12月14日のシンポジウムは、その後の打ち上げも参加させていただき、色々な方とお話する機会をいただき、とても充実した日となりました。ありがとうございました。

あけて2020年、今年も1年頑張ろう、と、Mさんも張り切って毎日畑へと自転車を走らせていました。春にはアスパラガスの収穫やイチゴができたり、ニンジンに挑戦して、真っ直ぐのニンジンが何本か収穫することができたりしました。また、去年は失敗したカボチャがとても綺麗に実り、上機嫌でした。

緊急事態宣言中のこと

緊急事態宣言中もはばたき作業所は、ありがたいことに変わらず開所し続けることができました。ただし、中国からの部材がストップしたとのことで、いつもの元請けの会社からの仕事が無くなったため、急遽、別の取引先を探しました。幸いすぐに今まで以上の仕事を受注することができました。また、こういう経済が不安定な感じになると、利用希望の見学や新規入所が増えるようです。



かぼちゃの花



販売準備中のわさびリーフ



黒谷農園



若ごぼうの収穫

野菜の販売のこと

綱島先生に紹介していただいたお店に何度か持って行かせていただきました。収穫のない時期や販売してもらうほど収穫できないこともあり、また後述の通り、黒谷農園での耕作を辞めてしまった為行けていないのが現状です。

援農業務のこと

地元の農家さんが若ごぼうと枝豆の時期で忙しい1週間ほど、毎日2人ずつ呼んで貰っています。若ごぼうは選別・梱包だけでなく、収穫のお手伝いもしています。

Mさんのこと

徐々に変わっていくはばたき作業所に少し不安を感じたのか、Mさんの精神的な不安定さが顕



農作業する M さん



ハバネロの育苗



玉ねぎ



農園のおやつ、イチゴ



放課後デイサービスかかほでの家庭菜園

著になりました。2週間に1度「畑やめる」と怒りだし、夏にハバネロの苗作りと除草作業に心が折れたのか、秋には完全に行かなくなってしまいました。

サツマイモやジャガイモを植えていたのですが、収穫体験に毎年来てくださっていた事業所さんも感染症対策のため外出を控えておられ、体験会はキャンセルになりました。

Mさんは変わらずはばたき作業所に通所されていますが、軽作業や清掃作業に従事されています。畑仕事は好きなのは変わりなく、「家庭菜園をしたい」とのことで、家の近くで畑を借りられないか探しているそうです。

黒谷農園のこと

Mさんが黒谷での農作業をやめてしまったので、今はもう仕事としての畑はしていませんが、農福連携への挑戦は続けていきます。他の利用者さんが個人的に地主さんに交渉して、1畝ほどもらって自分の野菜を育てさせてもらっています。

また、2021年3月から就労準備型の「放課後デイサービスかかぼ」を開所したので、利用する子どもたちへの農業学習として利用できないか交渉中です。

農業プログラム（仮）

- ①タネを買う
- ②野菜を育てる
- ③売る方法を考える
- ④販売する

野菜の育成から販売までを経験して、将来、農業を仕事に選ぶ人が出ればいいなあ、と思います。

後日談（4）

Social firm（ソーシャル・ファーム）から Social health（ソーシャル・ヘルス、社会的健康）へ

新井利昌

1. 来聴者からの質問や意見に寄せて

1) 「福祉は人を選ばない—西成区の地域で、このような事業が可能でしょうか」

「人を選びようがない、だからやるしかない」というのが西成という地域の現実ではないだろうか。むしろ当社のようなところは、誰かを排除して西成に送り込こんでしまうことがないようにしなければならない。そうするためにはどうしたら良いかという話だと思う。

2) 「生活と就労が一体化したような取り組みに感銘を受けました。…」

世間はワーク・ライフ・バランスを取ろうとする方向に向かいつつあるが、障害を持つメンバーは生活と就労のバランスを上手く取れない。例えば、人と関わり始めた途端にケンカして逃げ出してしまうというような問題は、決して予定通りに起こるわけではない。むしろ、無理に生活と就労を分離してバランスを取ろうとしてきたからこそ、今の社会がある。人生のうち一時期は24時間働きたいという人もいるだろう。例えば新しい会社を作るときはそうなる。頑張りたい人が頑張れる場所はあるべきだと思う。もちろん、年齢を重ねれば自然と体が衰えて働けなくなるわけだから、これに合わせてバランスを取りさえすればいい。

世界から見て働き過ぎだと言われても、日本人はそれでいい。特段に海外の真似をする必要はない。しかし一方ではニートや引きこもりが増えた。西成のように元気な人がいるところの方が、いろいろな事情はあるかも知れないが、パワーや温かみがある。バランスを取らなくていいし、そもそもそこまで上手に生きられる人はそう多くない。

さらに根本的なことであるが、農業をしていると基本的に自然環境には逆らえない。そこでワーク・ライフ・バランスを取ろうとすると、変に農薬を使うことになり土もダメになる。結局は砂漠になる。東京の「働く」と農業は違う。資本主義が蔓延する都市でコンクリートに囲まれて働き過ぎたら、当然、心身ともにダメになる。しかし農業では体が疲れても頭は疲れない。むしろ余計なことを考えなくて済むという意味では、働いていた方が楽かも知れない。「ワーク＝ライ

フ」であって、そもそもバランスを取る必要がないという、悟りの境地ですらある。ちなみに当社では元犯罪者も働いている。良い人がいれば悪い人もいるという意味ではバランスが取れている。

3) 「障害のある方と若年性認知症の方が一緒に作業しているという実践を聞くのは初めてでした」

若年性認知症でも障害者福祉サービスは使えるし、たとえ使えなくても受け入れるつもりだった。若年性認知症の当事者で介護を受けるのが嫌だという人がいた。なぜなら、現状では介護に「働く」という概念が含まれていない。本当は働けるのにケアを受ける立場にされてしまう。このようなシステムに問題がある。根本的な問題だが、働くための介護があってもいいと思う。働くことと介護を受けることの間には線が引かれているから、スタッフもその問題に気付かない。

4) 「農福連携と言っても、外国人労働者の導入と合わせ、「安い労働力の調達でしょ」と言わせないようにしないといけない…」

資本主義下における農業に根本的な問題がある。それを「農福連携」の掛け声で誤魔化さないで欲しい。

2. Social COOP（社会的協同組合）

現在、当社には田畑が10町あるが、その周りにある空き家を改装した。店舗や農泊などいろいろな目的で使えるように準備している。これらを拠点として立体的な地域づくりを目指す実験を始めたところである。

今年のテーマは「捨てない」。ハクサイの外側の葉を天日干しにしてキムチを作っている。それを自分たちで食べ、余りを地域に売る。今は食料品店がコンビニしかないような状況である。そこに、例えば主婦が食卓に一品追加できるようになど、日常的に健康的な食品が買えるような場所を作りたい。

キムチ作りは、東京在住の韓国宮中料理と発酵学の権威である母を持つ若者と出会ったところから自然と始まった。韓国は日本より冬が寒いいためか、発酵文化のパワーが一段と強い。また、ハクサイの根を捨てずに食べるという、日本とは違う考え方もある。彼のレシピをキムチに付けて売ること、人の輪が新しく生まれることになる。さらに、その先生が東京で料理教室を開くときに、みんなで東京からハクサイを収穫しに来た。当社の Social Firm という考え方を理解している人には、このような関わり方もできる。

韓国では昔から、キムチを作るときにはハチミツの蒸気で殺菌していたという。壺に材料を入れて常温のまま土の中に埋めておけば、あとは塩加減を調整するだけでできるという。工場のような設備がなくても、捨てるものから生み出すという姿勢があれば、障害者でもできる。できることからやるしかない。水キムチというものもある。野菜なら何でも良いが、塩水の中で乳酸菌のエサとなり、その水が乳酸菌飲料になる。これを日常的に使えば健康になれる。

これらを題材として、農福連携の仲間たちとともに農泊の施設でワークショップのようなものを開催したい。いや、ワークショップという一回限りという感じがするので、それよりも深くいろいろなモノや人を結びつけて日常的に一緒に取り組める形を模索している。「スロー・フード・ツアー」などのような形で、地域内外の人が交流する場づくりを事業化していきたい。それで参加者から見学料を取れたり商品を販売できたりすれば、誰でもできる仕事がまたそこで生まれる。

最近「微住」という言葉が生み出された。移住というほどでもないが地域の一員として2週間以上滞在する、宿泊と居住の中間のような暮らし方のことを指す。これには大きな可能性があると思う。農業をバリバリやろうというわけではないが「どのように生きていこうか」と真剣に考えている人とつながれるようにしたい。行政機関から人材育成の仕事を受託しているので、これとも関連付けられるだろう。

3. 地域の小学校と連携してエディブル (Edible) な地域づくり

地域の小学校に「エディブル校庭&通学路」を設置しつつある。アリス・ウォータース (Alice Waters) が唱道した「エディブル・スクールヤード・プロジェクト」(※編注) のソーシャル・ファーム版である。当社の水耕栽培のハウスからその小学校に至る全長が車で2~3分の道路は、通学路でもある。そこに当社の畑が集約されていて、今のところ「タマネギ通り」を目指しているが、それを立体化させようという取り組みである。

その小学校と一緒に米づくりに取り組んだ。田植えから始まり、足踏み式の脱穀機を使用して、最後は300人でおにぎりを作った。罪を犯した人を含む当社の障害メンバーに加えて、ボランティアも参加した。さらに、かれら障害メンバーが小学校にトラクターで乗り付けて校庭を耕した。これには学校の先生も助力した。そして校庭がエディブルになった。

土曜日の課外授業では、水耕栽培のハウスで苗の定植をしたり、オリーブ畑でバーベキューをしたりした。すると、本を読むだけのためにわざわざ畑に来る子どもも現れた。このようにして、メンバーたちと子どもたちの間に日常的なつながりができるのが理想である。

エディブル通学路の脇には、折りたたみ式の竹製テントを設置しようとしている。東京で「アースデイ」が開催される時などに作り方を教えに出向き、そこでも新しい関係が生まれている。その他、農福連携や自然栽培に携わるいろいろな事業体と連携することで、単独ではリスクが大きい新商品開発のノウハウを獲得したり、出荷パッケージをテストしたりなど、新しい事業展開の可能性が拡大し続けている。

4. 障害者が働くということ

障害者が働くことの価値は、障害者就労の制度を作る側の人も理解していないかも知れない。その価値を象徴するもののひとつが、ある農業の人から聞いた話である。人参ジュースを1本10万円で販売しているという。素材を厳選したからである。2年間で5本売れたらしい。もちろん標準サイズのもの1本700円と高めだが買いやすい価格が付いている。それくらいの値段で売れる、そんな其処らの食品とは違うものを作っているという自負を持っている。税金をいただいて事業を回している立場としては、それくらいの気概や自信を持つ必要があると思う。そうしなければ、現場から現在のおかしなシステムを問うことができるという、障害者雇用の素晴らしさは伝えられない。

ファミレスで食べればあからさまだが、現在は食べ物の価格が下がると同時に質が落ちている。さらに、それに気付かない人も多い。だから多くの町では、コンビニの隣にスポーツクラブがあり、さらにその隣に病院が並んでいる。このような時代だからこそ、質の高いものを作ることに意味がある。コンビニから始まる不健康のサイクルに入らないように、一見コンビニで売られていそうだが質の良いものを、可能な範囲で手が届く値段で売りに出したい。その一例が本物のキ

ムチである。

障害者にできることは確かに限られている。しかし、発酵の力を使えば商品を作れる。人間ひとりひとり体内の常在菌が違うので、オーダーメイドの発酵食品が必要なはずである。コンビニや資本主義は同質の加工品を大量に売る傾向にあるが、そうではない食品の作り方があるはずで、そこに障害者就労の可能性がある。ちなみに同質性と言えば、近年、東京は一気にダサくなった。クリエイティブなモノは何もなく、雑誌に掲載されている写真と全く同じように作られたハリボテがあるだけである。単にお金を稼ぐ場所ではない。格好良さそうに見えても作られたお洒落ではない。昔から変わらないデザインが大切にされているヨーロッパの町並みに比べると、どうしても見劣りする。

障害者は人格が高潔だと思う。生き方がシンプルかつ素直で、「行こう！」と言うとみんな行き、それで状態が改善される。魂がある一方で余計なことを考えられない。玉ねぎが収穫できたときは、そのことしか考えていない。すると、どんどん品質が良くなる。エネルギーに満ちている。だからこそ、事業を運営する立場としては、方向性を誤らないように注意しなければならない。

最近「スマート農業」が注目されている。人工知能やドローンを利用して省力化を図ろうという発想である。しかし、それでは食べ物は美味しくならないのではないだろうか。それよりもエネルギーが高いのは、むしろ人だらけの農業の方だと思う。大量に生産したいなら大勢の人間でやれば良い。機械化して大規模かつ少人数で農業をやろうという考え方は全く古い。最新テクノロジーは障害者ができないところにだけ利用すべきである。人の代わりにテクノロジーを導入して人が抜けてしまうようでは意味がない。その影響は味にも現れるだろう。人が無駄にたくさんいて、中には寝てしまう人や不満ばかり言う人もいるという場からこそ、美味しいものが生まれる。

重要なのは、まず何かを信じること。それはタマネギでも構わない。それにみんなで向かえば、お客様に届けなければ仕事は終わらない以上、ケンカなど余計なことをしている場合ではなくなる。翻って、信じられるものを持たないと、インターネットに曝され、コンピューター・ゲームに興じ、コンビニのものを食べ、東京で就職するというように、つまらない情報に流されてしまう。そのようにして多くの人が自ら考えることを止め目標を見失うから、うつや発達障害が生み出される。これは農薬など化学物質による環境汚染というよりは、むしろ社会環境の問題である。そもそも、農薬の被害を受けるほど、多くの人は野菜をたくさん食べていないのでは。

一旦タマネギを信じて行動すれば元気になれる。罪を犯さなくなる。エディブル・スクールヤード・プロジェクトの事例で言えば、ファスト・フードから離れて有機栽培で食べ物を作ると、信仰が生まれ、みんなで一緒に仕事をするという行為につながる。福祉制度が提供するトレーニングとの違いは、お客様に届ける食べ物を作る、農作業が嫌な奴は看板を作るというように、現実の社会で他者から必要とされている役割があるというところにある。どうしてもタマネギが違ふと感じたら、隣にいる人が「これをやろう」と言うもの、例えばニンジンでも構わない。そのようにして信じられるものが増えれば、社会的健康の実現に近づくことになる。それを作り出すのがソーシャル・ファームの役割である。

例えば「自由の定義とは何か」というような根本的な議論が、日本でなされてきたらどうか。仮に食糧危機に見舞われたとして、そのような自由に食べられない場合における自由とは何か。その答えは、農業をしていけば見えてくる。なぜなら、生きるのに必要であり、スピードアップ

しようにもできないという点において、農業は決して変わることはないからである。議論はどうしても農業や食に行き着くことになるだろう。人間は必ず死ぬという真実の中から、いかにして「自由」や「快樂」を見出すか。このような根本的な議論を厭わない日本人が増えなければならない。

究極的には、食べ物を作ることの尊さにおいて、障害の有無は関係ない。障害者の「美味しく食べられればそれでいい」というシンプルな考え方は豊かさでもある。このような高潔な人格を、能力が低いとみる人もいるかも知れない。しかし、そういう人は食べているだけである。障害者と同じくらいにあんなにたくさんのタマネギを作れるのか。そこに感謝や尊敬が必要である。私たちは時代の転換点に来ている。もはや健常者が「障害者が働いた！ワーイ！」と言う時代ではない。障害者から学んでいる場合でもない。障害者が負わされているハンデを解消しなければならない立場にあるはずである。先に述べたスロー・フード・ツアーでは、こういうことを参加者が気付けるようにしたい。それが当社の使命であると考えている。

※：米国カリフォルニア州バークレイにあるマーティン・ルーサー・キング Jr. 中間学校で 1995 年に開始された。教師や調理師、保護者、有機農業生産者などを巻き込んで、今の日本で言う「食育」と同様のものを行う。校庭で畑を耕し、有機栽培された食材を用いた給食を児童生徒たちに無償で提供し、それぞれの食材を歴史や文化、自然科学などの教材とする (<https://edibleschoolyard.org/>)。その初期の活動が記されたウォーターズ著『The Edible Schoolyard: Learning in the real world』(1999 年、日本語訳『エディブル・スクールヤード—学校を食べちゃおう！』2015 年)によれば、それまで荒れていたその学校を立て直したという。なお「中間学校」とは日本の小学 5 年～中学 2 年に相当する。

農業の仕事づくりについての感想と現在考えていること

田中直子（事務員など・現在、農業勉強中）

野宿者支援活動の経験を踏まえたうえで

私が約 20 年前に関わっていた野宿を余儀なくされている方々の支援で、一つの選択肢としては、野宿からとりあえず簡易宿泊所（ドヤ）などの住居を構え生活保護を受けて、県営や市営住宅へ転居することが多かった。その後の生活を伺いに住宅訪問すると、自治会で役員を務めるなど、地域住民とうまくやっておられる方がいる一方で、隣近所の人間関係やこれまでの生活習慣などで様々な困難を抱える方もおられた。中には、電気代を節約するためということ暗闇の部屋の中でじっとしている方もおられた。野宿しているときは周囲の人との関わりがあったのだが、これでいいのだろうかと感じた。

生活保護を受けている人も炊き出しなどの機会にお会いすることがあったが、炊き出しや越年活動に全く来ない人もいた。ドヤを仮の住まいとして生活保護を受給した方に、安否確認を兼ねて、部屋が広い公営住宅を勧めていたが、それ以上の支援は難しかった。

仕事作りや人間関係作りの難しさや必要性は感じていたので、シンポでの農業で仕事づくりをされていることは、とても興味を持った。また、「おとな食堂」として採れた野菜を利用していること、予想以上に色々な種類の野菜を育てていることにも驚いた。さらに、実際に畑で働いてお

られる方から生の意見が聞けて良かった。あの大きな会場で聴衆を前に生き生きと楽しそうな表情でお話されていた。その姿を見て、収入の多い少ないの問題ではなく、人間関係が作れて生きがいにもなっているという意味で、仕事づくりとして成り立っていると感じた。

職業としての仕事で、いくら現金がもらえたとしても、やはり人間関係は大切であると常日頃から思っている。仕事仲間どうしでトラブルが起きた場合でも、そこで仲裁に入る人の存在は大きい。世間一般であれば、トラブルを起こすと厄介者扱いされて、仕事を切られてしまいがちであるが、シンポで報告されていた取り組みには色々な人が関わられるように思った。

どのような経緯で農業に関心を持つようになったのか

母が家庭菜園で小さい頃から野菜を育てていたの、割と身近に感じていた。高校の時に農業の時間があり、色々な作物を植えたところ、うまく育ったものもあったが、難しかったものもあり、もっとうまく育ててみたいと思っていた。保育士として働き始め、保育園に通ってくる子どもに様々な種類の食物アレルギーがあり、食育に関心を持った。保育の仕事を通して、歯が生え始めたばかりの小さい子どもがメザシや玄米を食べる姿を見て、さらに関心が強くなった。職場の保育園で子どもたちと一緒に家庭菜園的な野菜作りを体験した。烏骨鶏も飼っていて糞を堆肥にしていた。それらが楽しかったこともある。

しかし、今の自分にとっての原点は、自分の子どもの不登校をきっかけとして、子どもの居場所作りをしてみたいと考えるようになったところにある。子どもには家と学校しか行くところがなく、もっと居場所があれば違うのではないかとその時に強く感じた。居場所作りをするために寄付金だけに頼るのではなく、現金収入として農業を考えるようになった。ただ、すぐには収入が得られなさそうなので、始めるべきは今ではないと思っていた。ところが、今年の夏にストレスから体調を崩して仕事を辞めた。このときに、体力を使う農業なら、むしろ早く始めた方がいい、始めるなら今しかないのではないかと思った。屋外で活動する方が体に良いとも感じていた。そこで、仕事を辞めていた私に「何かしてみたいことは？」と子どもが通うフリースクールの先生から聞かれて「農業をしてみたい。」と言ったら、「これから農業の学校を立ち上げようとしていて、今、第一期生を募集しているみたい。」と教えていただき、すぐ申し込み、現在勉強中。全く知らなかったのだが、農家さんになるためには研修を受ける必要があった。

ますます農業に関心が高まるものの、就農のハードルも感じている。スクールで教わっている先生によれば、今、新規就農が盛んな地域もかつては閉鎖的だったが、そこに住んでから農作業の様子を見て、しばらくしてから「使っていない農地を使って欲しい。」と地域の方から言われるようになったという。農地は借りることも出来るが、知らない人に貸してくれる人はあまりいない。そのための人脈を作るためには、少しは農地を自分で買い地域に入っていけない。そもそも、移住すると畑のことも初めてで慣れない上に、新たな人間関係を作っていけないといけず、新しいことがたくさんあり過ぎて大変だとのこと。そこで、今の生活環境を変えずに、近所で畑を借りる方法がないかと考えている。

農業の講義や実習を受けて気が付いたこと、学んだこと

スクールでは、長さ 11m の畝 5 本が使える。すると、家族などだけでは食べ切れない量が収穫できる。今は大根や白菜、岩津ネギ、ニンジン、キャベツなどが収穫できる。同じ種類の野菜を

飽きずに食べ続けるのは難しいので、加工方法も勉強しているが、思ったより量が多く困っている。これだけの面積でも作業がなかなか追い付かず、夏には小松菜が自分で食べるには美味しいとはいえ、販売用の袋に入りきれないくらいに巨大化した。大量に収穫できて食べ切れず放置していると、害虫を呼び寄せてしまうようで、他のスクール生が「虫がいっぱい来る」と言っていた。それは私のせいなんですけど…。

農家さんにとって当たり前であることを知らず、後になって知るということが、よくある。例えば、野菜の完成形は見たことがあっても、育つ途中は見たことがない。何を知らないかを知らないから、先生に質問のしようがない。「知らないってすごい」とつくづく思う。習う側が何を知らないかを知らないから、教える側も大変だと思う。

先生や農家さんの畑を見学する授業があり、ニンジンの畑は雑草だらけだが敢えて抜かないという。ニンジンはナズナと共存できるし、ナズナは七草の時に出荷できるから抜かない。ほうれん草は雑草があるとむしろ良く育つとのことである。白菜は真夏の暑いときに種を播いて苗を育てる。その理由は種まきのタイミングが遅れると分かる。冬になっても葉が巻かないからである。苗を購入したらうまく育てられたが、種まきから自分でやるのは大変だった。言われて初めて知ることばかりであり、ひとつひとつが驚きであり発見である。

先生が見ていないところでは失敗を繰り返している。例えば…

- ・ 夏のある日、マニアックなものを販売している苗屋さんで、ネギの苗を見つけたので購入した。枯れかけていたので慌てて水をあげた。すると、ほとんどが炭疽病にかかって腐ってしまった。水をあげる必要がない「干し苗」というものだったことを後になって知った。もったいないことをした。
- ・ タマネギの苗を育てていたセルトレイをコンクリートの上に置いていたら、その苗が腐ってしまった。後で土の上で育て直したらうまく育った。コンクリートの上だと水はけが悪くて温度が上がりやすいからだろうか。
- ・ ニンジンが発芽させるのが難しく、こんなに有難いものだったと気が付いたものの、せっかく根が出たのにヨトウムシに咬み切られてしまった。
- ・ モグラに野菜をひっくり返された。

これまでしてきた仕事との異同については、あまり考えたことがなかった。作物を観察して問題があれば原因を探るところは、保育で自分の状況をうまく訴えられない子の状態を観察するのが大事であることと似ていて、応用が利くかも知れないが、別ものだとも思う。子どもの具合が悪いときは、病院や専門家の、ひいては「蜂蜜を1歳未満のときに与えてはならない」というような情報の助けを借りる。野菜の調子が悪いときも、ある意味で似ているが、個性が大きいように思う。ダイコンを研修生全員が育てていたが、でき具合がみんな違う。毎日来ている人のものが立派になるような気がする。大根は石がなくても二股になることもある。害虫が来る畝と来ない畝がある。雑草の生え具合も場所ごとに違う。今のところ、そもそも野菜の調子が悪いかどうかをどのように判断するかも勉強中で、失敗から学ぶことも大切だが、先ほどのネギの干し苗の例のように良かれと思って世話して失敗することもあるので、知識も重要だろう。

目指していること

原点として一番やりたいことは、子どもの居場所作りである。既に数多くの団体がそのような

場所を運営しているが、大きな団体や寄付金に頼らないで作り出したい。その手段として農業を考えている。農作業には作業工程が多く、簡単な作業でも誰かの手伝いが必要な場面はたくさんあるので、子どもや高齢者、海外から来た人など、家に閉じこもりがちで居場所が少ない人が積極的に参加できると思う。不登校の子どもたちの多くは、役割が学校にも家にもないと思っていて自信をなくしていると思う。戸外に出て動植物に関わることで、その成長過程が分かれば一人ひとりに役割があることを実感できる。そして、旬の美味しい野菜を食べれば元気になれる。親子で気分転換できる場所にもなればいいと思う。最近では技能実習生が腐ったキュウリを食べて飢えをしのいだというニュースをみて、日本に半分騙されて連れて来られたにしても、一緒に作業をして新鮮な野菜を渡せないものかと考えている。

運転資金を確保するなど事業を持続させる方法について、特に具体的なアイデアはないが、とにかくやりたい気という持ちは強い。最初はアルバイトしながら半農半Xのようなことを考えていたが、やりたいことが増え過ぎて、農地がたくさん必要で他のことに割く時間がなさそう…。基本的に食べたい野菜を育てたいが、漢方の薬草、ハーブ、綿花、ホップ、藍なども育ててみたい。また烏骨鶏やヤギなど畜産にも興味がある。農作業の体験に来られた方には、半額程度で野菜などが購入できるようにする。その他、漬物、ジャム、ピクルス、味噌、お弁当、ふりかけ、カット野菜などの加工品については、最初から店舗を構えるのは大変そうなので、移動販売から始める。販売促進のためには、あちこちの知り合いの食堂や施設に収穫物や加工品を提供できたらいいなとほぼ妄想に近いことを日々考えている。

第5章 本シンポジウムの総括と学術的意義に関する覚え書き

網島洋之

1. はじめに

コロナ禍云々とは別の意味で、時代は変わりつつあると思う。「農福連携」という言葉が生まれてから10年近くが経過し、もはや日本社会に定着した感がある。何しろ、植物工場を設置する際に採算を取るための一戦略としても提案されるくらいである(BASF ジャパン株式会社)。さらに、農水省と厚労省が連携し始めたという。しかも、当初は障害者雇用の文脈で語られることが多かったが、つい先日、2021年2月16日から17日にかけて、「生活困窮者を対象とした農福連携に関する全国初のシンポジウム」がオンラインで開催された。本シンポジウムはその「全国初」に1年以上先駆けていたことになる。

個人的なことを言えば、私が釜ヶ崎や大阪市内の野宿の現場でウロウロするようになり、都市の大量失業および貧困と、農村の過疎や農業の人手不足が、根本的には同一の問題なのではないかと考え始めたのが2000年前後。しかし当時、貧困は日本ではなく発展途上国の問題であると考えられていた。夜回りに東南アジアの留学生が参加したときに、ある野宿者がその留学生たちに「本当の日本はこんなじゃないぞ」と説いていたことを思い出す。一方で、規制緩和の嵐が吹き荒れ「全国総寄せ場化」が進んでいた。現代版「人夫出し業」つまり労働者派遣業が1986年に合法化された時点で既に危惧されていたことである。2006年、NHKスペシャル「ワーキングプア」が世間の耳目を集めた。そのころ、大阪市内各地の公園で野宿者の強制排除が相次いだ。排除される側の多くは、まともな仕事さえあれば誰の支援も必要ないと訴えていた。つまり経済の問題である。どう考えても都市と農村や農業の関係がおかしいのだが、「都市研究者」も「農学者」も私の考えを鼻で笑っていた。ただし、私の恩師は「都市のホームレスに農業は難しいのはいか。むしろ工場を建てるべきである。」と喝破した。事例報告(1)で報告した失敗談を予見していたかのようなのである。

いずれにしても、現在「農福連携」と呼ばれているものに対する世間の見方は、2000年代に比べると隔世の感がある。今回講演していただいた小島さんは、上述の「全国初」でもお話しされるなど多忙を極められているが、最近SNSで次のように投稿していた。

10年以上前、「農を食と職に」を目指して、1人で10坪の市民農園を借り、ホームレスの方々と一緒に野菜作りを始めた頃は、国の制度も同じような取り組みをしているところもあまりなかったのですが、行政自体が「農で自立を目指そう」という方向になるとは思ってもみなかったです。時代が変われば国も変わるんですね。

今後この「農福連携」というキャッチーな言葉はますます広く使われるようになるだろう。しかし、シンポジウムのメインタイトルは「農業分野の仕事づくり」とした。「農福連携」はサブタイトルに入れて、先進事例として学ぶべきものと位置付けた。というのも、この言葉には特に定

義があるわけではなく（農水省 2020）、それぞれの事例が「農福連携」に該当するか否かは、ひとりひとりの見方次第だからである。

2. 「農福連携」に関連する用語について

本題に入る前に、用語の異同を整理しておきたい。「農福連携」に似ているがそれよりも深い歴史を持つ概念はいくつかある。例えば、埼玉福興の大規模感と比較すれば、前半で報告されたひと花プロジェクトやはばたき作業所の取り組みは「園芸福祉」と呼ぶに相応しいかも知れない。つまり、「農業」ではなくて「園芸」を「福祉」と組み合わせる行為である。しかし、これもまた誤解を招く表現である。なぜなら「園芸福祉」は、園芸を行う機会を、その機会を持つことが難しい一般市民に提供することだからである。つまり「園芸福祉」が言い表すのは園芸の機会を提供するという事業所側の行為のみであり、実際に労働者や利用者が主体的に営んでいるのは「園芸」そのものに他ならない。

「園芸」という言葉がまたややこしい。さまざまな辞書を参考にしたうえで私なりに定義を考えると、「耕種農業と芸術の間にあるもの」となるだろうか。一方では、植物を育てるという意味では耕種農業である。他方では、特段の技術や労力が必要で、育て上げられたもの自体やその過程に見出される美を重視するという、二重の意味で芸術である。例えば、今日の機械化された稲作を園芸と思う人はいないであろうが、トマト栽培は園芸に当てはまる要素を数多く備えている。支柱を立て誘引する。果実をひとつひとつ成熟度合いを確かめながら摘み取る。これらのような細かい作業は稲作では必要とされない。とは言え、トマトの果実に美ではなくリコピンの抗酸化作用や福沢諭吉の肖像画を見るようでは、農業であると言えるかも知れない。しかし栄養素や金銭的利益が十分に得られなければ、外野から「それは農業ではない」と言われてしまう。園芸と農業を厳密に区別することは難しい。

次のような観点から区別してみよう。植物が育つ過程で放つ美に見とれて手の動きを止める時間を確保するのが園芸で、それに目もくれずひたすら収穫物を栄養素なり金銭なりに変換するために手を動かすのが農業であると、仮定する。すると、作物の姿に美を見ることを目的としないかで区別できることになる。ここで注意しなければならないことは、美を目的としていなくても美を感じざるを得なかった瞬間は、農業の歴史の中で無数に存在したはずである。驚きという、美がもたらす情動が発生したからこそ、ある発見につながるような未経験の出来事が起きたときに、それをそうと知覚できたはずである。つまり、無数に経験してきた未経験の出来事の中で、今この瞬間に経験していることには特別な意味があると気付くことが、何らかの自然の法則を発見することにつながる。そのときに生じる驚き、すなわちワクワクドキドキする感じは、作業している本人の目的意識とは関係なく、否応なしに美的経験をもたらしたと考えざるを得ない。だから農業技術は発展できた。先に述べた「芸術」は「科学」と言い換えても良い。ただし、研究者の生き方が研究の内容から切り離された現在の自然科学ではなく、高木（1998）の言葉を借りれば、かつての「乾いて」いない科学という意味である。

農業と園芸が分化していない状況下でこそ、人間は幾多の新技术を生み出してきた。むしろ、その両者が分化して農業において技術革新が飽和した状態は、歴史の中では例外的であると言える。それでは、分化の末に園芸ではなくなってしまった農業というものは現存するだろうか。もしあるとすれば、それは発展する可能性が既に実現され尽くした、予定調和で、良く言えば安定

した、悪く言えば陳腐な営みであろう。裏返して言えば、驚きという、ある意味で期待に反するものを期待するのが、園芸である。なお、期待に反することばかり続き過ぎると、今度は期待通りのことが起きたときに意外と驚きを感じてしまう。個人が農業技術を習得する過程では、このような場合もあり得る。驚きは両義的であり、全てが期待通りに進むようになるまで、農業は園芸である。やはり、農業と園芸は区別が難しい。

「園芸福祉」とよく似た用語に「園芸療法」というものもある。松尾（2005）によれば、前者の中でも、後者は特に療法的支援を必要とする人を対象としたものである。そもそも後者の方が先に日本に導入された。当初は治療やリハビリテーションに活用されるためであったが、まちづくりなどさまざまな分野に広く浸透するにつれて、「療法」と呼ぶには無理があると考えられる場合が増えた。そこで生まれたのが前者の概念である。さて、ここで問題になるのが、「療法的支援を必要とする人」とは誰のことなのかである。

障害者解放運動の重要なターニングポイントのひとつが、1970年前後に美濃部革新都政に対峙した「府中療育センター闘争」である。脳性麻痺の障害者が、自分たちは医療の対象ではないという、今から考えれば当たり前のことを主張した（NHK 2015）。一方で、園芸療法は障害者を対象にすると明記する書籍もある。一見矛盾しているように見えるが、後者で言う「障害」が、障害全般ではなく、治療やリハビリの対象とされる特定のタイプの障害を指していると解釈すれば、辻褄が合う。例えば精神障害は、身体や知的、発達の各障害とは異なり、治療の対象になるものと定義されている。やや古いですが、これに符合するのが、2001年に秋田県内で園芸活動を実施している福祉施設等を対象に行われた調査の結果である（神田ほか 2001）。「自分たちが実践している園芸活動を園芸療法だと位置づけているか」という質問に対して、「そう位置づけている」は少数派であるが、精神科病院の多くが含まれていた。それ以外つまり老人福祉施設や知的および身体障害者施設では、「園芸療法だと思うが、そう位置づけていない」や「園芸療法だと思わない」が過半数を占めた。園芸療法だと思うのにそう位置づけていない理由としては、「活動の目的や考え方が療法と異なるから」が最多である。以上を踏まえると、「園芸療法」と呼ばれているのは、主として精神障害者を対象とした園芸福祉であると考えられる。

そしてさらにキーワードをもうひとつ。「農的福祉力」である（池上 2013 参照）。「農福連携」よりも少し古く、初出が 2007 年である。「福」と連携する以前から、「農」には福祉の潜在力が備えられているという。生命の再生産である農的な営為は本質的に創造的だからである。ここで言う「福祉」は、制度化された社会福祉（welfare）などよりも広い意味の、全ての人が追求している幸福、つまり「良く在ること（well-being）」を意味する。それは自動的に与えられるものではない。この潜在力に人びとが主体的な意思で働きかけて初めて実現される。だから単なる「福祉」でなく「福祉力」という表記になるわけである。このような福祉力を意図的に活用しているのが、先に取り上げた園芸福祉や園芸療法である。ただし、それらは農的福祉力の全てを活用しているわけではない。園芸は都市の中に置かれた鉢植えでも可能であるのに対して、農的福祉力は農村や農業の背景をなす農的環境全体を視野に入れて初めて十全に発揮される。換言すれば、園芸福祉は一個の植物が育つ過程を背景から切り離すことを許容するのに対して、その植物が育つために必要な水源や畦畔など農的環境を維持するための地道な労働の機会にも農的福祉力は潜んでいる。先ほど農業と園芸の異同について述べたが、ここにまた別の論点があり、後で再び触れる。

3. 「農福連携」 解題

前節で取り上げた用語と比較することにより、「農福連携」という造語に込められた意味は浮き彫りになるであろう。まず、些細な論点であるが、障害は医療の対象ではないという理由で、「園芸療法」よりも「農福連携」を好んで用いる福祉関係者は、恐らく少なくないと思われる。本題は以下である。「園芸福祉」と「農的福祉力」はそれぞれ「園芸」「福祉」と「農的」「福祉力」というように2個の要素に分解できる。これに対して「農福連携」は「農」「福」「連携」と3個の要素から成り立つ。「農」と「福」は「連携」という行為の主体であり、ただの農業や農村、そして福祉ではあり得ない。前者は、農業を営む主体や団体、あるいはさらに農政を加えた農業セクターであると考えられる。それでは後者の「福」を同様に考えても良いだろうか。福祉に関係するものであることは間違いない。しかし、園芸福祉や農的福祉力の「福祉」のような、遍く人間を対象とするものと捉えるには無理がある。なぜなら、さまざまな関連組織のウェブサイトなどで、「障害者等」というような形で対象が限定されているからである。実際には、社会福祉事業を実施する組織や厚生労働省が「福」の側として関与している。つまり、農福連携の「福」は社会福祉セクターであると考えられている。しかし、現状においてそうだからという理由で、金輪際そうであるはずだと断定して良いだろうか。他の解釈の可能性を考える必要はないだろうか。

そもそも「社会福祉」が何を指すか、実は意外と自明ではない。一般的に言えば、広義には「社会全体の福祉向上をめざすこと」(大辞林第三版)である。この目的を達成するための手段として、狭義には「社会的弱者に対する公私の保護および援助」(デジタル大辞泉)などと説明されることが多い。ここで「社会的弱者」とは援助が必要な人のことだから、「援助が必要な人に援助を行うこと」という同義語反復であり、結局「援助」が唯一の要素である。具体的には、消費財やサービスの供給であり、「福祉から就労へ」が提唱されて以降、それらを間接的にもたらす就労機会も提供されている。この点で農福連携は援助に関与しているので、確かに社会福祉の「福」であると言えなくもない。そうだとすると、理論的な検討課題がいくつか浮かび上がる。

第一に、農福連携は早晩、社会福祉が直面しているものと同じ難問にぶち当たる。すなわち、どのようにして援助対象の範囲を線引きすべきなのか。「社会福祉の対象論」と呼ばれる議論であり、「社会福祉とは何か」という問題と不可分である(丸岡 2018 参照)。現時点で確実なのは、社会福祉では「誰を対象とするかしないか」を問えるということだけである。これは農福連携にも当てはまる。先に言及した農福連携の対象を説明する際に多用されている「…等」という表記は、これを暗示している。農福連携の対象は、社会福祉のそれと連動して対象を限定されたり、あるいは自律的に対象を拡大したり、あるいはさらに社会福祉にその対象を拡大すべく影響を及ぼしたりするのか。農福連携に独自の対象論が打ち立てられるべきなのか否かは、今後の重要な検討課題となる。

第二に、「農」と連携した社会福祉は援助対象者をどのように援助するのか、いかなる点において社会福祉であると言えるのかである。現在の社会福祉制度が採用する方法論は、「個人や家族の所得を一定水準まで上げ、医療、住宅、教育、レクリエーションなどの福祉を増大させる」(ブリタニカ国際大百科事典・小項目事典)ことである。しかし、単に就労や所得向上の機会をもたらすだけでは、連携相手が「農」である必要はない。その証拠に、いかにして障害者就労支援事業所の工賃を上げるかは、農福連携が唱道される以前はおろか、今でも未解決課題とされている。むしろ、就労機会を確保したいという一点において、人手不足を埋め合わせしたい「農」と、偶

然利害が一致しただけの相互依存関係のようにも見える。現時点では産業構造を反映しているという意味で構造的と言えるかも知れないが、仮に農業以外の産業分野でも人手不足が深刻化するなどの変化があれば容易に崩れかねない、一時的な関係である。連携相手が「農」でなければならない理由は他のところにあるのではないか。

それでは、現行の社会福祉制度は、農的福祉力に込められているような広い意味の福祉 (well-being) を、どのように位置づけているか。この点が非常に曖昧である。既に指摘されているように、園芸福祉は社会福祉において効用を期待されつつも、その制度と密接な関係を構築できていない (武山 2019)。にもかかわらず、社会福祉セクターは対象者が農園芸活動に関与することの利点を随所で力説している。その中には、就労や所得向上の機会には必ずしも結びつかないような幸福感も含まれている。例えば、「自然と触れ合うことや作物の育成を通じて精神面のリハビリテーション効果を得られる」(大和リース株式会社)、「地域コミュニティへの参加機会を得られる」(株式会社オプティム) などである。これらは他でもなく農的福祉力に由来するものである。しかも従来の社会福祉の射程外に置かれていた新しい要素である。これらの新しい要素を、農福連携の推進者たちは、本気で社会福祉制度の内部に定位しようとしているのであろうか。もしそうであるならば、定位させることの正当性を、社会福祉とは何かという観点から吟味しなければならないことになる。しかし現状では、そのような手続きを抜きにしたまま、「農」と社会福祉セクターの連携が良いこと尽くめであると誇示するために取り付けられているような印象を受ける。

これがいかなる問題を引き起こし得るか。例えば、生活保護受給者バッシングが起きているとしよう。ある受給者は、重度障害者でもなければ高齢でもないのに、「働けるはず」だと言われている。その受給者が就労自立を目指したり、あるいは耕作放棄地を再生させるなどして農業セクターに貢献したりするために、労苦を耐え忍んで農作業に汗を流す。いかにも美談である。普段はバッシングを行う者も留飲を下げるかも知れない。今度は逆に、その受給者が同様に農作業に勤しんだ結果、所得を増やすことができず、ただ幸福を感じた。本当は辛いのに周囲に配慮して「楽しい」などと強がりを使うかも知れない。このような事例をバッシング常習者が嗅ぎ付けた場合に、その受給者を標的にする危険性は否定できない。「自分の所得が高いのは幸福を犠牲にして努力しているからだ。それなのに高額の所得税を取られ、それが社会福祉に使われている。」という類の嫉妬混じりの優越感が、生活困窮者バッシングの背景にあるが、それが余計に刺激される可能性がある。社会福祉制度の枠組みの中で、不用意に農的福祉力の魅力を主張すると、この手のバッシングを招来しかねない。このような事態に耐えるために、社会福祉制度が農的福祉力に働きかける主体となることの正当性を、論証しておかなければならない。要点は、ある人が農的福祉力を享受したくてもそうできない事態は、社会福祉制度が解決すべき問題なのか否か。社会福祉の対象論に属する問題である。

以上、農福連携の「福」が社会福祉セクターであると措定した際に浮かび上がる問題点を指摘してきたが、第三に、別の可能性を検討したい。社会福祉の対象が誰かを問えるということは、対象にならない者も存在するというを示唆する。先の社会福祉の定義に関する議論に則れば「社会的強者」と呼べる存在である。それが具体的に誰であるかをここで論じる余裕はないが、資本主義体制下における強者であることはほぼ確実である。この社会的強者の在り方を問うところこそ、「福」の連携相手が「農」であることの重大な意義なのではないか。かれらは「福」と「農」に何をしてきたか。一方で労働市場から多くの人びとを排除した挙句に自己責任論を、他方で日

本の農業を非効率的であるとしていわゆる「農業不要論」を、唱えてきたのではないか。つまり、共に社会的強者から「社会のお荷物」的な扱いを受けてきた「農」と「福」だからこそ、必然的に連携、いや連帯しなければならないのではないか。

ここにおいて、「福」は社会福祉セクターというよりむしろ「社会的強者」に抵抗する社会運動のことである。また、「農福連携」の「農」は農業セクター全てを包含するものではなくなる。つまり、「社会のお荷物」と呼ばれてきた、農業セクターの中でも労働生産性が低く国際競争力が弱いと評価されてきた部分である。しかし、このような「農」だからこそ、「福」と連帯することにより存在意義を取り戻す。ところが以前から、いや、そうしなければ取り戻せないという指摘がなされていた。津野（1995）は次のように指摘する。

中山間地域にある小さな農業の生き残る道は、資本主義の抱える病根への手当て、そして、大衆社会の進行に苛まれる人間性の回復、という人類の直面する大命題のなかに求めなければ未来の価値はない。（中略）こうした諸問題に対して、農業の側からの対策や提案がなければ、農業は産業化社会のお荷物としてますます軽んじられ、補助金政策の一対象の位置から脱離することは困難であろう。

そしてこれに呼応するかのように、末崎（2018）は社会福祉を次のように定義する。すなわち、「資本主義制度に固有の歴史的・社会的な構造上の欠陥から生まれる社会的問題に対応するための社会的方策」である。いずれの主張においても、資本主義が構造的に抱える矛盾が問題意識の根底に据えられている。これでは「農」と「福」が連帯しない方がおかしいというものである。とは言え、連帯するとは具体的に何をすることなのか。そして、このような議論が全くなされないまま農福連携が持てはやされている現状は、「農」や「福」が未だ「大衆社会の進行に苛まれている」ことを示唆している。

今や農福連携と社会福祉制度の関係を根底から再考しなければならない。「小さな農業」が維持されることを望んでいるのは誰か。その誰かが生きるうえで、資本主義経済のどこに問題があるのか。その問題を克服するために、どのような社会政策が必要なのか。このような手順で論理を積み上げていく必要があるのではないか。その一例として、未だ途半ばではあるが、小規模農業と非正規雇用労働者の連帯の可能性を、私は論じたことがある（拙稿 2015a 参照）。

いずれにしても、それぞれの実践を呼称する際に、いかなる言葉にいかなる意味を込めるかで、その人の福祉観や障害観などの視座が表現される。だからこそ、それぞれの事例を「農福連携」だとか「園芸療法」だとかと簡単に決め付けるのではなく、なぜそのように呼称できるのかを自問自答することにより、相互に学ぶべき点がいろいろと見えてくるはずである。次節では、本シンポジウムで取り上げたそれぞれの事例が、「農」と「福」のどちらから始まり、なぜ他方と「連携」しようとしたのか、そして今もなおそうする必要のあるのかについて解釈を試みたい。

4. なぜ「農」と「福」の「連携」か—それぞれの背景

事例報告（1）は、最初は野宿労働者の収入源を生み出すことを目的としていた。その意義と限界は他に譲る（拙稿 2015b ; 2018a ; 2018b 参照）。言わば、当初は埼玉福興のような農福連携の釜ヶ崎版を夢に見ていたものの、困難に直面した末に、こぢんまりとした園芸福祉に舵を切りつつ

ある。その際に「食」や消費者の存在を重視している。農作業を賃金労働としてしまわないことの是非が問われている。「畑に来ている時以外の時間」に言及せざるを得ない点について、後ほど触れる。

事例報告(2)は、地域社会から孤立しがちな単身高齢生活保護受給者に「やること」を提供する事業の一環である。農業という観点から見れば、利用者たちが失敗を堂々と楽しんでいる点が印象的である。活動中の時間を仲間とともに体を動かしながら過ごすことが究極の目的であるという点において、現行の社会福祉制度を超越している。他ならぬ園芸福祉の事例である。技術的な課題を挙げるとすれば、作業の頻度が限られているために真夏に収穫や灌水が十分にできない。これは高齢者福祉施設に共通の悩みである。

事例報告(3)は、生活困窮者支援に地域の資源を活用するところから出発していた。農業を基盤として生活困窮者支援を行おうとする発想や実践は決して新しくない。報告に登場した京丹後市の岡田さんは、1990年代から既に自宅を改造するなどして野宿者を受け入れてこられた。ただ単に農業が盛んだからではなく、このような先人の先見の明と地道な努力があるからこそこの「地域の資源」である。それを今、労働者協同組合が受け継ごうとしている。「仕事づくり」という観点から見ると、事例報告(1)と同様に金銭にまつわる問題がつきものである。しかし、2020年末に成立したばかりの新法に基づいて法人格を取得した組織が、個人が始めた取り組みを引き継ぐことの意義は大きい。なお、労協センター但馬地域福祉事務所は林業にも取り組んでいて、冒頭で紹介した「全国初」のシンポジウムでも先進事例として紹介された。

事例報告(4)は、釜ヶ崎とは縁の薄い、典型的な障害者就労支援である。「軽作業はしない」という方針を持っていたところ、市街化区域の中に農地が多数散在しているという八尾の土地柄のせいもあるか、近所の農家に声をかけられて農作業をしてみた。すると利用者が元気になっていったので、もっと続けようという話になった。ただし、飽くまで農業をしたいという利用者がいるから手を出しているというだけで、最初から農業ありきの農福連携ではないという。ある利用者が園芸を楽しんだときに生まれる副産物を活用して、さらに多くの地域住民を巻き込むべく事業を多角的に展開しようとしていた。その後コロナ禍で困難に直面したものの、現在は放課後デイサービスを通して農福連携の対象を広げつつある。

講演では一番目に、小島さんが農業を志した理由を次のように述懐した。最初は飢餓をなくそうと考え、農業関係の会社に就職したところ、深刻な人手不足を目の当たりにした。その農業界と仕事を求めるホームレスの人を結び付け、さらに消費者を現場に近づけるために、今の取り組みを始めたという。事例報告(1)にも当てはまるが、なぜ農業でなければならない理由、すなわち農作業が秘めている福祉力の大部分は、実践してみても初めて理解できるものであることが、採録から読み取れる。

二番目の講演では、時間の制約上かなり端折られた話であるが、新井さんの取り組みが縫製業の不振を契機として障害者福祉事業に転換したところに端を発することが語られた。そして「農業はなくならない」という確信だけで農業に参入した。農福連携ならぬ「農福一体」であると表現されていた。新井さんの著書のタイトルでも使われている言葉である。社会福祉事業者が自ら農地を取得して主体的に営農するという意味である。なぜ農業なのかなどとは考える暇も必要もないくらいに、農業一本で突き進んできた福祉の先駆けであると言わんばかりの強い覚悟が感じられた。すると、「農福連携」という言葉が表すものが、「農は農、福は福」とでも言いたげな、事

なかれ主義者どうしの相互依存に感じられてしまうから不思議である。後日談からも、本来「農」と「福」は不可分であるという主張が感じ取れる。「農福一体」は非常に意味深長である。

そして、一参加者として感想などを寄稿していただいた田中さん。就農の動機が、不登校という社会福祉と教育の狭間に陥りがちな課題であることが、重要なポイントである。前節で、農福連携に独自の対象論が打ち立てられるべきかが今後の検討に値すると述べたが、その際には必ず考慮に入れるべき課題である。動植物の成長過程が分かれば、子どもたちは自分に役割があることを実感できると考えている。この「実感」にはきわめて重要な意味が含まれている。「誰一人取り残さない」という類の決まり文句を「取り残している」側が唱えるだけでは、「自分は取り残されていない」という実感を「取り残された」側が持つことは不可能である。

本シンポジウムは、釜ヶ崎という、都市における貧困の集積地から発している以上、最初に関われるべきは、なぜ「福」が「農」と連携しなければならないのかであり、決してその逆ではない。「福」に「農」が相応しいと言える理由について、小島さんは「適材適所」、新井さんは「チームで仕事」と表現した。労働者ひとりひとりの能力は限られていたとしても、それぞれに必ず長所がある。一方で、農業分野は仕事の内容が多岐に渡るので、作業工程の細分化が可能である。だから、労働者がそれぞれ得意なことに専念すれば、農業の重要な担い手になれるという。事例報告(4)でも、ある高次脳機能障害を持つ利用者が作目選択から収穫までをこなし、スタッフは本人ができないところのサポートに徹していた。

しかし、園芸福祉では作業工程の細分化は問題とされる可能性が高い。園芸では、五感を以て生きている植物にかかわり、植物が訴える情報を把握すること、すなわち「感覚体験」と、それに身体を以て対応すること、すなわち「動作体験」が相互に積み重ねられる。これらは表裏一体かつ不可分の関係にある(松尾 2005)。それぞれ、事例報告(1)で言う「観察」と「作業」に相当する。両者が分断される程度にまで作業工程が細分化されると、園芸が分業されるようになり園芸福祉は成立しない。この半世紀以上もの間、「作業の細分化」と「管理と作業の分離」は労働の非人間化の元凶であると指摘されてきた(村田 1964, 1981 参照)。またマルクスも「構想と実行の分離」を問題視していた。園芸福祉の思想は「労働の人間化」と呼ばれてきた課題と符合するところが大きい。

その反面、園芸福祉は、植物の成長に関係が深いところだけを農的環境から抜き出し、その背景にある地道な作業を捨象することを許容するという側面がある。小島さんや新井さんは、その捨象されるような地味な作業にも就労機会を見出している。雁多尾畑農園でも、排水路や畦畔の保守、竹林の間伐などは賃金労働として残してある。短期的に見れば「感覚体験」ないし「観察」が必要ない作業が、農業の世界には確実に存在している。しかし、これらの作業も、作物の成長に関係があるから必要なわけである。ただ、園芸福祉が想定しているような短期間では、作業の成果が実感し難い。地味な作業を実行する人が、数年後に自分自身の目で作物の姿に作業の成果を看取することは、難しいかも知れない。それができるようになれば、実のところ「感覚体験」と「作業体験」が統合されるので「細分化」ではないということになる。思い起こせば、そもそも農業は一人では出来ないからムラが形成され、短期的かつ互酬的な分業は当たり前のように行われていた。

ある意味では、園芸福祉も植物の生育過程を全体的に取り込んでいるわけではない。分業ないし労働の細分化が完全に回避できているわけではない。そうであるならば、私たちが農福連携を

実践する際に、園芸が必須としているような、短期的な感覚体験と動作体験の相互反復に拘泥する必要はなく、むしろそれに代替できる美的経験を提供できれば十分であると考えてみることも可能である。そこで、長期的な「感覚体験と動作体験の相互反復」として何が可能であるかを考えてみよう。例えば、自分たちの些細な労働の成果が積み重なり、数年後には地域を大きく変えていたと実感する経験である。それを実現しようとする挑戦が「エディブルな地域づくり」であろう。そもそも、新井さんの取り組みは当初から、地域で最期まで一緒に生きていこうという実践である。長期的な視点を持つことは大前提である。

ここで言及すべきは、新井さんが提唱していたもうひとつのキーワード、すなわち「生活と就労の一体化」である。一見すると昨今の「ワーク・ライフ・バランス (WLB)」に逆行しているようにも見える。しかし、後日談で明らかにされているように、わざわざバランスを語らなければならないような事態を招来した社会の在り方こそが問われなければならない。労働と生活が一体になること自体が問題なのではない。そうなる労働者の生命が危険に曝されるような、労働の在り方が問題なのである。その極限にある例が、原発の定期点検などにおける、放射線被爆を避けられない仕事である。これは絶対に労働時間を制限しなければならない。就労時間外の生活も犠牲になるからである。この意味ではパワハラも放射線と本質は変わらない。逆に考えると、真の意味でディーセントな仕事とは、生活と一体化しても何ら問題にならない仕事のはずである。むしろ、無理にバランスを取ろうと作業時間を短縮したせいで、近代農業は生態系に負荷をかけてきた。別に昼夜を問わず働くのが良いと言いたいわけではない。オフィス・アワーに縛られずに、気象や作物のペースに合わせるということである。例えば、雨が降る前に一踏ん張りして作業を片付けたら、雨が止むまで休む。夏は早起きする代わりに昼寝する。自然から乖離した都市的生活パターンに巻き込まれていると、これが意外と難しいのであるが。

新井さんは、「東京の『働く』」とは異なり、農業では「体は疲れるが頭は疲れず」と説く。前節で議論したように、農業において、労働力は第一義的にヒト以外の生命と相互に作用し合うために自らの心身を自らに属するものとして活性化させた結果生ずるものであり、資本が用意した生産手段と結合されるために販売される商品ではない。心や体を資本に切り売りしているわけではない。精神的な意味での労働力の再生産は、労働と同時に進行している。だから労働と余暇を分ける必要もない。このような労働力は優れて属人的であり、そう簡単に金銭を介して所有権を移転できるものではない。農業が園芸から完全に分化していない限り、農業には労働力の商品化を阻止する側面がある。恐らく、利潤を重視する資本は、タマネギのような最終生産物を買えるが、このようにしてタマネギを生み出す労働力そのものは買えない。だからこそ、青果物流資本は、生産者が憤慨するような労働力商品並みに低い仕入れ価格を、生産者に強いてきたのではないか。そして、農業生産法人は他の企業とは対照的に従業員を独立させる努力を惜しまないのではないか。

ちなみに、WLBに関する研究では「生産性」という概念が頻繁に引き合いに出されている。しかし全くの噴飯ものである。企業が労働配分率を高めたり労働時間を短縮したりするだけで高まる、つまり物財やサービスをどれだけ生産したかと関係なく操作できる数値を、わざわざ「生産性」と呼ぶ必要があるのだろうか。下請企業や非正規雇用労働者が生産したものの所有権を移転させているだけである。このような働き方に関する限り、収奪すればするほど「生産性」が上がることになる。何者かが労働者の賃金を恣意的に上げ下げしている現実を等閑にしながら、いか

にも労働者の賃金をその労働者が産出した付加価値であるかのように語り、その労働者の生産性が高い低いなどと評価を下すのは、茶番以外の何物でもない。このような「生産」観は、前節で述べたバッシングの常習者が支持するところであろう。新井さんが語る「障害者雇用の素晴らしさ」は、資本主義体制下における多数派に「あなたは働いていますか」と根源的な問いを突き付けるように思える。

小島さんもこう述べていた。「自分の手で自分の食べるものを生み出せることが生きる力となる」。また、「野菜を育てることは自分自身を育てることでもある」。この言葉の意味を、野菜作りを通して就労支援をしたら社会適応に必要な何らかの技能が身につくという程度のものに、矮小化して解釈すべきではない。ここにも労働の非人間化を食い止めるための手掛かりが隠されている。「食べるものを生み出せる」力は、言い換えれば、他の生物を育てる力である。その力を獲得したということは、その過程において自然の摂理を内在化させたということである。この意義は、単に社会適応に必要な技能を身につけたということよりも、はるかに大きい。ある都市住民が急に農地という生産手段を与えられたとしても、生産するための技能を持ち合わせていない以上、何も生産することはできない。自然の摂理を体得して初めて、農地の可能性を最大限に活用することが可能となる。

もちろん、このような「生きる力」は一般労働市場における就労にも活用できるだろうし、そのようにして就職先を見つけないと思う人は多いだろう。そのことを否定できる立場には私はない。実際に、農福連携は労働市場から排除された労働者の就労支援に役立つと考えられている。「引きこもり」や「若年無業者」の「社会復帰」や「社会適応」に農園芸活動が果たす役割を明らかにする目的で行われた研究もある（中本・胡 2016, 中本ほか 2018 参照）。農作業の習得に努める過程で、就労に必要な技能や意欲が向上すると言われている。しかし、就労支援の出口には求職者の足元を見ているかのような劣悪な条件の求人が多いという。どんなに劣悪な条件でも働けるようにするという目的で就労支援を行おうとする支援者は皆無であろう。むしろ、可能な限り条件が良い仕事に就いて欲しいという善意から、必要であれば社会適応のための助言を惜しまないという態度で臨んでいるはずである。だから多くの支援者が悩んでいる。就職した先に非人間的な賃金労働が待ち受けているとしたら、就労支援にわざわざ農作業を利用する必要が果たしてあるのかという疑念を禁じ得ない。むしろ、農園芸活動が就労支援の役に立つ理由を追及すればするほど、一般労働市場の抑圧性が露わになり、そこに求職者を送り込むことを目的とする就労支援の在り方を疑問視せざるを得なくなる（拙稿 2015b 参照）。つまり、農園芸活動の中でも最も大きく人間解放に貢献する要素を捨象して初めて、農福連携は就労支援に役立てられる。農作業を通じた就労支援を称揚する研究は、農的福祉力の最も重要な部分を無視していると言える。残念ながら、そうなるのも致し方ない事情がある。なぜなら、その要素を捨象せずに感知して言語化するのは年月を要する作業であるし、その経験は今のところ専門性として全く社会的に認知されていないからである。

それでは、「野菜を育てることは自分自身を育てることでもある」という言葉は、どのように解釈すべきか。第一義的には、直接は五感で知覚できない自分自身が獲得した何かが、野菜の姿を借りて本人に知覚可能な形で現れることを意味していると考えられる。その「何か」とは、園芸福祉が理想とする状況下においては、紛れもなく野菜を育てる技能である。これは「感覚体験」と「動作体験」の相互作用により形成されるものである。いわゆる「労働疎外」と対照的な現象

であることは論を待たない。また、これと近い内容がヘーゲルの『精神現象学』にも書かれているらしいが、詳細は別の機会に譲りたい。ここで注意しなければならないことは、農スクールやその出口となる雇用就農先では、作業は細分化されていたり管理と分離されていたりするということである。先に述べたように、労働の非人間化の原因となるのは「作業の細分化」や「管理と作業の分離」であると考えられている。それらが行われているのに、それでもなお、農スクールなどの現場では、労働の非人間化が起きていないというわけである。これは一体どういうことだろうか。

分業を別の側面から考えれば、ある一個体の作物が育つ過程に多くの人に関わる余地があるということである。新井さんの後日談でも語られている「人だらけの農業」である。その作物の成長過程のうち自分自身が関与したのは、ほんの一部でしかない。そうだとすると、その作物の成長には自分自身の代わりに作業してくれた誰かが関与していたことになる。育て上げられた作物の姿に映し出されているものは、その成長に関与した人びとが獲得した技能だけではなく、それらの人びととどうしの間にある関係性でもある。その作物を介して、いつの間にか自分自身は他の人を助けたり他の人に助けられたりしていたということが、明らかになる。そこに自分自身の人間関係の広がりや地域社会における所在を確認することができるだろう。ややもすると自分自身では見逃しがちな自分自身の人間的成長の軌跡が、野菜の姿を通して初めて可視化されるというわけである。人間どうしの関係を取り結ぶという意味において、分業には人間的な側面もあることを、改めて思い出さざるを得ない。

ここにおいて、農業と社会福祉のもうひとつの接点が浮かび上がる。農業は一人ではできない。よく言われる普遍的な真実である。これを体得したとき、どれだけ能天気な連中が「自助」を声高に叫ぼうとも、もうひとつの命題も真であることが容易に理解できるようになる。すなわち、農業だけの話ではない。そもそも人間は一人で生きられない。自立とは依存を深める過程である（中村 2002）。今や、多くの社会福祉関係者がおのおの独自に考究した末に、これと全く同じ逆説に到達している。もはや「自立とは依存である」という言説は珍しくない。それに「自立」する主体が個人であるとも限らない。地域の自立についてはどう考えられるであろうか。事例報告（3）でも問われていたが、「自立とは何か」という問題について、農福連携の現場だからこそ獲得できる固有の視座がある。本シンポジウムの議論を全体的に俯瞰して初めて見えてくるのは、このことである。

そのうえで、ある単純な事実をひとつ指摘したうえで、農福連携により農的福祉力が十全に発揮されると、私たちに何ができるのかを、考えてみたい。私たちが農作業に従事しているまさにそのとき、私たちが既に手にしているものは、紛れもない生産手段である。この事実を起点として「農」「福」連帯の可能性を構想できないだろうか。例えば、就労支援ならぬ「就労拒否支援」である。これはマルクスの言う「本源的蓄積」の逆行である。本源的蓄積の過程では、農地などの生産手段から引き剥がされた人びとが、それでも生計を立てるために、都市に流れ着いて条件が劣悪な賃金労働を余儀なくされた。逆に、そのような働き口を蹴るためにこそ、生活の基盤を確保する必要がある。そのための生産手段として「農」を考えることができる。そして、資本が痺れを切らして労働条件を上げるときを、求職者は待つ。このように労働市場全体の雇用条件を底上げできる可能性がある。

もちろん、求職者や支援者が個別に分断されては、この可能性は実現できない。条件が劣悪な求人を断固として拒否するためという目的意識を明確に共有した、集団的な実践が必要になる。それに、生活必需品を自力で確実に生産しなければならないので、相応の覚悟が必要である。しかし、産業別組合が低迷している日本では、労働運動の方法論としても有効ではないだろうか。さらに、労働者たちが農作業の醍醐味に魅せられて園芸の領域に入り込んでしまえば、資本が相当な好条件を提示しなければ、労働者を農地から引き剥がせなくなる。後日談でも述べたように、都市の賃金労働では資本を持つヒトが経営者であるが、農園芸活動では本質的な経営者はヒトではなく作物や家畜である。作物や家畜が労働者を魅了して止まなければ、資本も何らかの手段で労働者に取り入らなければならない。そこでは、資本家が労働力を巡り作物や家畜と競合するという、摩訶不思議な光景が繰り広げられる。資本と自然の関係は本来このようなものであろう。本源的蓄積が始まる瞬間を、悲劇ではなく喜劇として再現する機会にもなる。

5. 結論と今後の課題

「農福連携」は割と新しい言葉であるが、以上の議論から、資本主義体制が構造的に生み出す矛盾に対する手当であると考えれば、「農」と「福」が「連携」しなければならない必然性は、ここ近年で急速に生じたわけでは決してないことが理解される。言う間でもなく、日本社会において資本主義経済の矛盾が最も凝縮されて現れるのは、釜ヶ崎などの「寄せ場」地域である。一見したところ農業と縁が薄そうに見える釜ヶ崎で本シンポジウムが開催されたことも、また歴史の必然であるように思われるどころか、遅きに失した感すらある。いずれにせよ、着手すべき課題に漸く着手できた。本シンポジウムの意義を簡潔に表現しようとするれば、これに尽きるのではないだろうか。

さらに、園芸福祉との関連においても、新たに付け加えるべき知見がある。それがフルに活用し切れていない「農的福祉力」が、本シンポジウムで取り上げられた事例では見事に活用されていた。そのようなことがなぜできたのかと言えば、一見すると「労働の人間化」に逆行しているかのような工夫を、敢えて講じてきたからである。それでもなお農園芸活動が人間的なものであり続けることを可能にしている底力が、「農的福祉力」の奥底に秘められているかも知れない。その底力を農福連携が正当かつ存分に活用できるようにするためには、それぞれの現場を取り巻く地域社会とどのように関わり合うべきかという課題を、私たちが改めて意識する必要がある。

最後に、ここまで全く触れることすらなく取り残してきた課題が一つある。農的環境には「癒し」の機能があると言われることが多い。それを求めて農作業を体験しに来る人がいる。一方で、そのような農的環境を維持するための労働は、決して生易しいものではない。農的環境が自動的に人を癒すわけではない。都市住民の一方的な勘違いである。癒される人がいれば、その陰には必ず、癒すための労を取る人が確実に存在している。農地を維持する責任を引き受ける人たちのことである。この意味において農作業には外部経済が伴う。登壇者ではない田中さんに後日談を依頼した理由は、ここにある。何らかの社会問題に取り組むために農園芸活動の必要性を感じながらも、農地を管理する責任を自ら負おうとする都市住民は、残念ながら多くない。田中さんの文章には、案の定、いろいろな失敗談が記されているが、それらひとつひとつが貴重な記録であり、後続が共有すべきヒントである。雁多尾畑農園の参加者でも自宅近くに市民農園を借り始めた人がいる。これからどんな困難や感動に直面するか、私は傍観者として今から楽しみで仕方な

い。これまで雁多尾畑農園で作業を「手伝う」と言いつつ、どんな粗相をしでかしていたことか。自分の責任で農地を耕して初めて気付くことがあるはずである。

なぜこれほどまでに多くの思考が言語化されていないままなのかと問うてみることも、重要な気付きをもたらすと考えられる。根菜などに付着した土は、都市の台所では「泥」というゴミかも知れないが、そういう扱いをするのであれば収穫の時点で畑に返しておくべきである。「除草」で取り除かれた「雑草」もまたゴミではない。明確な目的意識のもとに、どこでどのように使うかを考えなければならない。その他もろもろ、都市住民は言葉で説明して欲しいと思うかも知れない。しかし、いちいちそんなことをしていたら作業する時間がどんどんなくなる。都市住民が思い込んでいるほどに農的環境はのんびりできるものでない。「癒し」の質に関して議論する余地は大きく残されている。

なお、本シンポジウムの副題は「農福連携と産消提携の先進事例に学ぶ」としていた。当初は「産消提携」にも言及しようと思っていたが、結果的に「農福連携の先進事例に学ぶ」だけで手一杯になってしまった。稿を改める際には、何としても産消提携を射程に入れたうえでの考察を試みたいと考えている。産消提携は有機農業運動から生まれた考え方であるが、その地平のどこかで必ずや農福連携のそれと交差することになると、私は確信しているからである。

引用文献

池上甲一（2013）農の福祉力，農文協。

株式会社オプティム，農業と福祉の融合「農福連携」が注目される理由とは？，<https://smartagri-jp.com/agriculture/540>

神田啓臣・中野麻衣子・保坂奈緒子・高橋春實・吉田康徳・北原克宜（2001）秋田県内の福祉施設等における園芸療法に関する意識調査報告書，秋田県立大学短期大学部紀要 2: 13-21.

末崎栄司（2018）今日の社会福祉における本質の対象認識の分析—歴史的社会的必然性の認識と法則性の発見を求めて，文理閣。

大和リース株式会社，農業×福祉で地域共生社会をつくる！農福連携とは，https://www.daiwalease.co.jp/column/col_1163.html

高木仁三郎（1998）いま自然をどうみるか（増補新版），白水社。

武山梅乗（2019）園芸福祉と社会資源の開発—京都市山科区の事例を通じて，駒沢社会学研究 52: 23-54.

綱島洋之（2015a）自律への希望（後編），フリーターズフリー3: 132-147.

綱島洋之（2015b）農地再生事業による就労困難層の就労機会づくりの意義と課題，食農と環境 16: 99-114.

綱島洋之（2018a）農福連携において労働者の自律性を高めるために何が必要か，日本農業教育学会誌 49 (1): 1-13.

綱島洋之（2018b）生態資源利用による社会的包摂—自然と向き合う労働観と観察眼の再生，大阪市立大学都市研究プラザレポートシリーズ 46.

津野幸人（1995）小さい農業—山間地農村からの探求，農文協。

中村尚司（2002）当事者性の探求と参加型開発—スリランカにみる大学の社会貢献活動，斎藤文彦（編著）参加型開発—貧しい人々が主役となる開発へ向けて，日本評論社。

- 中本英理・胡柏（2016）ひきこもり者の社会復帰と自立性向上に果たす農園芸活動の役割，農業経済研究 87 (4): 319-333.
- 中本英里・山本和博・胡柏（2018）農園芸活動によってもたらされる気分の変化と医療的・福祉的効果の検証，農業経済研究 90 (1): 17-22.
- 農水省（2020）農福連携技術支援者育成研修テキスト.
- 松尾英輔（2005）社会園芸学のすすめ—環境・教育・福祉・まちづくり，農文協.
- 丸岡利則（2018）社会福祉学の知識Ⅲ—対象論のメタ・クリティーク，東邦学誌 47 (2): 79-99.
- 村田和彦（1964）資本主義経営と『労働の人間化』，一橋大学研究年報，商学研究 22: 157-200.
- 村田和彦（1981）企業の合理化と『労働の人間化』，一橋論叢 85 (4): 526-540.
- BASF ジャパン株式会社，植物工場とは？そのメリット・デメリットについて解説，<https://minorasu.basf.co.jp/80045>
- NHK（2015）戦後史証言—日本人は何をめざしてきたのか 2015 年度第 6 回，障害者福祉—共に暮らせる社会を目指して，https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/postwar/bangumi/movie.cgi?das_id=D0001820050_00000

おわりに

本報告書の作成に着手した時点で、開催から1年以上が経過していた。登壇者の皆さんやたまたま駆けつけてくれた旧知の友人には、忘れかけていた頃に採録のチェックや感想、後日談の提供をお願いすることになってしまった。それでも、これだけの量の原稿を集めることができ、お礼の言葉が見つからない。さらに、フロアの皆さんにはアンケートまで実施したにもかかわらず、この間、何のフィードバックもできていない。万難を排して本報告書をお手元に届けることで、お許しを乞わなければならない。他にも、釜ヶ崎講座や釜ヶ崎支援機構、ひと花センター、釜ヶ崎日雇労働組合、大阪市立大学都市研究プラザの関係者をはじめ、大勢の皆さんのご協力があって、本シンポジウムは実現できた。さらに、公益財団法人ユニバーサル財団および公益財団法人トヨタ財団より研究助成を受けた。遅れ馳せながら、謹んで謝意を申し上げます。

最後に、本報告書を編集する段階で、各執筆者の方々の意向を十分に尊重できたとは、あまり自信を持って言い切れないのが、今の率直な思いである。内容の全てに関する責任は私にあることを申し添えておきたい。また、とりわけ第5章は「覚え書き」と題を付したとおり、ワーキングペーパー的な性格のものであると理解していただきたい。皆様からは忌憚なきご批判をいただければ幸いである。

2021年4月7日 網島洋之
tsunashimah@osaka-cu.ac.jp

シンポジウム「農業分野の仕事づくりを釜ヶ崎で」報告書

2021年 7月 15日 第2刷

大阪市立大学都市研究プラザ

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

TEL: 06-6605-2071, FAX: 06-6605-2069

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/index.html>